平成14年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書

第3回 全国フレンドシップ活動

MYOKOゆきんこフェスティバル

Let's Enjoy Snow World!

まえがき

信州大学教育学部長　藤沢 謙一郎

上越教育大学と信州大学は昨年、日本の教員養成のレベルアップをしようということで、両方の大学で連携・協力を進めてきました。昨年の 10 月には上越教育大学で第 1 回目のコロキュウムを開催し、今年信州大学で第 2 回目のコロキュウムを開催しました。開催にあたって、ご協力いただいた両大学の先生方にお礼を申し上げます。

今回のコロキュウムは全国教員養成系大学・学部のフレンドシップ事業のシンポジウムという学生交流を深めようというものを取り扱っています。午後には、このような学生交流の中から生まれる、教員になるにはどのような力が必要かということを、各大学の先生方を交えながら話を進めていくことになっています。

私たちに求められていることは、より実践的な指導力を持ち、地域・保護者・児童から信頼される教師をどんな風に育てていくかということだと思います。大学のカリキュラムを通して学生諸君が自らの力で立ち上げ実行していく力を、私は非常に大きいものだと思っています。わたしもこのようにフレンドシップ事業のシンポジウムに参加して、多くのことを学び、大学のカリキュラムに活かしていきたいと思います。

本日、遠方より参加してくれた学生諸君、また先生方、そしてこの会場をお貸しいただいた国立妙高少年自然の家の方々に心からお礼を申し上げて、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（信州大学・上越教育大学共催　第 2 回コロキュウム開会の挨拶より）

上越教育大学副学長　増井 三夫

7大学の学生諸君、先生方、そして国立妙高少年自然の家の方々、本日この第2回コロキュウム、学生にとっては第3回のシンポジウムが開始されることを大変嬉しく思っています。

藤沢先生がご紹介されたように、日本の教員養成の中核的な改革を担っているもう一方の大学として誇りに思っています。コロキュウムというのは専門家集団のミニシンポジウムだという風に理解していただければ幸いです。

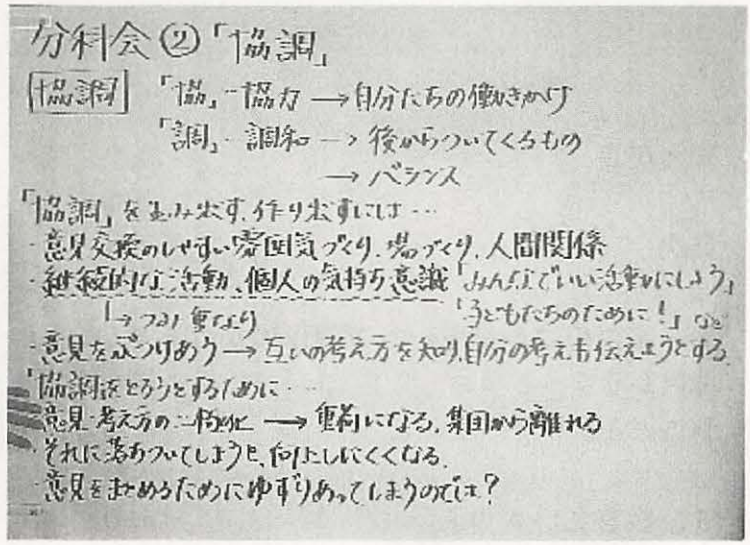
第1回・第2回とコロキュウムを開催することができましたが、その背景にはフレンドシップ事業があったということがいえます。フレンドシップ事業の実績と実践、またフレンドシップ事業の方向性が、日本の教員養成を変えていく学生、あるいは大学のカリキュラムを変えていくのに、大きな内容と広がりと深まりを持ったものであるという確信を持っています。その実践をもとに、両大学が全国に先駆けて試みていますフレンドシップというものの実践を行っている自信があります。第2回のコロキュウムは幸い150名近くの参加を得ました。後日、大変好評を得ました。

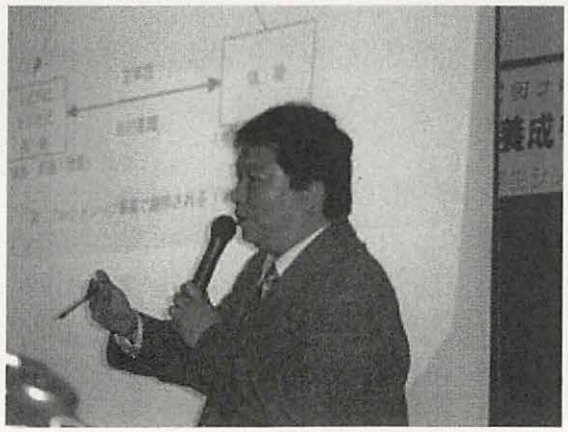
今回のシンポジウムも開催にあたって信州大学の岡部さんと、上越教育大学の伴君がご案内の文章の中で、このフレンドシップ事業が特色ある、素晴らしい実践であると感じているという文面がありました。私はこれを見て、学生たちがこれを見てフレンドシップに非常に誇りを持っているということに深い感銘を受けました。元気がないといわれている教員養成大学の中で、これ程自分たちの活動に誇りを持っている。そして、その実践を全国に発信できるということは、私どももその力を借りて、今後2つの大学生諸君と一緒に、先ほど申し上げました、日本の教員養成大学のあり方について、いろいろな改善と論議を組織していくことの大きな一歩となることを確信しています。

第2回コロキュウムとシンポジウムが成功に終わることを祈って、教員養成大学・学部の一つとして、挨拶に代えさせていただきます。

（信州大学・上越教育大学共催　第2回コロキュウム開会の挨拶より）

ここまで!?
意識の差
生じる
ズレ
どうせ
コミュニケーション
共通理解
共通意識


分科会②「協調」
協調
「協」-協力 → 自分たちの働きかけ
「調」-調和 → 後からついてくるもの
→ バランス
「協調」を生み出す、作り出すには…
・意見交換のしやすい雰囲気づくり、場づくり、人間関係
・組織的な活動、個人の気持ち意識「みんなでいい活動にしよう」
「子どもたちのために!」など
→ つながり
・意見をぶつけあう → 互いの考え方を知り、自分の考えを伝えようとする
「協調」をとろうとするあまり…
意見・考え方の一致化 → 集団になる、集団から離れる
それに落ちついてしまうと、向上しにくくなる。
意見をまとめるためにゆずりあってしまうのでは?



目　次

			page
まえがき	藤沢　謙一郎	信州大学教育学部長	1
	増井　三夫	上越教育大学副学長	2
目次			4
Ⅰ．学生のフレンドシップ活動にかける思い			
仲間から学べる幸せ、全フレにあり	伴　峰昌	上越教育大学４年	6
私の好きな場所…全フレ	岡部　桂子	信州大学４年	7
Ⅱ．教官あいさつ			
師弟同行・師弟共育	土井　進	信州大学教育学部教授	8
第３回フレンドシップ全国学生シンポジウムに思う	濁川　明男	上越教育大学学校教育総合研究センター助教授	9
「いろいろな妙高」から「開かれた妙高」へ	釜田　聡	上越教育大学学校教育総合研究センター講師	10
Ⅲ．信州大学・上越教育大学共催第２回コロキュウム			
第１部：第３回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム			11
プログラム			13
実践報告			
・上越教育大学	「学びのひろば」		14
・福島大学	「自然体験学校」		16
・横浜国立大学	「わくわくサタデー」		18
・広島大学	「ゆかいな土曜日」		20
・鳴門教育大学	「総合学習研究会ふれあいアクティビティー」		22
・熊本大学	「Make Friends」		24
・信州大学	「信大ＹＯＵ遊広場」		26
分科会			
・第１分科会	「学校・地域・家庭との協調」		28
・第２分科会	「ともに活動する仲間との協調」		29
・第３分科会	「体験を子どもたちの学びにどう結び付けるか」		30
・第４分科会	「フレンドシップ活動を通しての自己の成長」		31
・第５分科会	「学生対子どもの接し方と子ども対子どもの接し方について」		32
・第６分科会	「学生間のコミュニケーション」		34
講評	近森　憲助	鳴門教育大学学校教育学部助教授	35

第２部：ディスカッション 37
指定討論（話題提供） 38
ディスカッション 44
閉会挨拶 56

Ⅳ．第３回全国フレンドシップ活動 MYOKO ゆきんこフェスティバル 57
第１回全国フレンドシップ活動 活動概要 59
第２回全国フレンドシップ活動 活動概要 59
第３回全国フレンドシップ活動 学生募集要項 60
日程 62
第３回全国フレンドシップ活動 準備会の流れ 65
活動報告
・統括 66
・救護 67
・シンポジウム 68
・開会式・活動Ⅰ 70
・活動Ⅱ 72
・活動Ⅲ 73
・朝のつどい 75
・活動Ⅳ 76
・閉会式 79
・受付・バス 80
・学生交流 82
・レセプション 83
・セレモニー 85
・想い出つくり 87
反省会の様子 89
参加児童の感想 97
参加学生の「感想」および「ふりかえり」 98

Ⅴ．その他
想い出☆写真館 101
新聞記事 114
学生名簿 116
あとがき 谷塚　光典 信州大学教育学部附属教育実践総合センター講師 117

編集後記 蓼沼　夏子 信州大学３年
中村　豪宏 上越教育大学２年 118

仲間から学べる幸せ、全フレにあり！

上越教育大学４年　伴 峰昌

「この人たち熱いなぁ」

私は第１回全国フレンドシップ活動に参加して素直にそう感じた３年に上がる春であった。それから２年、第３回全国フレンドシップ活動の「開催宣言」をし、雪国妙高に全国各地から 38 名＋ αの学生が集い、もう二度とない貴重な５日間を共にした。それは非日常的な世界に身を投じたからこそ感じ得ることのできた刺激的で情熱的なもので、己の無力さや経験の乏しさを仲間の言動から教えてもらえる素晴らしい場であったと感じている。私はそこに全フレの意義を覚える。

全フレに参加して３年目の今年、私は初めて積極的に参加できたかなと感じている。積極的という言葉はポジティブな要素を多分に含み、自らの意思で率先して行動し活動することを意味するように思われる。確かにそれも当てはまるわけで、全フレだけでなく日常生活の中でも大切なことである。しかし、仲間から教えてもらうという視点から見た時、「仲間のこういうところが優れていると思うからぜひ見てみたい、その姿から勉強したい」と思い、その人の言動から学ぼうとする、一見消極的に映るかもしれない行動もまた積極的な行動であると思う。全フレは特に仲間から学ぶことの多い活動であると感じている。私は第１回の全フレではほとんど意見することがなかった。意見しなかったのでなく、できなかったというほうが正しい。大学という井の中にいた私は、全フレという大海を泳いだ時、参加する仲間のバイタリティーやモチベーションの高さに圧倒され、子どもとの接し方や持ちネタの豊富さにただただ感心するばかりで己の向上を強く抱いたことを覚えている。それから２年、井の中ばかりでなく、ボランティアなど様々な大海に出て多くの経験を求め、与えられたチャンスに全力投球してきた。そして今回、第３回全フレという大海では舵取りをさせていただきながら参加してくれた仲間にはそれぞれに熱いものを与えてもらった。本当に仲間に感謝の気持ちでいっぱいである。

宿泊体験活動ではサポーターの頑張りに嫉妬すら覚えるほど楽しみながらも試行錯誤する姿が印象的であった。今回は本部学生としてサポーターのサポーターをしたわけだが、サポーターのサポーターは結果として子ども達のためであり、一つの活動を創り上げていくためには様々な立場の人がそれぞれの役割をしっかり果たすことが大切であることの重要性を改めてその認識した。また、その立場によって感じるものはそれぞれであるが、今回は「雪」という媒体を通して私を含め、学生自身が本当に驚き、楽しむことが出来たのではないかと思う。雪中活動という非日常的な経験は何の糧になるかはわからない。しかし、生活環境が違う学生同士が何かしら心を通じ合えたのかなと思うと嬉しくて仕方がない。実際、最終日の早朝に雪の中で戯れたことは一生忘れられない思い出である（一緒に戯れた人は分かるよね!?）。

最後になるが、今回の全フレに際しては統括として多くの至らない点が多々あったものの、参加してくれた７大学の仲間に助けていただいたとともに、大学の先生方をはじめ大学事務官、国立妙高少年自然の家の職員の方々のご指導、ご協力をいただき第３回全フレが有意義なものとして盛大に開催できたことに厚く感謝申し上げる。

私の好きな場所…全フレ

信州大学４年　岡部 桂子

昨年３月、第３回全フレの信州大・上越教育大共同開催が決まり、両大学から１人ずつ、２人で実行委員長をやることになった。当初は２人でやれば、仕事が半減して楽なのではないか、と気軽に考えていた。しかし、２人で話を進めることは、思った以上に大変だった。２人の活動経験が違うため、何を決めるにも意見が異なった。一つのことを決めるのに、何時間も話し合い、喧嘩になることも多かった。しかし、このようにお互いが納得いくまで話し合って、活動を決めていくことができたのは、とても貴重な経験である。自分の４年間積み上げてきてしまった固定観念を崩すのにとてもよい機会となった。

私は、活動を企画するにあたって、いつも自分が活動している信大ＹＯＵ遊広場キャンパスプレーパークの方針が念頭にあった。いつもと同じ方法で今回の活動を組み立てようとしていた。しかし、今回は、参加する子どもたちも違う、スタッフも全国から集まってくる。活動にねらいが必要か、スタッフと子どもの比率、子どもとスタッフの関わり方、それぞれにいろいろな考え方があり、正解はない。はじめは自分の考え方がよいのではないかと、意見を押し通そうとしていた。しかし、全国の学生が、参加する子どもたちのことを考え、意見を出してくれるのを聞いているうちに、徐々に他人の考えのよさに気付き、自分の中にも取り入れられるようになっていった。ついなんでも主張しすぎてしまう自分が、人の話をじっくり聞くということの重要性を実感できた。

私は今回、初めて統括という全体をまとめる役割についた。私は決していい統括ではなかった。自分の中だけで仕事を抱え、連絡せずに勝手に決め込んで処理してしまったり、助けようとしてくれる人たちをうまく頼れなかったりした。また、本人の意思を聞かず、仕事を無理に分担して押し付けてしまい、つらい思いをさせることや、きつい言い方をしてしまうこともあり、反省していた。自分は人をまとめるのが下手だが、もう１人の統括は経験もあり、それがうまい。そのことに劣等感を感じた。真似してみたけど、うまくいかなかった。桂子は桂子の方法でやればいい、と言うけれども、私の方法がどんなものか分からない。自分に自信がなかった。自分が話すと統括が言っていることだ、と捉えられるのが嫌だった。立派なことを言わなくてはいけない気がし、うまくしゃべろう、うまくやろうと緊張していたが、伴君に確認することで安心して言ったり活動したりすることができた。とても頼ってしまった。私にとって、統括が２人のことが、刺激ともなり、支えともなった。そして仕事の能率は悪かったけれど、常に笑いのある、楽しいものができた。だから、仕事が多くても一度もつらいとは思わなかった。そして本番では、子どもたちの笑顔を見ることができた。それがフレンドシップ活動をやっている私たちの最大の喜びだ。

全フレとは、何なのであろう。全フレをやると、とても刺激を受け、また一年がんばろうという気になる。今回出会った人たちは自分の仲間なのだ、ととても感じた。素直に尊敬して、頼れる。素直に自分の気持ちを話せる。全フレは自分にとって、とても好きな場所である。今回参加してくれた学生が全フレをどんな風に感じたかは、人それぞれだと思う。でも、少しでも全フレが好きだな、と思ってもらえたら、統括としてそれ以上嬉しいことはない。今回、私たち学生にこのような素敵な機会を与え、協力してくださった先生方、妙高少年自然の家の職員の方、その他多くの方にこの場を借りしてお礼申し上げる。

師弟同行・師弟共育

信州大学教育学部教授　土井 進

国立妙高少年自然の家での第３回全国フレンドシップ活動が大成功で終わったことを聞き、本当にうれしく思います。それぞれの役割を全力で担い、成功に導いてくださった皆様、本当にご苦労様でした。ありがとうございました。

私はこの事業の責任者の一人として、皆様と最後まで行動を共にし、苦楽を共にしなければならない立場にありましたが、急病による手術のため、入院、自宅療養を余儀なくされ、肝心の本番に欠席せざるを得ないことを学部長の藤沢謙一郎先生にお願いしました。藤沢先生は大きな心で包んでくださり、私に代わって長野からの子どもさんが乗った学部バスの引率責任者を往復ともお引き受けくださいました。衷心より御礼申し上げます。また、谷塚光典先生、岡部桂子実行委員長をはじめ多くの教職員、学生の皆様に大変御迷惑をおかけしましたにもかかわらず、皆様がすばらしい団結で一つひとつの課題を克服してくださいました。心から御礼申し上げます。

さて、これまでの９年間私はフレンドシップ事業の先頭に立って、走り回ってきました。それを支えているのは、学生時代に他者のために走り、汗を流す体験を通して、学生同士がフレンドシップ（友情）を深めることが、長い一生の基盤になるという信念です。今回参加してくださった福島大学、横浜国立大学、広島大学、鳴戸教育大学、熊本大学、上越教育大学は、いずれもこの９年間に私がフレンドシップ事業シンポジウムにお招きいただき、「信大ＹＯＵ遊サタデー」についての講演をさせていただいた大学です。そして、４年前に信州大学で開催したシンポジウムに参加した学生同士の触発によって始まった全国フレンドシップ活動が今回で３回目を迎えました。第１回目を切り開いた大門政憲氏（鳴門市）と林一真氏（名古屋市）も我がことのように今回の活動の成功を祈り、何かお役に立つことがあれば手伝いたい、という真情ではるばると駆けつけてくださいました。その真心に接したときに私は、「子どもたちのために」、そして「より良い学びのために」という一点においてつながっている皆様の友情の強さに改めて感動しました。

フレンドシップ事業の主役は学生であり、それを支え護っていくのが我々教職員です。学生と教職員ががっちりと連携、協働してこそフレンドシップ事業は有意義なものとなります。その意味で私はフレンドシップ事業の鍵は、「師弟同行、師弟共育」の精神を堅持することであると考えています。９年目にして初めて「同行」できない寂しさ、もうしわけなさ、残念さを味わいました。

お陰様で無事仕事に復帰できましたことに感謝し、10年目は一病息災を平素から心がけ、皆さんと共に活動し、苦楽を共にしていけるように自重していきたいと念願しています。どうぞ、これからもよろしくお願いいたします。

第3回フレンドシップ全国学生シンポジウムに思う

上越教育大学学校教育総合研究センター助教授　濁川 明男

ほぼ100名の児童と全国から集まった学生達の触れ合い活動は開始された。一昨日集まった学生と、当日あがってきた児童との触れ合いである。ラポートもなく、初対面での活動の開始である。しかし、自然はあまりにも無情である。雪上運動会は吹雪でほぼ半分の時間を残したまま断念、あれだけ事前に演出を考えて計画してきた雪上キャンプファイアも断念、翌日の雪上探検も予定や計画も半ばどこかにいってしまった。

そうであっても挫折感を感じるどころか、むしろ、はち切れんばかりの充実感が伝わってきたのはなぜなのか。そこには、懸命に児童との関わりを求めようとする学生の熱気があった。計画の変更をむしろプラスに変える学生の遊び心と創意があった。押しつけることでなく、児童をみつめ、児童と共に楽しみをつくりあげていこうとする学生の姿勢があった。

グループに入ろうとしない児童に懸命に接触を試みていた学生、きっと他の班が生き生き活動する中で焦りに似たものを強く感じていたであろう。2日目に仲間と共に行動してくれた時、きわめて大きな感動を得たであろう。それだけ心を通わす努力をしたことが、その子の中に大きな変容が生みだしたに違いない。

閉会式で学生達が流した涙、それを見て児童の流した涙、そこには、たった二日ではあったけれども、誠心誠意、児童と関わってきた学生達の感動があった。見ている私にもその感動が伝わり、人に知られないように涙をぬぐった。

全国から集まった学生諸君は、少なからず各大学でのフレンドシップ事業の中核として活動してきた強者達である。だからこそ、短時間の共通理解でこのようなかん感動的な触れ合い活動ができたのであろう。

このシンポジウムを通して、私は4つの点を確信することが出来た。

その1つ目は、3、4年間と継続して児童との関わりを積み上げてきた学生は、押しつけや迎合でなく、児童をみとり、児童の気持ちを推し量って行動のできる確かな指導力を身につけてきているということである。

2つ目には、自らが担当した児童に責任を持ち、よりよき関係を構築しようと誠心誠意接することこそ、教師としてもっとも大切な資質であるということである。

3つ目には、フレンドシップでは、様々な活動や遊びを通して触れ合いをしてきているが、それらの遊びや活動の経験は学生の血や肉となり、自由自在に応用され生かすことのできる力となっていることである。

そして、4つ目には、今、教師に求められている力は、児童をみとり、一人ひとりの学びを支援していく力である。正に、この触れ合い活動を通して学生の中にその芽生えを見ることが出来たということである。

自分の担任するクラスにどんな子がいるかわからない。しかし、逃げ出すことなく、無視することなく、怯むことなく、児童とよりよい関係をつくろうとするひたむきな情熱、それこそ、フレンドシップで培うべきものであることを教えられた気がする。

「いろいろな妙高」から「開かれた妙高」へ

上越教育大学学校教育総合研究センター講師　釜田 聡

先日、上越市在住のBさん（仮称）から、次の内容のお電話をいただきました。

「初めまして。私はBといいます。妙高のフレンドシップに参加した☆△小学校3年生の○○の母親です。妙高では○○が、熱を出し、みなさまに大変ご迷惑をおかけしました。おかげさまで、○○はかぜも治り、元気になりました。みなさまのお心遣いが大変嬉しかったらしく、本日お礼を申し上げたいと、お電話さし上げました。本人に代わります」。

続いて、○○くんが、「○○です。妙高では大変お世話になりました。朝まで看病していただき、ありがとうございました。ご迷惑をおかけしましたが、2日間楽しかったです。みなさんによろしくお伝えください。本当にありがとうございました」など、感謝の気持ちを伝えてくれるとともに、楽しそうに思い出を語り、いつまでも電話を切ろうとしませんでした。みなさんの心遣いがうれしかったのでしょう。○○くんにとっての妙高は、「大変な妙高」でもあり、別な意味では「あたたかな妙高」にもなったようです。

さて、みなさんにとっての「妙高」はいかがだったでしょうか。きっと、○○くんと同じように、あるいはそれ以上の感動を得ることができたのではないでしょうか。事前の企画・打合せ、直前の準備、当日の運営、子どもたちとのふれ合い、全国から集まった学生との交流、一つ一つの場面がかけがえのない「妙高」での思い出になったことと思います。

私自身、みなさんの準備の様子や当日の活動の様子等から、みなさんの「よさ」をたくさん発見することができました。

「妙高」に参加できないにもかかわらず事前の準備に多大なエネルギーを注いでくれた学生のみなさんがいました。また、「妙高」に参加しながら、徹底的に裏方さんに徹し、プログラムを支えてくれた学生の姿がありました。聞くところによると、何回も上越と長野市を往復し打合せをしたということでした。華々しくリーダーの役割を果たし、場の雰囲気を盛り上げてくれた学生もいました。「かわいい子どもたちのために」と、睡眠不足で目を真っ赤に腫らし、ふらふらになりながらも、がんばった学生もいました。準備不足や途中のプログラム変更等の苦境をカバーし合った学生の姿も見られました。まさに、「妙高」という白銀のキャンバス(canvas)に「いろいろな学生」が「いろいろな子どもたち」とともに、「いろいろな妙高」を描くことができたと思います。みなさんの絵の出来栄えはいかがでしたか。

最後になりますが、みなさん一人一人とフレンドシップ事業のさらなる成長・発展のため、課題を一つあげさせてもらいます。それは、「いろいろな妙高」を「開かれた妙高」にしてほしいということです。みなさんが「妙高」で学んだことを、自分の心に閉じこめ、「閉じられた妙高」にするのではなく、自分自身をさらに伸ばすためと自分とかかわるすべての人々に「開いて」いってほしいのです。つまり、自分や限られた狭い仲間だけの「閉じられた妙高」にするのではなく、自分自身を含め、自分をとりまくすべての「環境」にどんどんはたらきかけ、みなさんの心の中に「開かれた妙高」を築いてほしいのです。そうすることで、みなさん自身が新たな自分に出会うことにもつながると思いますし、フレンドシップ事業の今後の展望が開けてくるのではないでしょうか。

信州大学・上越教育大学共催　第2回コロキュウム
第3回　フレンドシップ事業　全国学生シンポジウム

「臨床の知」－「学習臨床」は教員養成をどこまで変えたか

～フレンドシップ事業からわたしたちは何を学んだか～

第３回 フレンドシップ事業 全国学生シンポジウムについて

全国の国立教員養成系大学･学部において文部科学省が推奨しているフレンドシップ事業は、教師を目指す学生がさまざまな体験的活動を子どもたちとともに行い、ふれあう中で学生が子どもたちの気持ちや行動を理解し、実践的な指導力の基礎を身につけることをねらいとしています。

全国フレンドシップ活動とは、フレンドシップ事業に自主的･積極的に携わっている学生が集まり、子どもたちとのふれあい活動や、意見交換・交流を行う活動です。この活動は、全国から意見を出し合って企画し、実践することを通して各大学の活動の特色を学び合い、学生の意識を高める場となっています。

一昨年の阿南（徳島県）、昨年の阿蘇（熊本県）に引き続いて、第３回目の全国フレンドシップ活動は、平成15年３月６日～10日に、上越教育大学・信州大学・福島大学・横浜国立大学・広島大学・鳴門教育大学・熊本大学の７大学の学生が集まり、国立妙高少年自然の家で行います。８・９日には、上越市・長野市の児童と雪に親しむ宿泊体験活動、「MYOKO ゆきんこフェスティバル」を開催いたします。各大学で行っているフレンドシップ活動の特色を生かし、学生がともに活動しながら良いところを吸収し、問題点を改善する手がかりになるような活動にしていきたいと考えております。

私たちは、全国フレンドシップ活動を企画するにあたり、活動をする以前に学生同士がお互いの理解を深め、共通意識をもって児童との宿泊体験活動に臨みたいと考え、「第３回 フレンドシップ事業 全国学生シンポジウム」を計画いたしました。今回のシンポジウムは、「フレンドシップ事業からわたしたちは何を学んだか」をテーマに、①各大学の活動について理解を深め良いところを吸収、それぞれの大学の活動に生かす ②共通意識をもってキャンプに臨めるように、お互いを知り、意識を高め合う ③自分自身の課題を見つけてキャンプに臨む という三点をねらいとして学生同士が意見や考えを交換したいと考えております。
ご参加のみなさまからのご意見・ご指導をよろしくお願い申し上げます。

シンポジウム担当
渡邉悠子（上越教育大学 ４年）
山本真望（信州大学 ３年）

第３回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム

月　日：平成15年３月７日（金）
場　所：国立妙高少年自然の家（新潟県中頸城郡妙高村）学習室１、２、３
テーマ：「臨床の知」―「学習臨床」は教員養成をどこまで変えたか
～フレンドシップ事業からわたしたちは何を学んだか～

日　程：

１．開会行事　10：00～10：10
はじめの言葉（司会）
あいさつ　信州大学教育学部長　藤沢謙一郎氏
上越教育大学副学長　増井　三夫氏

２．各大学の発表　10：10～11：10
①「学びのひろば」　上越教育大学　発表者：飯森　玲子
②「自然体験学校」　福　島　大　学　発表者：坂本　琢馬
③「わくわくサタデー」　横浜国立大学　発表者：和地めぐみ
④「ゆかいな土曜日」　広　島　大　学　発表者：大町　真理
⑤「総合学習研究会ふれあいアクティビティー」
鳴門教育大学　発表者：野村　優衣
⑥「Make Friends」　熊　本　大　学　発表者：堀口　沙織
⑦「信大ＹＯＵ遊広場」　信　州　大　学　発表者：西澤　俊輔

３．分科会　11：10～12：30
【学習室１】
①「連携」～学校・地域・家庭との連携～
②「協調」～ともに活動をする仲間との協調～
【学習室２】
③「学び」～体験を子どもたちの学びにどう結びつけるか～
④「成長」～活動を通して自分自身がどのように成長したか～
⑤「接し方」～子どもとの接し方について～
【学習室３】
⑥「コミュニケーション」～学生間のコミュニケーション～

（　昼食･休憩　12：30～13：30　）

４．分科会の発表　13：30～14：15
５．課題シートの記入　14：15～14：25
６．閉会挨拶（講評）　14：25～14：30
鳴門教育大学学校教育学部　近森　憲助氏

上越教育大学「学びのひろば」

初等教育教員養成課程　教科・領域教育専修　言語系国語分野　3年　飯森 玲子

1．本学のフレンドシップ事業における「学びのひろば」

平成 10 年度から始まった本学のフレンドシップ事業も今年で 5 年目を迎え、正課ではなく自由意志で参加し、学生主体で企画運営を行う「学びのひろば」は大きな転換期を迎えた。「学びのひろば」は子ども理解・企画力・実践力の 3 つの力を培うことを目的としているが、昨年度までは年 2 回単発的に活動を行ってきており、そこで私たちが目にする子どもたちの姿は、成長過程のほんの一瞬に過ぎず、子どもたちの変化や成長、多様な姿を理解することは難しく、必ずしも子ども理解を深めるまでに至ることは困難であった。また、企画の大部分を事務局学生が立てて、一般学生はそこに参加するという形であったため、参加学生全員の企画力が培われているのかという疑問が残っていた。そこで今年度は、1 年を通して登録された児童と学生が定期的に活動する通年の継続型クラブ活動へ転換した。

クラブ活動は、過去数年、子どもたちに好評であった活動を幾つかの系統でまとめて、小学 3～6 年生対象に 5 つのクラブ(アドベンチャー・サイエンス・クッキング・クラフト・遊びクラブ)と、小学 1・2 年生対象に 1 つのクラブ(キッズクラブ)の計 6 つのクラブを作り、学校 5 日制を考慮して年 5 回(6・7・8・10・12 月)原則土曜日に活動を行った。

毎回のクラブ活動の企画は事務局学生と一般学生という関係ではなく、「共に体験して学ぶ」という立場で一緒に企画を練り合い、学生同士の学年を超えた協力体制を多くの場面で見ることができた。また、活動後はその回の自身の取り組む姿勢を振り返り、課題を持って次回に臨めるように全体での反省会とは別に、クラブ内で振り返りアンケートや反省会を行った。

2．今年度の成果と課題

1）成果

昨年度までのイベント型において、私たち学生は子ども集団として子どもたちと接し、参加した子どもの名前をなかなか覚えることができず、ケガもなく無事イベントを終らせることにばかり意識が向いていた。しかし、継続型に移行したことで、今まで見落としてきた個としての子どもを見とり、子ども一人ひとりと接することができるようになった。

以下に「学びのひろば」に関する具体的な成果を列挙する。

- 集団としてではなく固有の名前の個として子どもと接し、子ども一人ひとりが皆違う存在であることを実感できた。
- 逸脱やまとわりつくこと等を表現の違いととらえ、どの子も楽しく周囲に自分を認めてほしく、人と親しく接したい気持ちがあることを理解することができた。
- 子どもたちに教えてあげる、与えてあげるという発想から、子どもたちと共に創り上げていくという意識の転換
- 毎回子どもたちとの接し方を考え、模索していく中で、その時々によって間合いの取り方が異なることを実感した。
- 真の信頼を得るためには、子どもたちを迎合するのではなく、1 対 1 で心を開いて叱ったり諭したりすることが大切である。

・子ども一人ひとりのことが少しずつ理解できるようになるにつれて、心を通わすことで感じられる真の子どもと接する喜びを感じ、教師への夢が強くなった。
・「ボランティア体験」を履修している 2 年次以上の学生が、企画の展開の仕方や指示の出し方など社会教育の場で学んできたことを「学びのひろば」で還元することができた。
・話し合いを重ねるにつれ、学年を超えた学生間の交流が生まれた。
・子ども理解とは年間数回で成し遂げられるものではなく、私たち子どもと関わっていく者の一生の命題であり、日々成長し続ける子どもに寄り添いながら、心を通わせて支援していくことなのではないかと、おぼろげながら理解することができた。

2）課題

フレンドシップ事業としての「学びのひろば」が地域に定着し、大学、地域、子どもたちを送り届けてくる保護者からの期待も高く、子どもを預かるという責任の大きさをひしひしと感じる一方で、次のような課題もある。

・通年の企画を学生自身の手で作り上げていくことを甘く見ていたり、部活やバイト、学業との両立が難しく、準備に多くの時間を割くことに耐え切れなくなったりして参加学生が毎回減少していった。
・事務局学生は通年型の活動と認識しているが、多くの一般学生は年 5 回の活動を連続的にとらえておらず、イベント型としてとらえているなど意識の二極化が生じている。
・事務局学生の減少と活動回数の増加、少人数でのクラブ運営で事務局学生の負担が増えてしまった。また、一般学生から事務局の存在が不透明で遠い存在になってしまった。
・活動場所の確保に伴い、部活動などへの影響が昨年以上に大きくなってしまった。
・周囲への甘えからか積極的に関わる学生が徐々に減り、消極的な学生が微増した。

3．来年度の展望

「クラブ数の減少」「クラブのオリジナリティー」「事務局学生の負担の軽減」

今年度は 1 クラブ 2 人の事務局員でクラブ経営を進めていったが、大人数をまとめることは難しく、「学びのひろば」全体の管理も手薄になってしまうため、クラブ数を 3～4 に減らしたい。また、全クラブ同日同会場での活動から、学外での活動も可能にし、月 1 程度の通年型・イベント型・宿泊体験型といった活動スタイルの自由裁量の部分を増やしてクラブ毎のオリジナリティーを出すとともに、参加学生が自分のスタイルに合ったクラブで 2 年、3 年と継続的に活動していけるようにしたい。その中で、体験学習との連携、地域や保護者と一体となった活動など、社会との交流を増やし、社会性を磨いていきたい。また、今年度は登録した 1 つのクラブにしか参加ができなかったが、企画から当日まで携わるクラブ以外に、他のクラブへ当日のみの参加や補助ができるようにし、クラブ間の交流を盛んにしたい。活動をする上で、ある程度の負担の軽減は大切であるが、「学びのひろば」の中身が薄くなって本来の学びが失われてしまわないように、今後も質の良い学びを提供できるように努力していきたい。

福島大学「自然体験学校」

教育基礎コース　発達臨床専修　4年　坂本 琢馬

1．概要

福島大学におけるフレンドシップ事業は、1997 年度より文部省「平成 9 年度教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費」を受け始まった。教師を目指す学生が個々の体験活動を通して子ども達と直接ふれあい、ともに学ぶことによって教師の「実践的指導力」を高めようとする試みの一環として位置付けられた。鈴木は、この事業を「学生たちの子ども達への共感的理解の能力や対人スキルの向上を目的とし、学部カリキュラムの改革を視野に入れた取り組みとして、新たな教員養成のあり方を問い直す」と考え、「地域の教育委員会や PTA、青少年教育機関、あるいは地域諸団体との関連を深め、一層充実した学生と地域の子どもたちとのふれあいを可能にする試み」としてとらえた。

活動内容は、大きく分けて 3 つに分類される。

①自然体験学校

国立磐梯青年の家（猪苗代）を舞台に市内の小学 5、6 年生、中学 1、2、3 年生と学生、院生（アドバイザー）、引率、指導教官、青年の家所長をはじめ専門職員で実施。開会式、出会いの集い（ふれあいゲーム）、ウォークラリー、野外炊飯、集団創作活動、火起こし、キャンプファイヤー、学習活動を通して、児童生徒と諸体験活動を行う。

②オープンキャンパスフェスティバル

自然体験学校参加学生に加え、7 月より参加学生を公募、自主参加型イベントとして大学キャンパス施設を会場に「講座」を開講。手作り楽器やわら細工、影絵遊び、理科実験教室、クッキングなどの体験講座を行う。学生が指導者となり教官は後方支援になる。受講者は小学生、中学生を中心に幼児から一般の方（保護者を中心）となっている。

③公開シンポジウム

毎年テーマを設定し、2 部構成で行う。まず第 1 部では、基調講演を行い、テーマに関しての理解を深める。第 2 部では、体験報告を行い、フレンドシップ実行委員の学部教官、参加学生代表、国立磐梯青年の家専門職員から報告を受け、その後パネルディスカッションとなる。この公開シンポジウムで、フレンドシップ事業の成果総括と今後の課題について議論され、次の年に生かされて行く。

2．課題

・1 年だけの活動で終わらない
・教育実習とのつながりを作る
・地域に対して目を向ける

1 年生で活動を終えてしまうのではなく、長期的なビジョンのもと、教育自習・教員採用試験ともつながるような内容を組むことにより、学生が自分なりに考えた課題や目的を時間をかけてじっくりと進めていくという内容を作ることが新たな課題となっている。特に 2 年生の時期に行う活動では、学生自身が自ら発案・企画・実行ができる内容として 1 年間を通し活動し、1 年目の自然体験学校で学んだ反省や課題を生かし、より深く子ども

について考えていくような体勢を取ることが必要であると考える。また、過年度履修を可能にし、2 年生・3 年生が活動に参加ができるような体制を作ることにより、異年齢間で行われる活動ということも視野に入れ、自分がやってきた活動を後輩に伝えるのはもちろんのこと、一緒に取り組むことによりお互いに学びあうことができ、学生同士のつながりやコミュニケーション能力の向上にもつながると考えている。

福島大学の活動は 2003 年度で 7 年目を向かえることになるが、設立当初の活動を継続して行っている。そのために、7 年前の時には有効であった活動も、現時点では時代遅れの活動となっている部分もある。特に、総合的学習と学校週 5 日制の導入により、子ども達がこうした活動に対する慣れが生じてしまい、学生側は新鮮でも子どもの方は新鮮ではないというようなケースが生まれてくると考えられる。こうした意味でも、子どもに今まで味わった事の無い体験をさせることにより、より質の高いフレンドシップ活動を目指していかなければならない。

最後に、忘れてはならないのは、大学における授業（座学）をないがしろにしては、体験的学習の意味がなくなってしまうということだ。こうした体験的学習は非常に有効ではあるが、大学における教員養成の基本は毎日の授業である。体験的学習だけをやっていれば教員養成における目的が達成されると勘違いされがちであるが、あくまでも大学における授業（座学）を実践する場が体験的活動であり、体験的学習の付属として大学の授業があるわけではない。このことをもう一度考え、毎日の生活に直結したフレンドシップ活動をしていかなければならないと考える。

横浜国立大学「わくわくサタデー」

学校教育課程　1年　和地 めぐみ

1．横浜国立大学のフレンドシップ活動の概要

横浜国立大学は14年度でフレンドシップ活動を始めて6年目に入った。横浜国立大学には、フレンドシップ活動Aとフレンドシップ Bという2種類のフレンドシップ活動がある。フレンドシップ Bとは個人単位で附属小学校や公立の小学校、県の宿泊施設などに行って、そこでの体験学習などの活動のお手伝いをさせてもらうというものである。ここでは主に次に説明するフレンドシップ活動A、通称「わくわくサタデー」について取り上げたいと思う。

わくわくサタデーとは名前の通りわくわくした土曜日を児童に過ごしてもらおう、そして講座の中や、当日に至るまでの経緯の中で自分たちもいろいろ学ぼうというのが主な目的である。受講した学生7、8人で班を作り、前期・後期各1回、合計年2回ほど学生が企画した講座を小学生を対象に行うというイベントで、小学校は横浜市や川崎市からお借りし、その小学校の児童を対象として講座を行う。全体でのミーティングを金曜5限に行い、そのほかの活動は、班ごとに班会や試作会を開いて本番のわくわくサタデーに備える。各班から班長、運営、広報、保健、物品係を出し活動が円滑に行われるようにする。運営係の中から委員長を選出し、運営係が中心となって小学校との連絡や、全体での物品の発注を行う。わくわくサタデーは学生中心で作り上げるものであるため、担当教官は学生のサポートにあたっていただく。

2．わくわくサタデーの内容

平成14年度のフレンドシップ活動Aは受講者45名、2・3年特別班8名、4年生特別班10名の合計63名で行われた。わくわくサタデーでは小学校が決定すると、講座の素案を作り、小学校側と打ち合わせを行う。その打ち合わせで小学校の先生方からどのような講座を期待するか、またその注意点などの指導をしていただく。各班の講座が決定すると、ポスターやチラシをもとに児童にどの講座を行いたいかアンケートを取り、各班に児童を振り分ける。その後、大学では試作を繰り返して、講座の進め方を考えたり、必要な物品発注を行ったりする。小学校に向けては児童一人ひとりに手作りの招待状を出す。また小学校側と電話やFAXで連絡を取り、当日に備える。ここまでの準備期間が約3ヶ月である。当日は2〜3時間で講座を開催する。開閉会式は運営係を中心として行う。閉会式では講座ごとに自慢タイムを設け、その日に行った講座をみんなに見てもらうようにする。また講座終了時に手作りの修了書と、各講座がどんなことをしたか、またそのやり方がわかるガイドブックを配る。また講座後に児童にアンケートを取り、その後の学生の反省に生かせるようにしている。

前期は横浜市立東小学校、後期は川崎市立南河原小学校で行った。前期の講座としてはリサイクル楽器作り、キャンドル作り、灯篭作り、竹遊び、全身を使って絵を描く、五感を使ったゲーム、プラネタリウム作りがあった。後期はシャボン玉、すいとん作り、推理ゲーム、等身大の自分の絵を描く、アルバム作り、クリスマスリース作り、ナンカレー作り、目の錯覚を利用したおもちゃ作りがあった。

3．反省及び今後の課題

今年度のわくわくサタデーは昨年までと変更した点がある。まず昨年までは全体会を木曜日の昼休みに行っていたのだが、今年度からは授業として全体会を位置づけた。これは昨年度までの、昼休みでは全員が集まりにくい、班会をする時間が少ない、人数が多くなりすぎてしまうといった反省を生かして改善されたことである。これによって全体会についてはだいぶ改善されたと思う。しかし全体会を授業枠にしたことで、他の授業と重なるため全体会に出られない学生が出てきてしまう。このような学生は全体会に出ない代わりに単位は取得できない「特別班」として活動することになった。しかし特別班は全体会に出ないため、どのような人たちが行っているのかわかりにくい、また情報伝達がしにくいなど、普通に行っている学生との間に壁が出来てしまった。来年度は特別班に入る学生が少なくて済む時間帯に授業枠を取れるよう、検討していきたいと思っている。また授業として登録してはいるものの、教授はいないし、出席は取らないためバイトやサークルといって欠席する学生もいた。これでは全体会に出られないからと単位を貰わずに活動している特別班に申し訳ない気がする。教授がいないのも、出席を取らないのも、わくわくサタデーを行う学生がそれだけの意欲を持っているだろうと思ってのことである。しかしこの状況が続くのであれば、単位を貰っている以上出席を取るなどの改善策も必要だと思う。

次に昨年度までは主に全体の運営を行う「運営学生」と実際に講座を行う「班学生」に分かれていたが、お互いの連携が上手く取られていないとの反省から、今年度は運営係として各班から 2 名出すことにした。これにより班と運営の連携はかなり取りやすくなり、また運営会で情報交換することで、各班が今どのような進行状況にあるかということや、運営として各班にお願いしたいことの主旨が伝わりやすくなったと思う。また昨年度までは運営班は全体の運営のみだったため講座を行えなかったが、今回は全学生が講座の企画、運営に参加することが出来た。運営の形は来年度もこのままで様子を見たいと思っている。

今年度は昨年度までとかなり違った形で行ったが、どれも変化させたメリットは十分あったと思う。また後期のわくわくサタデーではけが人が 0 人という良い結果に終わった。現在は今年度の反省をもとに運営マニュアルや保健マニュアルなどを作り、来年度への仕事の引継ぎがスムーズに行えるように工夫している。

来年度もこの反省を生かし、学生も児童もよりいっそう楽しめるわくわくサタデーを作り上げて行きたいと思う。

広島大学「ゆかいな土曜日」

第１類　初等教育教員養成コース　３年　大町 真理

１．広島大学フレンドシップ事業の概要

広島大学では「ゆかいな土曜日」という名称で平成 9 年度から本格的な事業を開始し、本年度で 6 年目を終了した。対象児童は東広島市内の小学 4～6 年生である。授業としても行われているので受講生は、「地域教育実践Ⅰ・Ⅱ」の単位（それぞれ 1 単位）が取得できるが、2 年目以上はボランティアとなる。1 年間にわたって同じ児童と学生が様々な活動（グループ活動、畑活動など）をしていく中で、多くの出会い、ふれあいを通して共に成長していくことに重点をおいている。

２．平成 14 年度事業の活動報告

今年の参加学生は 110 名（幹部 13 名を含む）、参加児童は合計 149 名、小学 6 年生 53 名、5 年生 49 名、4 年生 47 名であった。活動回数は、5 月から 12 月までの毎月 1～2 回の土曜日、合計 10 回行った。主な活動はクラブ活動、グループ活動、畑活動、江田島青年の家宿泊研修、もちつきである。（詳細は 2 枚目参照）幹部会を毎週 1～2 回、グループ会を毎週 1 回行った。

◎クラブ活動について

平成 13 年度から始まった活動で、1 年間で何か技を身に付けようという目標のもとに行われている。毎月 1 回、活動日の最初の時間、1 時間半を使って行った。今年行われたクラブは草笛、竹笛・水笛、飛行機、たこ、将棋、絵本、童謡唱歌、お菓子、手打ち野球、けんだま、編み物、ダンスの合計 12 のクラブである。児童、学生は自分の好きなクラブにはいって技を磨いた。12 月の最後の活動日にクラブ発表会を行ってみんなで技を披露した。講師は地域の名人の方、広大の様々なサークル、ボランティアの学生に依頼した。

◎グループ活動について

今年の参加児童、学生（一部の幹部を除く）は 4 グループ、15 班（1 班につき基本的に児童 10 名、学生 6 名である）に分かれた。企画・運営は幹部を中心に班の中から毎月 1～2 人を企画者とし輪番制で行った。以下はそのグループ名とグループの年間目標である。

○原始グループ（1～4 班）

・五感をフルに使って自然と触れ合いながら、自然のすばらしさ、大切さを学ぶ。
・原始的な生活を行うことで現代の状況の便利さを実感する。
・子ども自身が考えて、主体的に活動する。
・班で一つにまとまり、人と互いに協力し合う。

○芸術グループ（5～8 班）

・今までにやったことのないような方法で表現することにより、枠にとらわれない自由な発想ができるようにする。
・仲間の様々な表現、個性に触れ、多様であることを受け入れ、柔軟な考え方ができるようにする。

○科学グループ（9～12班）

・身近にあるものを題材とし、科学というものを身近に感じることができるようにする。

・家に帰ってもう1回やってみたいと思うような活動をする。

○伝統文化グループ（13～15班）

・地域や自国の伝統行事や文化に触れることで、それを理解し、誇りを持てるようにする。

・実際に体で体験することにより、歴史や土地の風土を知り、人間性豊かに成長する。

以下は今年の年間活動報告である。

日程／グループ名	原始	芸術	科学	伝統文化
第1回　5月11日　am	クラブ店出し、開講式、班別活動			
pm	班別活動（名札作りなど）			
第2回　6月8日　am	クラブ活動、畑活動（サツマイモの苗植え）			
pm	服づくり	班旗作り	紙のリサイクル	縄あみ
第3回　7月13日	クラブ活動、グループ別活動			
	家づくり	水のオブジェ	廃油ろうそく等	草木染め
第4回　8月12日～13日	国立江田島青年の家宿泊研修　海水浴、星見会、朝の選択活動（スタンプラリー、海砂アート、クラフト、フィールドビンゴ）			
第5回　9月28日	クラブ活動、グループ別活動			
	土器づくり	ピンホールカメラ	ペットボトルロケット	昔遊び
第6回　10月12日　am	冬野菜植え付け（大根、人参、白菜、水菜）			
pm	火起こし	班別活動		
第7回　10月26日　am	クラブ活動、いもほり			
pm	野焼き	音遊び	しゃぼん玉	門松づくり
第8回　11月23日	クラブ活動、グループ別活動			
	竹飯等	未来予想図	電気	うどん、和紙づくり
第9回　12月7日　am	班別活動　カードづくり　振り返りクイズ　班別活動			
pm	餅つき			
第10回　12月21日	クラブ活動、グループ別活動			
	クラブ発表会、閉講式			
シンポジウム　1月25日	親子で体験コーナー、意見交換会など			

3．今後の課題について

・学校では行われていないようなゆかいな土曜日オリジナルの活動をする。

・地域、教官の方（クラブ講師の方）との連携を深める。

・学生組織を活性化させる。

鳴門教育大学「総合学習研究会ふれあいアクティビティー」

小学校教育専修　図画工作科教育コース　1年　野村 優衣

1．本会について

本会は本校におけるフレンドシップ事業から派生し2000年度に発足、初代会長の大門、小原（2001年度卒）そして現メンバー数人により、総合学習研究会“ふれあいアクティビティー”として活動を開始しました。

その後様々な活動を経て、現会員数15名で活動しています。

2．活動について

今年度の活動は、本校で行ったものとして5月18日に行ったうずうず塩作り、10月19日に行った自然と遊ぼうin鳴教があります。また校外のイベントとしては里浦小学校での総合的な学習の時間(環境分野)への参加や卒業生を招いて行った研修会（牟岐少年自然の家)、徳島県立牟岐少年自然の家の主催事業へボランティアリーダーとしての参加、11月30日、12月1日と行ったふれアクin牟岐、そして3月6日から開催される全国フレンドシップ活動への参加があげられます。また活動に際し、鳴門市教育委員会や市内小学校の諸先生方に大変なご協力をいただいています。

i)自然と遊ぼうin鳴教について

この企画は当初6月に行おうと思っていたものだったのですが活動当日が雨で中止になってしまい同じ活動（内容は若干変化している）を10月に行いました。この活動には8名の小学生が参加しました。この活動では鳴門教育大学構内でオリエンテーリングを行い、道中に5箇所のチェックポイントを作りクイズやカモフラージュなどを行いました。また歩いている途中に落ちていた枯葉や枝、テニスボールなどで子どもと学生で1つの作品を作り上げました。この活動は現1年生が企画した初めての活動になります。4年生は実習等で準備があまりできなかったので1年生にはずいぶんと負担をかけてしまいました。

ii)ふれアクin牟岐について

この活動はふれアク活動の中でもメインといえる子どもと共に宿泊を行うもので、活動参加人数は学生8名、小学生27名という活動始まって以来最高人数を数えました。
11月24日に活動の顔合わせを行い参加する子どもの健康チェックを行いました。この時には保護者の方も同席していただき、本会の活動の趣旨等を理解していただくこととともに、子どもたちの健康調査票の書き込みと参加費等の支払いなどにご協力いただきました。活動の方は牟岐少年自然の家の職員の方々の協力いただきながらオリエンテーリング、星の観察、写真たて作りを行いました。

iii)ふれアク研修会

この活動は昨年度卒業された先輩方が現場でこの活動のことが役に立っているという一言から研修会みたいなのをやってみようかというなんともあいまいな理由で始まったのですが、実際に現場に出ている先輩の話を聞くに当たって4年次生には教員採用試験の勉

強になり、教育実習との違いなどを実感しました。また基本的なアクティビティーや子どもへの指導方法などを自らが活動をすることで体感し、様々な事態の対処方法などを身につけることができました。

iv)わんぱく海体験へのボランティアリーダーとしての参加

8月17日～19日に牟岐少年自然の家で開催されたわんぱく海体験にボランティアリーダーとして参加しました。牟岐少年自然の家主催事業に入るのはこれで2度目なのですが参加したのは4年次生5人、1年次生1人の6人でした。参加した子どもは小学校4年生から中学校2年生までで80人程度でした。当初予定としてはテントを張って泊まり、また海での活動がメインだったのですが台風が接近していたこともありテントでは1泊になり、大島活動などの海での活動もほとんど中止になってしまいました。ですが2泊3日という活動の日程は今まで経験したことがなかったのでとても良い体験になりました。
来年度からも参加できるだけ参加したいです。

3．今後の課題について

ふれアク活動は他大学に比べ小規模な活動だと思います。活動形式も同好会活動ということで会員がとても少なく活動において1人1人にかかる負担がとても大きかったりします。また中には運動部との掛け持ちをしているメンバーもいるので土曜日開催に参加できない学生もいたりします。もちろんただ人数が多ければよいとは思わないのですが、活動のたびに行う学校回りや各協力機関との連絡などの事務的なものから、活動時の子どもの世話までと「人数が多ければよかったなぁ」と思うことはたくさんありました。特に来年度は現メンバーのうち半分が卒業等で抜けてしまいます。やはり主力が抜けるのはとても痛いことなので1年生をもっと鍛えていこうと思います。また活動がやりっぱなしになったり活動当日になって準備ミスがあったりとするので準備、反省会等を充実させていきたいと思います。

（文責：平澤 学）

熊本大学「Make Friends」

小学校教員養成課程　教育学専攻　2年　堀口 沙織

1．熊本大学フレンドシップ事業（Make Friends）活動概要の紹介

熊本大学におけるフレンドシップ事業は、「学生主体の活動企画」という目的を深めるために、2000年度より「Make Friends（以下メイフレ）」というサークル的要素を含んだ団体としての活動になった。三年目に入り定着してきた活動の形態は、活動の協力機関（主に熊本市内の公民館）を探し、その協力機関ごとに10名程度の班に分かれ、班単位で企画・活動を行うというものである。現在総員57名、9月に幹部交代をし、現在は2年生中心に運営を行っている。

各班の活動は大学の前期・後期で一区切りとし、その度に班員を変え、新しい活動を企画していく。つまり、四月からメイフレに所属している学生は、年に最低2回の企画・活動を行うということになる（通称＝メインの活動）。また子どもと接する機会が年2回では少ないので、他の班の活動への当日参加や、前年度までの活動経験を活かして小人数で短期間に企画する活動（通称＝昨活）への参加ができるようにしている。その他に子どもに関わる活動の情報提供・積極的な参加の呼びかけなども行っている。

メイフレの学生が子どもと接する機会	＝	年２回の前期・後期の活動企画と参加（年間活動の最低回数）	＋	他の班の活動への当日参加・昨活への参加（希望制）

活動内容は様々で、班によって協力機関の特徴を活かした企画を行っている。小学生を対象にした1日の活動がその大半を占めている。企画は週ごとの全体会と、班ごとの話し合いによって進められ、月に一度企画の進行状況を全体に向けて発表・意見交換を行う「報告会」を行っている。また、毎年8月と1月には、前期・後期のそれぞれの活動についてのまとめの報告会を行っている。今年度は「企画力の向上」「子ども理解」を活動目的の中心に添え、前期に5つの班、後期では4つの班で活動した。各班の活動を簡単に下に記載する。

【前期】
- 一年間を通した、子どもとの継続的な関わり
- 子ども・スタッフと一緒に「子ども夏祭り」を企画・運営」
- 商店街で買い物をし、炒飯・餃子のクッキング
- バスで牧場に行き、搾乳・授乳の体験
- 夏のキャンプ、自然の中で子どもとふれあう

【後期】
- みんなで手作り「ジャンボすごろく」大会
- 歴史のイベントも取り入れたウォークラリー
- 三世代交流も視野に入れた、竹炭作り体験

上記のように班ごとに種類の違う企画を行っているため、今回は前期・後期から一つずつ活動を紹介したいと思う。

2．前期五福班活動「子ども夏祭り」の企画・運営について

「子ども夏祭り」とは、協力機関である五福公民館の児童室主催で毎年行われている活動で、その企画の中心は「子どもスタッフ」が行っていた。その子どもスタッフのサポートという形で、今年度の前期五福班は活動した。子どもスタッフは小学校4年生～6年生で、今年度は3つの違う学校から計21人の子どもたちが集まった。21人の子どもたちと一緒に、夏祭りに向けての打ち合わせ・準備が4回、前日の準備、当日の運営まで行った。一日限りの活動企画とは違い、同じ子どもたちと半年にわたって継続的に関わっていくことのできる活動だった。

夏祭りの準備段階においての子どもたちは、最後まで一生懸命する子と途中でなげだす子が見られた。だが作業に飽きた子たちも、ポスターや飾りを上手く作っている子を見て「自分も…」とやる気を出したり、学生がめずらしい飾りを作るとそれに興味を示し一緒にやり始めたりする姿が見られた。飽きを感じ始めた子どもたちに対して、どのようにし接したらいいか、少し学び取ることが出来たと思う。夏祭りで行うゲームの内容を決める時には、自分たちが興味のあることや学校で流行っていることなどの案をたくさん出してくれた。内容をしぼって決定していく段階で、子どもスタッフが決定方法などの意見も出しながら、積極的に話し合いを進めていくことに驚かされた。

当日の夏祭り運営においても、学生は子どもたちの姿に驚かされることが多かった。各担当コーナーで、私たちが期待していた以上に自分たちの仕事に責任を持っていた。人がたくさん並び始めると臨機応変に受付・誘導するなど、学生が支持をしなくても自分たちで考え動いていた。また、自分の担当コーナーが終わると他のコーナーを手伝いに行く姿も見られた。どの子どもたちからも、夏祭りスタッフとしての自覚を充分に感じ取ることができた。夏祭りの企画・運営での、子どもたちと継続的な関わりを通して私たち学生は子どもスタッフから柔軟で幅広い考えや、学生以上と言っていいほどの責任感とそれに伴う行動を見ることができ、子どもたちの持っているものや可能性の幅を知ることができたと思う。一方でこの活動から、子どもと仲良くなっていくと「慣れ」から「けじめ」があいまいになってしまうということが課題として挙げられた。

3．後期中央班「立田山ウォークラリー」の活動について

このウォークラリーはクイズや見学、レクレーションなどを通して自分たちの町の歴史にふれていくことを目的としていた。その中でも、いかに子どもたちを楽しませることができるかということに重点を置いて活動した。一日かけてのウォークラリーという内容で対象が高学年だったため、恥ずかしがったり人見知りをしたりするこどもが出るのではないかと思ったが、純粋に楽しんでいる姿をたくさん見ることが出来た。今まで低学年を対象にした活動が多かったため、今回の活動では、高学年の子どもたちの色々な面を見ることができたと思う。まず低学年とは話す内容も違い、人の話をよく聞き、言われたことをきちんと理解して行動できる学年であると感じた。ある記念館に入る前に静かにしなければならないことを伝えておいたところ、お互いに注意しあって行動していたのが見られた。しかしそういった高学年らしい姿が見られた一方で、相手の気持ちを考えずに思っていることを口に出してしまうという場面も見られた。また、知らない人と仲良くなるのに低学年よりも時間がかかるとも感じた。学生が仲介となり一緒に話せる話題を提供したり、人に傷つくようなことを言った場合には注意して、新しい話題を学生が切り出すことで班の雰囲気が悪くならないように配慮した。

この活動では、特に高学年の子ども同士の関わりを円滑にしていくような学生の関わり方、また自分たちが漠然と持つ「高学年の子ども＝冷めている・活動を恥ずかしがる」というイメージの再構築の必要性を感じた。これらを後期中央班において出された今後の課題である。

信州大学「信大ＹＯＵ遊広場（プラザ）」

理数科学教育専攻　４年　西澤 俊輔

１．今年度の「信大ＹＯＵ遊広場」の活動について

＜牟礼ふるさと農場・茂菅ふるさと農場＞

両農場では、農作業体験を中心に子どもとかかわる活動を行った。牟礼ふるさと農場では主にそばを栽培し、他にもイモ類・とうもろこし・落花生等の栽培を行った。茂菅ふるさと農場では昨年まで田と畑として使用していた農地を田に変更し、稲作を通して子どもたちとのふれあい活動を行った。

＜鉄腕アトム＞

「障害のある人々と、日常的・継続的なかかわりをもつことで、お互いの理解を深める」という目標のもと、「楽しい放課後クラブ　にこ²」という長野養護学校の保護者の有志が行っている活動に参加させていただき、また学生が企画して、参加者を大学に招待するなどの活動を行なった。

＜キャンパスプレーパーク＞

毎週木曜日の午後３時から午後５時、土曜日の午前10時から午後５時の２回、大学内のグラウンドを開放して、地域の子どもたちや大人たちが気軽に遊びに来ることができるような冒険遊び場を開いている。

＜ふれあいプラザ＞

子どもからお年寄りを含めた地域の方々を集めて、毎月第２・４金曜日にスポーツ教室を開いた。夏のキャンプ、冬のクリスマス会には、参加者も企画に関わっていただいた。

＜イベントプラザ＞

四季を通してそれぞれの季節を感じられるようなイベントを企画、運営した。秋には信大ＹＯＵ遊広場の一大イベントである、「ＹＯＵ遊フェスティバル」を開催した。

＜おでかけプラザ＞

学生が各自の目標を持ち、それに向かって自己を高めていくという方針のもとに、種々の小学校や公民館で保護者によって企画されている子どもたちの遊びの場に出向き、学生が中心となって遊びの内容を考え、子どもたちと様々な活動をともに行ってきた。

＜興譲館＞

不登校の子どもの居場所をキャンパス内に作ることを考えた。さらに、長野県教育委員会、長野市教育委員会と連携して、中間教室や中学校に出向き、悩みを抱える子どもと関わる「心の教室相談員」「メンタルフレンド」も継続して行った。

２．今後の課題

・学生スタッフの数を早めに確認し、活動の準備も分担し、協力して進めていくことが必要だと感じた。

・農場へは授業の空きコマなどにしか行けないため、「育てている」という感覚が薄れてしまう。全体的に作物のことを気にかける姿勢が乏しかったことは、大きな反省点である。

・主に活動する場所の他に、子どもが気分転換できるように(室内での活動は特に)、天候

に応じて場所の移動がしやすいように、もう一ヶ所場所を確保しておく必要がある。
・外で活動する時は、危険な場所がないか、移動する場合はどのくらい時間がかかるのかなどを知るために、予め下見が必要である。
・子どもとの関係が深まっても、一線を引く（～はしてはだめなど）ところはしっかりしなくてはいけないと感じた。
・必要を感じたら、自分たちで積極的に企画し動いていくことが大切だと思った。臨機応変に対応する力を身につけていく必要がある。
・プレパに慣れた反面、道具類の扱い方が雑になってしまっていたり、学生との仲が親密になるあまり、ことば遣いや礼儀などがおろそかになったりしていた。
・プラザの方針「自分自身による目標設定と成長」に少し甘えてしまった部分があり、これらへの活動参加の目的が「成長」ではなく、「楽しみ」にのみ留まってしまったこと。
・子どもが何をしたいのかということと、私たちが子どもに何を身につけてほしいかということのバランスをうまくとっていくことが必要である。これまでの活動は私たち学生や親の意向が強かったようである。
・もっと多くの専攻からもスタッフとして参加してほしい。そのために活動を知ってもらうことや、呼びかけが必要である。
・活動の度に反省会を行なっても、その反省を活かせる場がなかった。不安な気持ちのまま活動を続けることになってしまったところがあった。
・自分のプラザという意志が強く、他のプラザへの意識が弱かった。やはり全体という意識をもつためにも毎週行われる定例会を有意義なものにしていかなければならない。

３．新しいプラザ

ここでは興譲館について少し詳しくふれておきたい。このプラザは今年度から新しく始まった。「興譲」とは、「奪うに益なく譲るに益あり、譲る心こそ一国をも興隆させゆく根本精神である」という意味で、中国の古典『大学』に由来する。今日では多くの不登校の問題に教育現場の教師たちは頭を悩ませている。それに対してうまく対応されていないというのが現状である。そこで、教師でもなく、子どもでもなく、年齢も比較的に近い我々学生がそのような不登校の子どもたちの居場所を作ることが、このプラザの目的である。

それだけでなく、長野県教育委員会、長野市教育委員会と連携して、中間教室や中学校に出向き、悩みを抱える子どもと関わる「心の教室相談員」「メンタルフレンド」も継続して行うことにした。私自身、興譲館に深くかかわったが、今まで誰もやろうとしなかった分だけ、とてもやりがいの感じられるものだったと思う。ここに来た子どもたちには皆、何か収穫を得ているようである。来た当初には下を見たままで話すことすらしなかった子が、今ではみんなを誘ってサッカーやトランプをやりたがるようになり、集団をまとめるリーダー的な力を身に付けた子なども現れ、当初と比べるととても大きな変化である。

＜今後の課題＞
・今年度の「興譲館」は他機関と連携することはせずにやってきたが、不登校の親の会やフリースクールなどと連携して自分たちの活動を見直すことが大切である。
・子どもたちにとって意味の無い時間が少なくなるように、教材・題材をたくさん考え、できるメニューを増やすことが必要である。

第１分科会「学校・地域・家庭との連携」

１．参加学生

◎坂本 琢馬（福島大学）○森岡 恵（上越教育大学）小嶋 美里（横浜国立大学）
蓼沼 夏子（信州大学）野村 優衣（鳴門教育大学）伴 峰昌（上越教育大学）
小川 敦嗣（信州大学）

（◎：ファシリテータ、○：書記　以下同様）

２．意見

・不登校児の親から、世間の目やプレッシャーを乗り越えられたのは、学校側の「一緒に頑張っていきましょう」と言う態度に助けられたからだという話を聞き、「連携」に対して受身でなく、積極的な姿勢が大切だと感じた。
・昔は固有名詞の「○○先生」と家庭の信頼関係があったが、今は「学校」という組織での連携が望まれているような気がする。
・保護者と教師が人間同士の関わりを持つことが、学校と家庭の信頼につながる。そのために、日頃から継続した連絡や学級通信、懇談会などを通して、家庭に学校の様子を伝えることが必要だ。
・孤立した学校や人間関係の希薄、自然に集まる場の減少といった子どもたちを取り巻く環境を考えると、フレンドシップ活動が担うべき役割をもっと考えられると思う。
・「子どものための連携」だけではなく、地域の人にとっても連携は望まれているのではないか。
・学校へ行かずに、フレンドシップ活動へ来てしまう子どもが出た時、学校との信頼関係という点で問題が発生した。
・子どもがいるから、学校と家庭と地域とで連携しなくてはならない。
・理想は学校、地域、家庭があるところで同じ目標に向かっていることだと思う。だから相手が何を望んでいるか聞くと同時に、こちらの方針も伝えていくことが大切だ。

３．まとめ

「連携」という言葉から、つながりや人間関係・信頼関係ということを見出し、連携する双方にとって、メリットがあるからこそ成立するのではないかと考えた。それは、“GIVE &TAKE”の関係であり、その根底には助け合いの精神にのっとった関係があるのではないだろうか。

＜地域と家庭＞との連携では、両者の希薄な関係という現状を改善する良いきっかけの場として有効になっていると感じる。例えば、信大のプレイパークでは、子どもを介して親同士の交流という点でも活用されている。

＜学校と家庭＞との連携では、こまめな連絡でつながりを図っていかなければならないと考える。子どもを「個」としてみるならば、親も「個」としてみるべきなのではないか。ここで大切なのは、「継続的に」ということだ。家庭側からの連絡を待っているだけではなく、学級通信や懇親会等を通じて、学校の方針や願いを継続して伝えることが必要である。

あるところで、同じ目標を持つからこそ、連携が生まれるのではないだろうか。

第２分科会「ともに活動をする仲間との協調」

１．参加学生

◎山本 佳代（横浜国立大学）○中村 浩志（上越教育大学）浦川 玄記（広島大学）
那須 紋子（信州大学）堀口 沙織（熊本大学）吉川 千晶（上越教育大学）

２．意見

・「協調」「協」　協力→自分たちの働きかけで起こるもの
　　「調」　調和→活動していく中で後からついてくるもの、バランス
・集団の意識「みんなで協力し合おう」→積極的な活動、臨機応変に対応できる。
・しっかりと活動準備を詰める→しっかりとした活動、バランスの取れた集団
・「協調」を生むために
　＊雰囲気作り、場作り、人間関係の形成
　＊継続的な活動、個人の気持ち（同じものを目指す気持ち）、意識
　＊話し合い、意見交換
　＊意見をぶつけられる→お互いの考え方を知る。
　＊自分の考えをしっかり持って伝えようとし、相手の考え方も知ろうとする。
・「協調」をとろうとするあまりに
　＊意見の二極化を避けようとする→譲り合ってしまう。重荷になる。
　＊自分の主張をしない→自分の目指すものを得られない→集団から離れてしまう。
　＊落ち着きすぎて向上しなくなる。

３．まとめ

「協調」というテーマは漠然としていて、自分たちの中では「協力」「調和」という意味で考えていった。そこで出てきたのは集団のバランス、人間関係、雰囲気が重要だということが全員の意識にあった。

「協調」と生むためには、まずお互いを知ろう、受け入れようとすることから始まり、そこから「いい雰囲気」が生まれ、意見を活発に交換し合い、「一緒に頑張っていこう」という意識を持って、積極的にみんなが活動していくことで後から自然にうまれてくるのではないかという考えに至った。

逆に「協調」を早い段階から求めすぎたり、「協調＝あわせる」と考えてしまったりすると、十分な意見交換ができない、譲り合ってしまう、お互いを知ることが難しい、表面ではまとまっているようで、内面で気持ちが二極化してしまうなどのマイナスな面も出てくるのではという意見もあった。

「協調」とは、意見を戦わせることも、協力していくことも、自分の考えをしっかりともつことも、いろんなこと全てを含めて大事にしていくことで、自然とうまれていくものなのだというのがこの分科会を通して全員が感じたことではないだろうか。

第３分科会「体験を子どもたちの学びにどう結び付けるか」

１．参加学生

◎西澤 俊輔（信州大学）○藤岡 恵美（信州大学）渋谷 梓（熊本大学）
加登脇 大地（広島大学）飯森 玲子（上越教育大学）小川 葉月（横浜国立大学）
坂東 哲弥（鳴門教育大学）

２．意見

・体験活動が多いが、体験ができるようになるだけではなく、それを通して、子どもによって内容は違うと思うけれど、何かを学んでもらおうと思って企画している。
・学びは教えるよりも気づいてほしい気持ちがあるから、気づきは学びの前段階といえる。自分で気づいたものや体験は後々まで残るため学びとの関連性が強くなると思う。
・体験は学びや成長の節々にあって、その子の成長の助けになることなのではないか。
・興味のあることは知りたいという気持ちも強く記憶に残るが、興味のないことは必要なくなると忘れてしまう。忘れてしまうものは学びではないと思う。知っていることで自分が何らかの形で成長していけるものが学びだと思う。
・学生自身が興味をもってやらないと、学びへ結び付けることができない。
・学生自身、体験がなくても、試行錯誤しながら子どもと一緒にやりながら進めていくこともいいのではないか。自分も初めて故に、子どもの視点がわかることもある。また、正しい方法を知っていたら、それにとらわれて、発想の広がりがなくなってしまう気がする。
・単発の活動の場合、「学び」とは別に子どもには成功してほしいという気持ちが強くなる。
・失敗から学ぶものも大きく、活動の中で失敗を超える充実感、達成感があればよい。
・学生が 10 の力を持っていたら、子どもが活動から得るものは 10 以上にはならないのではないか。失敗して、これからどうすればいいか考えることで、学べるものが 12 とか、学生の持っているもの以上になる気がする。
・過剰な支援や成功、成功や円滑な進行へのこだわりが大きくなってしまうのが今後の課題。
・子どもが何かを不思議に感じたとき、「どうすればいいかな？」「一緒に調べよう」というちょっとした学生の声掛け次第で、学びにつながっていくと思う。

３．まとめ

体験をもとにした学びの存在は大きい。学生はそれを支援できるだけのある程度の知識と経験や子どもに気づかせて考えさせるような対応の仕方を身に付ける必要がある。

フレンドシップの学びは気づきが根本にある。体験しているときに気づいたことは子どもの中で光っていると思う。教育現場とフレンドシップに共通していることは、子どもが主役で、教師・学生はサポートであり、相違点はフレンドシップでは子どもの口から「なぜだろう？」という言葉が発せられると同時に、子どもは自分次第でどこまでも学んでいくことができることだ。これからのフレンドシップ活動や大学での講義など通して、教育という場での気づきをフレンドシップでの気づきと同じくらい大きくしていく方法を模索していきたい。

第４分科会「フレンドシップ活動を通しての自己の成長」

１．参加学生

◎小村 弥生（熊本大学）○岩堀 耕平（信州大学）大町 真理（広島大学）
岡部 桂子（信州大学）影石 友佳（鳴門教育大学）中野 時啓（上越教育大学）

２．意見

・子どもと接する事が苦手だったが、他の学生の接し方などから学び、子どもと接する事が楽しくなった。
・学年が上がるにつれ、受身や先輩に任せてしまう姿勢から自発的に企画を出せるようになった。先輩から学んだ事を自分なりに実践し、企画を進められるようになった。
・最初は子どもの興味を引こうと目立つ事ばかり考えていたが、徐々に先輩のやっていた裏方の仕事の大切さに気付くことができた。
・教育実習で、「あなたは先生なんだよ。」と言われたことで、改めて子どもとの関わり方を考えさせられた。

「前までの考えと今の考えとの違い」をもとに考えてみて･･･

・叱ることがその子の個性を小さくするのではという恐怖心に似た気持ちから、なかなか叱ることできず、見逃してしまうことがあった。しかし、叱らなくてはいけないときにはしっかりと叱ることがその子にとって大切だと気付いてから、まず、その子の努力を認めて、本人が理由をいって叱るようになった。
・叱った後、その子どもとの仲がぎくしゃくしてしまったことがあったが、過去に同じような場面での先輩の対応を思い出して実践し、うまく対応ができた。

「子どもと学生の立場」に関して･･･

・子どもに一方的に知識を与えるだけでなく、知らないことを共に学び、成長していく事が大事である。
・子どもを無理に自分の方向に向かせるのではなく、サポーターの立場で子どもに求められたら助けるという姿勢がいいのではないか。
・サポーターであるため子どもによって異なる声の掛け方や間合いが大切だと気付いた。

３．まとめ

成長というテーマで学生個人の成長と子どもとの立場を念頭に置いた子どもとの成長という事に関して議論した。出された意見を大まかにまとめると以下の３つに分類できる。

・子どもとの接し方（ケジメのつけ方・話し方・叱り方）
・学年ごとに違う仕事してきた（子どもと接するだけ→裏方→組織をまとめる）
・子どもとの立場を意識し、共に学び、成長する。

子どもたちが日々変化し続けるのと同じように、私達も成長していかなければならない。

また、自身の成長において、フレンドシップでの経験や教育実習で得るものも大切であるが、一緒に活動する仲間や先輩の存在が大きなものとなっている。先輩の持っている様々な技術をそばにいてみることは、後輩にとっていい刺激であり、教材であるといえる。

第５分科会「学生対子どもの接し方と子ども対子どもの接し方について」

１．参加学生

◎山本 恭兵（横浜国立大学）○北川 美奈子（広島大学）面高 有作（熊本大学）
渡辺 悠子（上越教育大学）石関 千絵（信州大学）中村 豪宏（上越教育大学）
木下 めぐみ（鳴門教育大学）

２．意見

Q1. 低学年との活動で、親と離れようとしない子どもにどう接するか。

・無理やりではなく自然に親と子の間に入り緊張を解いていく。
・親の見えるところで活動をすればよいが親が帰ってしまう。
・一対一になればその子どものことが早く見えてくるが他の子のことを考えると専属になってしまってはいけない。
・友達と一緒ならよいのではないか。しかし友達どおしでいることが多くなるのでなかなか他の子どもと仲良くなれないこともある。

Q2. 初対面では、同じ学校の子どもがくっついてしまい他校の子どもと仲良くなれないことがあるがどのようにサポートするか。

・いきなり仲良くなるのは難しいので、アイスブレイクなどの活動で話すきっかけなどを提供する。（→相手を知ることが大切である）

Q3. アイスブレイクの必要性について。

・各大学とも基本的にはやってはいるが、企画ばかりに目がいってしまいやらないこともある。
・子どもたちの緊張を解く場として必要である。
・学生が子どもを知るためにも必要である！（→子どもがどう関わってほしいかを発信している）

Q4. 子どもを叱るときはどうすればよいか。

・いじめは駄目だと叱るとき駄目だと言うだけでなく子どもがなぜ叱られているのかを分からせて、最後のフォロー（救いよう）を作ってあげる。

・子どもが分かりやすいように約束事を決めておくことが大切。

・客観的に、他の人がどう思うのかを考えさせる。

・叱った後、子どもはなかなかきりかえが出来ないので学生がフォローをする。(→罪を憎んで人を憎まずの心)

Q5. 子どもどおしの関わりをいかにサポートするか。

・学生はきかっけづくりをすることが必要なのではじめの活動でアイスブレイクなどをする。しかし、過度の援助は子どもにマイナスである。

・自由時間などを作り子ども達がやりたいことで集まり、子ども－学生－子どもでなく、子ども－子どもにしていく。そうすれば自然に関係ができていく。

Q6. 子どもをほめるときどうすればよいか。

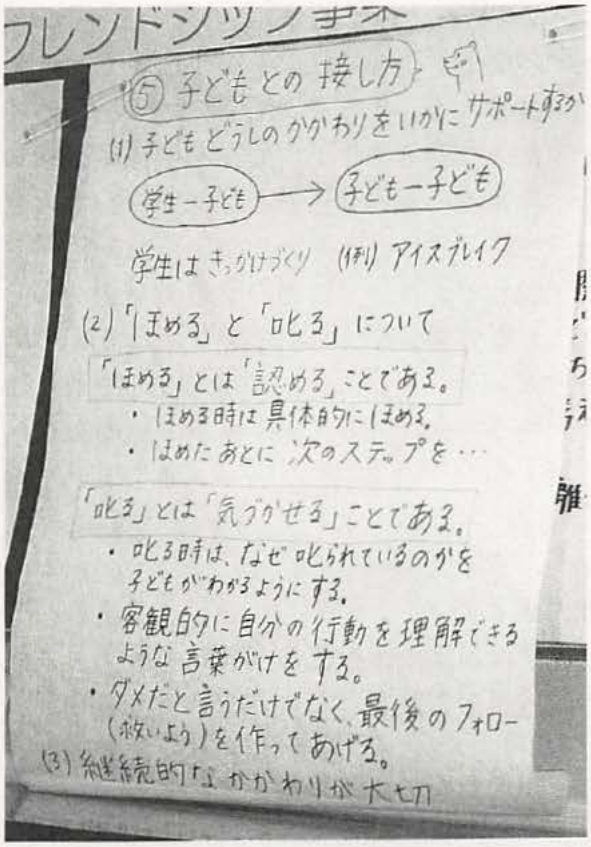
・ただ「いいね、すごいね。」と言葉を並べるのではなく、具体的にどこがいいのかなどを言ってあげる。

・ほめることは認めることである。

3．まとめ

接するということは、お互いのことを理解していくことであり、自分の意見を発信する場を作ることです。今回は子どもとの接し方を中心に話し合いをしました。各自が自分なりの方法を持っておりそのどれもが実践の中で身につけたものでした。その中で、各々が一番感じたことは継続的に関わっていくことが必要ということでした。

一度きりの活動が多い中で継続的にというのは難しいですが、その心を忘れずに行っていければよいと思います。



第６分科会「学生間のコミュニケーション」

１．参加学生

◎那須 良寛（信州大学）○二宮 理恵（熊本大学）山本 真望（信州大学）
本薗 忠士（広島大学）南波 瑞穂（上越教育大学）笹井 玲加（鳴門教育大学）
和地 めぐみ（横浜国立大学）

２．意見

・最初は活発な話し合いが行われなかったが、次第に自分の意見を言えるようになり、他者の意見も素直に受け止め、生かすことができるようになった。信頼関係を築くには長い時間と全体で何かする機会を作ることが必要だ。
・運営の幹部と活動のグループスタッフとの垣根を持たないことがうまくいく。
・企画準備段階から関わるスタッフと当日のみの参加のスタッフとの間に意識の差がある。この意識の差は当然のことであり、全体指揮をとる側としては、そのことを受け止めた上で、一人ひとりに対応したり、指示を出したり、声掛けをすることが大切である。
・活動をする上で学生間の共通理解が重要である。全員が情報を持てるように、その話し合いの場が必要であり、重要なものである。
・運営をしていく上で、持っている情報の少ない人に指示を出して動いてもらうことは、時間がかかるけれども必要なコミュニケーションだと思う。
・後輩にとっては、「慣れるよ」というアドバイスよりも情報を少しでも伝えてもらった方が動きやすい。しかし、先輩は後輩に対して、そこは“気づいてほしいこと”と考えている場合もある。その一方で、どこまで聞いてよいのだろうか、自分で考えなさいと言われるのではないか、という不安もある。
・慣れていると「こんなことぐらい分かるだろう」と思ってしまうが、細かい指示を出した方が、新しくきた人にとっては入りやすく、コミュニケーションも広がりやすい。
・互いの交流がおこる感覚で「聞きたい」「教えたい」という気持ちが起こるように、壁をとりはらい信頼関係が大切である。
・大学内でのフレンドシップ事業とサークル間の交流によって、サークルから“技”を学び、幅が広げることになった。専攻の特技を利用した活動もある。

３．まとめ

様々な経験の差や意識に差がある人たちが集まって、一つのものを創り上げるという作業は大変な苦労がつくものである。運営に当たっては、いろいろな問題や苦労がつきものである。

まず、お互いに歩み寄って、お互いのことを理解し合う心を持つことが問題解決の第一歩となるだろう。その上で、一方的に、自分の考えを押し付けたり、相手の考えを十分理解しないうちから拒んだりするのではなく、相手をよく見て理解して自分の考えを伝えていく姿勢が必要だ。日々の小さな努力の積み重ねが、人と人との信頼関係を築き、コミュニケーションを豊かにしていくのではないだろうか。

講評

鳴門教育大学学校教育学部助教授　近森 憲助

みなさんお疲れ様でした。先程の分科会でコミュニケーションというのがありましたが、実は、講評しなければならないと知ったのは昨日の電車の中でした。それでずっと聞いていて、こういう中身の濃いシンポジウムの講評をたった5分でやれというのは大体無謀なことで、それで朝から何を喋ろうかといろいろ考えていたら、熊本大学の中山先生が学生さんに「おまえの言葉で喋ればいいんだ」と言っているのを聞いて、僕も「あっそうだ」と思いました。それで、自分の言葉で言いたいことだけ言います。それから、ちょっと爆弾発言をやって、夢を語らせてもらったら終わらせたいと思います。

まず、キーワード、つまり僕が気づいた言葉だけを出します。「子どもと共につくる活動」「子どもに対する過度の支援」「子どもたちの活動の充実化」などいろんな言葉が出てきました。今まで多くのシンポジウムに関わってきましたが、あまり出てこなかった言葉が今回出てきたということは、このフレンドシップ活動はだんだんと高度になってきているといえます。

その中で、ひとつのキーワードは何かというと、「継続」だと思います。それは、いろんな意味で使われました。例えば、分科会においても1回だけの子どもとの出会いではなく、同じ子どもをずっと見続けていきたいという意見が出ていました。

それから、コミュニケーションの分科会のところを聞いてみると、先輩と後輩の間における継続性の問題も出てきていました。だから、4年間しか大学にいない、その中で6、7年やっていくと歴史が出来てきます。その歴史の中で、自分たちがいるということをどのように、例えば、今の1年生が自分の位置を認識できるのかという問題も出できたのです。これは、第1回の時は、このフレンドシップ事業とはどういうものなのだろう、と手探り状態で始まりました。だから、大門君や林君、今回の実行委員長の伴君や岡部さんたちは、歴史があまりないところでやってきたから、勝手なこともでき、いろんなことができたのだと思います。ところが、だんだんと先輩っていうのが出てきます。大体、先輩というのは、金は出さない、出さない代わりに口は出すというのが定論ですから、そうすると、一つの歴史の中においてある形でやっていかなければならないという問題が、ここに生じてきているように思います。これは、新しい問題です。

もう一つは古い問題です。いつまでたっても変わ

らない問題は、先程も出てきた、自主参加型の人と必修の単位を取るために来る人。この意志のずれの問題は、ずっと尾を引いている。それをどのように解決していくかという一つの解決策は示されてはいるけれども、歴史の中でさらに、いろいろなものが生まれてくると思います。結局、このフレンドシップ活動はどういうことをやらなきゃいけないという枠はありません。それからもう一つ、今日の分科会にいらっしゃっていた戸北先生がおっしゃっていましたけれど「正解はありません。」どういう形でもいいし、どういうふうな答えが出てくるか、ということもありません。いろんな問題の中、今、僕が例に挙げた人たちの問題でも、多分正解はないのだろうと思います。そうすると、どんな形でもいい、正解はないと、どんなことが起こるかというと、試行錯誤を繰り返しながら問題発見の旅はずっと続いていくということです。その中で皆さんが、それから参加してくれる人が、あるいは卒業して就職した人が、何をそこから学びとっていくか、ということが我々の課題だと思います。

そこで、だんだんやっていくとマンネリ化になってくるから、ここで一つ爆弾発言を投げ込んでおきます。私は今、こう考えているということをみなさんは一つ知っておいてください。タイトルでいうと「フレンドシップ活動アメリカツアー」というものをやりませんか。これは、今年の8月くらいに国際的な関わりというものがありまして、そこでいろんなプランを募集していたわけなのです。谷塚先生にはお話しましたけれど、全国からフレンドシップに関わっている人を集めて、ひと月に一回もちまわりで研修会をやって、最後は8月の夏休みに直前合宿をやって、アメリカでツアーをし、そこでアメリカの子どもたちと一緒になってフレンドシップ活動をやる。これは結構面白いのではないかな、と考えています。

私は昔から「ほら吹き近ちゃん」といわれていまして、結構いろんなことをいうのですが、私の胸の中には、一応基本的なプランは出来ています。あとはお金を出してくれるところを探せばいい、ということで、これからは画策していきたいと思っています。ですから、みなさんといろんなことをやりながら、この問題発見と試行錯誤を繰り返しながら、その中でいろいろなことを獲得していただきたいと思います。

それで、最後ですけれども、今回このような形でフレンドシップ・シンポジウムを行われたこと、明日からの子どもたちの活動、今日までいろんな成果が得られたと思うけれども、明日から始まる活動で、さらに豊かな大きな成果が得られることを期待します。それから、もう一つは、この活動に火をつけた一人である土井進先生が、昔のように120%全快でこのような場で、あの「土井進節」を語ってくれることを懸念して、最後に関係者の皆さんに厚く御礼申します。

最後に、私は幸せです。そして、これからも幸せにしてください。それでは、どうもありがとうございました。

信州大学・上越教育大学共催　第２回コロキュウム

～「臨床の知」－「学習臨床」は教員養成をどこまで変えたか～

月　日：平成 15 年 3 月 7 日（金）
場　所：国立妙高少年自然の家（新潟県中頸城郡妙高村）学習室 1
テーマ：フレンドシップ事業は学生に何をもたらしたか
　　－臨床経験を中心とした教員養成カリキュラムのあり方－

日　程：

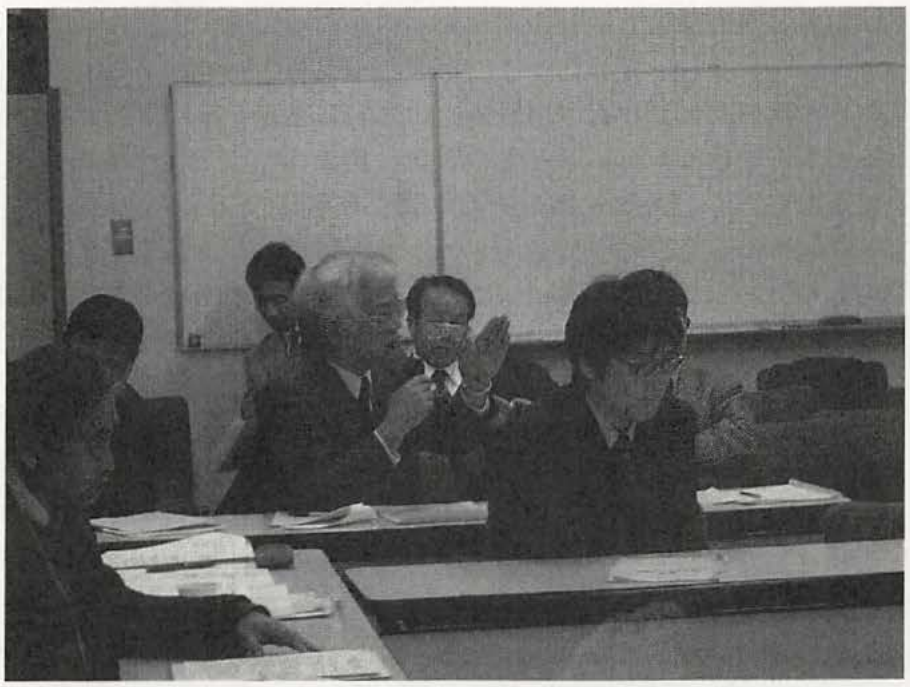
1．開会挨拶

2．指定討論（話題提供）

① 鳴門教育大学学校教育学部　　近森 憲助 氏
② 国立妙高少年自然の家　　吉越　勉　氏
③ 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター　　中山 玄三 氏

3．ディスカッション（自由討論）

4．閉会挨拶（講評）　　信州大学教育学部　田巻 義孝 氏



指定討論（話題提供）

鳴門教育大学学校教育学部　近森 憲助 氏

第１回全国フレンドシップ活動では地引網の単元活動を鳴門市の海岸で行いました。その活動において、参加者である小学生と、指導者として参加した全国５大学から集まった学生たちがどのような学びをしたのか、特に教員養成という点からみてどういう学びがあったかを考えてみたいです。参加大学は、熊本大学、上越教育大学、信州大学、横浜国立大学、鳴門教育大学です。

学生たちには、「子どもたちの活動中の行動や態度について、あなたの感じたこと、意外であったこと、好ましいと思ったこと、感心できないと思ったこと、後から考えてこうすればよかったと思うことを書いてほしい」という設問を設けました。

＜子どもの行動・態度＞＜子どもの変化＞＜子どもと自分との関わり＞＜子ども同士の関わり＞＜子ども同士の関わりと自分との関わり＞これらのカテゴリーを設定し、書かれている内容から判断して分類し、回答数を数えていきました。

記述例をあげてみると、＜子どもの行動・態度＞では、子どもの魚が捕れたときの喜ぶ様、普段魚嫌いな子どもがおいしいといって魚をたくさん食べていたとかなどの、子どもの行動のみが書かれたものです。

カテゴリー別に回答数で見てみると、＜子どもの行動・態度＞36 件、＜子どもと自分とのかかわり＞25 件、＜子ども同士の関わり＞に関して 15 件、このことから学生の目はかなり子どもに集中しているように感じられます。設問がこのような聞き方でしたので、ひょっとしたら、それにかなり依存しているのかもしれない。その一方で、＜子どもの変化＞＜子ども同士の関わりと自分との関わり＞についてはあまり書かれていませんでした。しかし、中にはおもしろい記述もありました。

（図の解説あり。）

○午前中はレクリエーションなんてつまらないと言い、顔を前に向けず海の方を呆然と見ていた子どもがいました。＜子どもの状況、態度＞

○スタッフは「おもしろいから一緒にやろうよ」と無理にでも参加させようとせずに、ただ時間が過ぎていった。＜子どもとスタッフとの関わり＞

○段々鯛が釣れてくると、後ろの方にいたその子が前の方にやって来て、＜子どもの変化＞最後は自分から「おいしいね」と声をかけてきてくれた。＜子どもの行動＞

○自分と打ち解けあえた。午後からのレクリエーションでは積極的ではなかったけれども、顔は笑っていた。＜子どもの行動＞

無理に引き込まなかったスタッフの“待つ”精神を評価したい。

子どもの状況に対しての自分の考えを述べ、そのスタッフに対しての自分の評価がきちんと述べられていて、非常に目配りのきいた、いろいろな場面を次々ととらえて、文章にまとめ表現できている学生もいます。

土井先生がよくいっていたように「フレンドシップ活動の目的は教員養成系大学に学ぶ学生たちの実践的指導力をあげることである」子どもたちとの関わりから、それを上げる

というのだけれども、実践的指導力とは具体的にどういうものなのか。土井先生が具体的に書かれたものがある。それは基本的に子ども理解なのだ。子ども理解なのだけれども、では、具体的にどうやって得られるものなのかを、子どもとのかかわりや他の学生のかかわりなど、いろいろな人間とのかかわりの中から学生が自然につかみ取ってきている。私なりに、このレポートからそのことが読みとれました。

フレンドシップ活動を教員養成の立場から見ると、プログラムの内容というものが、参加した学生にとってみると野外体験活動のなかで自然に生まれてくる様々な人とのかかわり、関係性を体験することを通して学んでいくのではないだろうか。野外体験、広くとらえてフレンドシップ活動は子どもだけではなく、教師も様々な学びを体験することができることを期待できる。つまり、そこに参加する全ての人々に、学びの機会と場を提供している。当たり前の話ですが、レポートの分析から、私はそのことを確認しました。学びのための要素として、教授法や教材ばかりに目が行きがちだか、いろいろな人間関係が学びの豊かさにとって大事なのではないかと思いました。

国立妙高少年自然の家　吉越 勉 氏

妙高少年自然の家では、本年度、上越教育大学のボランティア体験の学生 35 名、信州大学の教育参加学生 29 名を受け入れてきました。多くの学生が事業にかかわり、いろんな学びをしました。教員の立場から考えると、期待したい事はたくさんありますが、特に新採用の学生さんを見ていると『本当に子どもが大好きかな？』と思うこともあります。私はそのへんのことが一番大事であると考えています。新採用の先生方は事務的な面やその他にも優れている点はたくさんありますが、このことを疑問に思うことが多々あります。教員の世界に入ってしまうとなかなか育てにくくなるのが現状なので、学生のうちにこのような素晴らしいフレンドシップ活動に参加して、子どもへの愛情、やる気を育ててほしいです。読売新聞に求められる教師像のランキングが掲載されていました。子どもの側からすると分かりやすい授業、保護者（大人）の側からすると情熱や意欲とか愛情が挙げられていました。私も、そこを求めたい。

ここでは二週間の夏休みのキッズ・アドベンチャーと秋の通学キャンプでの二つでの学生や子どもの様子を述べたいと思います。私自身の経験からもいえることですが、こういったキャンプでなかなか子どもたちが変容しないと言われる。たった 2 日や 3 日間では子どもは本音で語らないし、自分の本性も出さない。しかし、そこに学生がどのように関わっていくかが、重要な課題となってくると思います。

私たちの事業の基本的考えは、「子どもは自己選択・自己決定・自己責任」であり、その考えに基づいてプログラムを構成しています。となると、学生は何をするかといえば、何もせずに、じっとみて見守っているだけである。これは大変なことであります。

私たちは長期間のキャンプのなかで一つの家族を作りたくないと考えました。親元を離れ、異年齢の子どもたちと過ごす中で、子どもたちに自分の力でやり遂げる達成感を与えたいという願いがあります。学生がリーダーシップを発揮してしまっては子どもは育ちません。そこに学生がどのように関わっていくかが非常に難しく、意見を求める事もしばし

ばあります。また、もう一点は、こどもの様子・態度がどこかで変わるところがあります。そこを視点として、子どもをみつめ、その理由を知る。その理由が学生の投げかけた一言かもしれないし、人間関係、友達関係から生じたものかもしれない。

今年のキッズ・アドベンチャーでは2泊3日の「自然探検」というプログラムを行いました。24.5㎞離れた所へ地図をみながら、迷いながら歩いていきます。学生は後をついていくだけです。そこには、水も電気もトイレもありません。そして課題は、途中で農家によって3日分の野菜を買っていかなければならなく、子どもたちは玄関の前に立って「どうする？どうする？」といっては、引き返し、いつになっても野菜が買えないでいました。学生はイライラしても、じっと我慢しているしかありません。

グループで買ってきた野菜だけで食事を作るので、班によっては大根1本しかない班もありました。でも、大根1本でもいろいろな料理が生まれてきました。学生は「あれを作りなさい」ということは言わず、子どもの自己決定にまかせて料理をします。

○子ども（小6・男子）の感想

僕はこのキッズ・アドベンチャーを通して3つ学びました。1つ目は「協力すること」。学校では先生の言ったことをただやるだけだけれども、ここでは違います。野外調理でも自分たちで考え、相談していろんなことを決めなければいけません。協力したりしてやらなければなりません。2つ目はとばします。3つ目は「自然の素晴らしさ」水がとてもきれいで、水道の水よりも何倍もおいしかったです。また、雨が降れば、木は自然の傘となります。とても感動しました。

○学生（サポーター）の感想

“子どもは子どもじゃない”

口を出すのは管理だけ、あとは失敗しても子どもたちの決定に従うだけで、そういう気持ちで臨んだけれども、とても大変だということを思い知らされました。野外調理の時は「火が弱いよ」「蒔きは？」「味は？」何度も言葉をいいました。

この学生はそうとう我慢したようですね。この学生はキッズ・アドベンチャーに2回参加した事があります。2年生のときに下済みをいっぱい経験して、3年生になって班に入りうんと学びをしたようですね。

キッズ・アドベンチャーに参加した大学生に対して子どもと同じアンケートを行ったところ、社会的スキル、自己構築力、自己判断力、ストレス判断力、自然への感性の五項目について、いずれにおいても有効性があるという数値が得られました。

○秋の通学キャンプに参加した学生の感想

長期間一緒にいることで、1日や2日では気づけなかった、子どもたち個人の良さに気づく事ができ、発見する度に涙しました。また、昼間は大学に戻っても、取り付かれたように子どもたちの活動のことを考えて、退屈な授業になると、すぐに妙高の子どもたちを思い浮かべ、頭がいっぱいになっていました。それほどこの通学キャンプは充実したもので、私にとって有意義な1週間となりました。

子どもへの愛情はこういった文章からうかがえると思います。今回のキャンプの大きなねらいはコミュニケーション能力でした。冒険教育に振り返りの手法を取り入れました。キャンプの始めは、子どもの質が違えば、サポーターの力量も違うわけで、班によって差ができてしまう。ということを述べていって、最後に、どれだけ子どもたちを見ていたのか、

というと、任された班をまるごと見ていて、一人ひとりがどうだったのかを見ることができていなかった。と感想で延べています。教員になったから、見られるというわけではないけれども、“ひとりひとりを見ていこう”ということの大切さに気づけたことで、教員になってもそのことを心に留めた手法をとっていけると思います。

私自身、学生さんたちに様々な体験をしてもらって、いい教員になっていただきたいと思っており、このフレンドシップ事業がますます発展していくことを願っています。

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター　中山 玄三 氏

第 2 回の全国フレンドシップ事業が熊本の阿蘇青年自然の家で行われました。そこでの活動の中で、学生がどのようなことに気づき、どのような事を学んでいるのかを中心に述べていきたいと思います。

このようなトライアングルを考えてみました。熊本大学では、過去 6 年間のうち最初の 3 年間は子どもと関わる活動を計画、実施するのは、教官が社会教育施設や学校と連携しながら、セットして、学生はそれを受身的に体験していくという形をとっていました。それが平成 11 年度の信州大学でのフレンドシップ事業に全国フレンドシップに学生が参加する事を契機に、教官が提供するこどもと関わる活動だけではする学生の側（体験する側）に主体性がなく、受身的になってしまう。ただ体験するだけになってしまい、目的意識が育ちにくい。そのことから、学生が計画・実施する活動へと進んでいきました。

平成 12・13 年度の課題は、学生の主体性に任せて企画・実施するあまり、楽しい体験で終わってしまった。その裏の論理は、やっている学生が楽しくなければ、関わっている子どもたちも楽しくないじゃないか、その逆をとって、自分たちだけが楽しければいいんだという、楽しいだけの体験で終わってしまった。このことが、一番の反省でした。

それでは、子どもと関わる活動を通して体験したことを、どのようにして私的な気づきにかえていけばよいのかが、大きな課題となりました。いわゆる、ハイマール経験主義といいますが、こどもと関わる活動の中で実体験したものをどのようにして知的なものに変えていくか、僕のテーマでいうと臨床の知ということになりますが。信州大学教育学部と鳴門教育学部のフレンドシップのシンポジウムにかかわりまして、学生の発言に注目してメモをとっていました。そうして、できあがりましたのが、この資料の最後に示してありますが、学生が子どもと関わっていくところには発達的要素が含まれているのではないかということを見出してきました。5 つのレベルがあるようだ。レベル 0 として、「子どもとどう関わったらよいのかわからない」という段階。レベル 1 として「子どもってこんなんだぁ」と子どもの実態、事実を知る段階。レベル 2 として「きっと子どもってこうだろうと」思い込むのだが、その予測とは反する事実があることに気付く段階。レベル 3 として「自分が期待するところまでやってくれるだろう」と期待する側から子どもをみる段階。子どもの成長の具合を見るという、表裏の関係が見られるようになる段階。レベル 4 として、授業目標や教科目標に関わることになりますが、「自分の期待ではなくて、集団が基準に、ある目標に対する子どもの変容を見るのか、子どもの側からみるのか」という段階。

こういった五つの段階があって、特にこのフレンドシップではレベル 0〜2 あたり、つまり、子どもの思い・考えや行動についての予想を持って関わり、それが裏切られる。子ども像の再構築のあたりがベースにあるのではないのかと、昨年末に気づきました。そして今年度はこどもを見る目という目的意識を持って体験してくださいと。

私は今まで計画、実施段階から関わっていたのですが、本年度からは企画・実施はすべて学生と社会教育施設に任せ、その代わり月一回の報告会で体験したことを発表する場面で、私が「それで、あなたはどうしたの？」「それで、あなたは何？」と質問だけをする係になりました。それでもって、学生のレポートの中で、本当に学びが成立しているのかをこういう風にみてきました。まず、学習とは行動したことにより、学生の行動が変わることである。学生が自分自身で過去の行動と今の自分の行動が同じかどうかが見られて、しかもそこに変化が見られたかどうかについてだけに着目しました。つまり、同じような活動内容での、自分の行動が以前（前期）と現在（後期）でどうかわっているのかを、学生自身が気づいて、文章に表現できるかどうかに着目しました。

今年度は 2 年生 11 名がレポートを提出し、そのうち 4 名が、過去のあるときの自分いまの自分とを比べて、自分に変化があることに気づき、報告できています。つまり 45%は自分の変容に気付き、残りの 55%は自分の変容に気付いていないことになります。つまり、これまでの表現上、学習・学びという意識が出ていないという現状です。つまり、45%の学生は自分の体験したことをもとに経験を再合成し、どういった場面で変わったのかを、個人の知（個別知）として創り上げていることが分かると思います。残りの 55%は活動がどうであったかという、事実レベルにとどまっているのです。

今から、体験をもとに、こども理解がどのようなものか、具体例を挙げたいと思います。

事例④　男の子の特性を理解し、自分の苦手意識を克服すること

自分は男の子が苦手なのだという自分を再構成している場面

自分のとらえていた男の子像と実際の男の子の特性の違いに気づき、その特性を踏まえた行動をとったところ、楽しく関わることができた。

→「体験」を自ら振り返り見直すことにより（経験の再構成）、実感を伴った「子ども理解」、関わりの知恵を見出している。

事例⑦　子どもの行動の裏にある子どもなりの意味や理由の理解

自分の思い込みで行動することが多く、子どもの行動をしっかり考えることができなかった。継続的な関わりをしていたため、過去の子どもの行動を振り返り、自分の行動を見直し、修正することができた。個別知を得た。

→「体験」を見直し「活動・行動」を自ら修正することによって、実感を伴った「子ども理解」がより一層できるようになる。

実体験から得た自分なりの子ども理解の知を、今後どう活かしていくか。これは実践力の基盤となる生きて働く知。これは、たまたまフレンドシップ活動でこどもと関わる活動かもしれないし、将来的には授業計画、教科側の活動にも反映されるでしょうし、社会や家庭、地域の中でも基盤なる要素がたった一人の学生の書いた事例にあります。

事例⑧　子ども一人一人の特性に応じた関わり方

今まではタイムテーブルばかり気にしていて、子どもをせかしたりする場面が多かった。子どもの中にはじっくりと時間をかけて活動したいとする子どもが居る事が

分かった今では、時間を十分に考えてタイムテーブルを作ったり、子ども一人ひとりに応じた接し方をしていきたいと思いました。

→実感を伴った「子ども理解」をもとに、「子どもとかかわる活動」を自ら見直し修正できるようになる。

このように、子どもにはそれぞれ違いがあることを知り、今度はそれを考慮して計画をしようというトライアングルのサイクルがようやく学生たちに見えてきたことが成果だと思います。

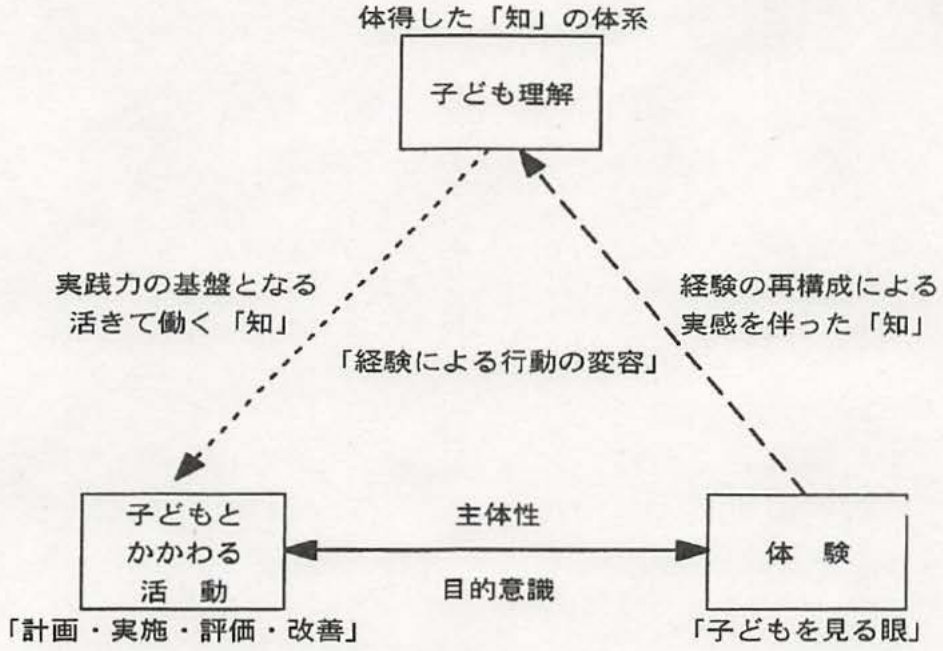


図　*フレンドシップ事業で期待される「学び」*

どうしてこのような報告をするかというと、うちの学部長がよく言います「サークル活動は体験するだけじゃダメなんだ、必ず学生の知、学びとならなければならないのだ」と。

そこのところをきちんと意識して学生指導をするように言われました。

ディスカッション

※発言者の敬称略

赤羽：臨床経験を中心にしたカリキュラムをどう組んでいくかというというようなことが非常に大きな課題になっていますし、いろいろな取り組みが現在なされております。その辺のことと、さらには今回を契機にしまして、これからの我々の方向を、何か新しい芽をみなさんの話の中から出していければと思っておりますので、自由にご意見をいただければと思います。最初に、3 人の方から話題提供をいただきまして、そのあとフリーにディスッカッションをし、深めていければと考えておりますので、ご協力よろしくお願いいたします。今日は、鳴門教育大学の近森先生、それから、国立妙高少年自然の家の吉越先生、それから熊本大学教育学部の中山先生、この 3 人の方に話題提供をいただいた後、みなさんの意見を聞く時間を取りたいと思いますので、さっそく入りたいと思います。

最初に、近森先生お願いいたします。

近森：指定討論（話題提供）①

赤羽：はい、どうもありがとうございました。続きまして、吉越先生お願いいたします。

吉越：指定討論（話題提供）②

赤羽：どうもありがとうございました。それでは次に、中山先生からお願いいたします。

中山：指定討論（話題提供）③

赤羽:どうもありがとうございました。先生方の話題提供についてご質問がありましたら、お願いいたします。特にありませんでしょうか。また討論の中でぜひ深めていければと思うのですが。

濁川：ただ単に体験をしました、という実際には、大きなフレンドシップ事業になりますと、中核となっている学生と参加している学生がいたときに、非常にそういうことが多いわけですよね。先生はそれを経験した後で、口頭ではなしに、本人と確認している。それを効果的に行うには、フレンドシップってどうやって行っていったら、学生たちは、ただ単に楽しいのではなくて、そこから自分が何を学んでいったのか。そういうものをもっと内省的に捉えさせていくにはどうしたらいいのか、その辺をお願いします。

中山：きれいな言葉でいえば支援ですが、学生にとっては脅しの存在だったみたいです。私は今年、そのステップをこういうふうに考えました。学生が主体的に企画・実行・実体験する、社会教育施設の方とともに企画する。これは全面的に任せました。そして帰ってきたときに必ず、報告会というのを月 1 回して、その中に、子どもにとっての目的は達成されたか、学生にとっての目的は達成されたか、課題は何かということを必ずレポートに書かせました。形式無しで何でもいいから。そのときに、僕がいつも心がけたのは、学生振り返り、リフレクトできるような実体験を通して何を気づいたかを、自分で自覚できるような場を教官が支援することでした。そのときの僕のキ

ーワードは、いつも一言だけだったです。「それで何？」「それでどうしたの？」「具体的な場面で、どういう場面で、子どもが何て言ったの？どうしたの？それに対して、あなたはどうしたの？それで何？」ということしかいつも聞かなかったです。具体的に言いなさい。あなたしか体験していない、あなたの言葉で言いなさいと、そこだけ言いました。すると、事例の 3 にありますが、これだいごさんでのことなのですが、『4 人のうち 3 人の子とはとっても仲良く楽しくできたけれど、1 人の子とは最後まで心からの笑顔を引き出すことができませんでした。できないのがだめなんじゃなくて、それを自分の心のこだわりにして、次の活動までの課題だと思いました。』と思えるためには、「それを課題にしなさい」と言ってはだめなのです。ここの支援が一番難しいんですが、僕は今年こだわったのが、アメリカで聞かれていた「So what？」ということで、「それで何？」ということを強調していました。だから、僕は学生にとっては厳しかったみたいですね。学生にとってはそこを答えるのが、一番苦しかったみたいです。ですが、一年間同じ質問をしていると、絶対あの先生また言うぞと思い言われる前に、「ですから、それで何ということなんですが」と具体的に言い始めました。それでも半数位が的を得ていないのですが。経験を再考して課題をつなげていくということにいい活動があれば教えていただきたいです。私は、それでやってきました。

濁川：具体的な提案だったと思うのですが、例えば学生は自主的な活動で学びながらやっているわけですが、そういった場合に、こういった形で学生に口頭で問いかけるというのはなかなかできませんよね。自主活動であるわけだから。120 名～130 名の学生を一人ひとりやれません。そうすると、ポートフォリオみたいなものを出させていたわけではないんですね。どういう方法でやられていたのですか。やはり、体験だけで終わらせないで、どうやって学生たちが自らの経験を振り返りながら、そのかかわりのあり方をきちっと自分で見つめていくか。これをどういうふうに支援していくのか。これが課題なのではないか。今日の議題にもなると思うのですが。授業だとそれができるのです。それは単位を出すか出さないかですから。ボランティアに行った学生に対して、どうやってきちっとこういう視点からまとめなさいという形でいくと、授業ではできそうなんです。学生の自主活動において、その辺はどうでしょうか。

中山：授業としてではなくて、学生の活動のときに、必ず報告会をやるようにしておいてもらい、そこに僕が参加していって、ずっと聞いていて、最後「それが何？」という場面があるところだけちょっと言いました。あとポートフォリオですが、それやると学生が面倒くさがります。そういう意味で報告する場だけ設定しておいて、同じことを繰り返しているときに、何で同じことを何回も言うのと問いかけます。学生の反省で、「子どもとどう関わっていいか分かりませんでした。全然笑わない子どもがいました。分かりません」ということが出てきます。また次の報告でもそれが出てきたら、どの程度まで自分が関わろうとして、どこまで自分が改善されたのかをきちっと書きなさいということは、言いました。分からないというのは最初だけで、2 回目、3 回目は、分からない度合いを同じ言葉で繰り返さないようには言っています。それだけでも、1 回のレポートの中でも自分の変容を学生は書けるようになると思います。だから、ポートフォリオで個別・班別にやっていくのも手なのですけれども、一括して振り返る場面で、どう変容を捉えられるのか、その例として例えば、今日の『成長』

という分科会がありました。信州大学4年の岡部さんが、その場でこういうことを言っています。「1年生のときは、自分は子どもから人気を得たい、だからボスで引っぱりたいと思っていた。でも裏方がいることに気づいた。3年生になってみると、子どもと一緒に同じ立場で対等になって関わることが大切なのではないかなと考えが変わってきました。教育実習が終わると今度は、学生は先生とどこが違うの、だから友達ではないよと言われたので、自分の立場が教えるのか、同じ立場なのか、もう一度繰り返しがきました。今は、子どもと自分が分かれているのではなくて、自然とその場その場に応じて、自分の立場を相手を見ながら関われるようになったし、楽しければ良いというところから、自分のリーダーとしての責任もあるし、子どもと関わるのも、そういう相手をみて、時と場合によってどう関わっていくかをみるようになりました。」これが4年間の振り返りですね。これができるようになれば、必ずしも書いたり、継続的にみたりしなくてもいいかと思います。

田巻：今言われたようなことが全部経験だけなのですね。問題対決、現場にあたって何かつかめということですけれども、やっぱり大学でやっているからには、過去の文化というか、たくさん先生が本を書かれている。子ども理解なら、それについての本があるわけですし、集団の中で子どもをどう理解させるかについても、絶対本があるわけなのですが、彼らは読もうとも見ようともとしない。自分の経験、それがすべてなんだという感じでみんな話し合っているのが、ものすごい気になったのです。先生のおっしゃることは、分かるし賛同できるのですが、しかしやっぱりそこに自分の違い、足りないところを気づくためには、本を読んで勉強してという過程も必要ではないかと思います。それをやらない限りは、単なる体験指導主義であると思います。結局何をもたらすのかと分からなかったもので、そのことところを教えてください。

中山：今日、福島大学の学生さんのレポートの中に、まさしくその答えが書いてあったのですが、私はフレンドシップでは実体験を豊富に持ってもらって、課題意識をもってもらいたい。願わくは、それが実習のとき、あるいは教育学部での普段の教育心理学の意味付けとして使ってもらいたい。例えば、褒めるということを学生はこういうふうに言っているのですよね。「褒めるっていうことで、子どもは本当に一生懸命やるようになり、その効果に驚いた」と。褒めるということの意義・価値を体験で書いている。その両方が必要なときに、学生が個別に自分の実感事例と、一般的なものを自分なりにくっつけていけるためには、体験も必要であるし、講義も必要である。片方の講義を否定するわけではなくて、あとは学生がその意味を持って、学んでいくことに価値があるのではないでしょうか。

田巻：体験を否定しているつもりはないのです。経験したことをまとめて、考え方を向上させ、自分のあり方を磨くんだというそのときに、やはり経験だけではなく、他のものも使ってほしいなという気がするものですから、そのことだけ言いました。

中山：僕もそれを感動したものですから、大学の授業（座学）をないがしろにしては、体験的な学習の意味がなくなってしまうということを忘れてはならない。僕は本当にそう思います。あくまで、大学における授業（座学）を実践する場が体験的活動であって、体験的な活動としての付属としての大学の授業があるわけではない。こういうふうに、福島大学の4年生の学生は締めくくっているわけですけれども、これは僕がい

つも言っていることで、ここで解決するのではなくて、それから自分たちが専門を学び、あるいは実習に行ったときに裏づけをする要素になってくる。

赤羽：ここに参加している多くの方が感じている大きな課題であると思いますので、もう少しご意見をいただければと思うのですが。今のことに関連いたしまして。

中山先生がかなり明確に図を描いて説明していただいたのですが、その辺の考えについて、いかがでしょうか。そのまま、フリーディスカッションでいきたいと思うのですが。

濁川：フレンドシップの中で言われたことの中に、比較的1年生、2年生の段階で子どもたちとの触れあいが、3年、4年と継続している学生もたくさんいます。その考えが最初に出てきた中には、大学に入って、座学いわゆる学問をずっと勉強していって、教育実習にいって、その知識だけでは、学ぶことの意味が学生たち自身が意識しないままに講義を受け身で受けている。そうすると、もっと1年、2年の段階で、体験的なことを入れながら、そしてその後に本当に学ぶことの意味、そして専門の教科の勉強をという、そういう一つの体系的なカリキュラムを考えていく必要があるだろう。それがいわゆる、今指摘されていることだろう。だから、私はやっぱりただ体験で終わるわけにはいかない。その先で学生たちは、ここで体験したものを過去の文献にあたったりしながら勉強していき、考えていく。だから、体験の無い中で、いくらやってもみんな落ちこぼれていってしまう、剥落していってしまう、という教員養成でなくて、体験的な活動を取り入れていったらどうか思います。

田巻：僕が来たころフレンドシップはありませんでした。しかし、ちゃんとした教師が育っています。だから、経験がすべてだということはないと思います。彼らは、本で学んで、あるいは先生がおっしゃった退屈な授業で大学を終えて、現場でちゃんとした教師になっています。だから、今の学生に比べたら体験というものが少なかったのだと思います。体験が無ければそれが伴わなければ、いい教師になれないんだという決めつけが、学生を甘やかしているのではないですか。体験さえすればいいんだということにはなりませんか。

濁川：私も学問をすることについて、否定をしているわけではないんですよ。ただ、指摘されていることは、子どもたちとの関わりが少子化の中で、どれだけ幼少期から大学に入ってくる間に、他人と関わり、子どもと関わり、やってきているのか。それが今、教育現場の大きな問題になっている。そういったことを、そういう現実がありながらも、そのまま勉強に入っていってしまう。それでは、効果的でない。本当に学ぶことの意味を少しでも、ヒントとして体験を通す。それと平行して、大学で学問をやっていく。そこにやはり意味があるということで提案されてきたのが、フレンドシップであったと思います。正直いまして今現場では、子どもたちとの接し方で、本当に教師はどうしていいか分からないという実態があり、それはものすごい数なわけです。それで、文部省が実践的な指導力の基礎を培い、もっと子ども理解を深めるために、様々な子どもたちと接触する機会を増やしておくということが現実の声だと思います。

だから僕は、あくまでも徹底して否定をするわけではない。それは初期の段階に高等学校の段階で多くの学生さんは、部活動と塾の毎日を過ごしていて、幼少期の子どもたち同士の関わりがなくなってきているわけです。かつての人たちは、みんな覚え

ていたわけです。それがいろいろな形で、教育現場に問題となってきていますので、それを理解していただきたいと思います。

赤羽：はい、どうもありがとうございました。先程、近森先生の話の中に野外体験活動の重要な要素として、人間関係を学ぶということがありました。特に、人間関係も学生との人間関係ではなくて、社会の人。いま大学で僕らが感じているのは、現場に出て行くのだけれども、現場の学校の先生との関係はいい。ただ、保護者との関係、あるいは地域との大人との関係ですね。この辺ができないと非常に困るという話がよく聞かれます。その辺、先生いかがでしょうかね。

近森：それについては、この論文の中であまり触れていないのですけれども、それは先生のおっしゃるとおり重要な要素であります。ですから、例えばこの大門政憲君の卒業論文をベースにしたもので、私が論文の形にしたのですけれども、結局こういうことをやることを通して、例えば小学生を募集しに行くとか、そういうことで小学校の先生たちとそれなりに関わっていく、また校長にまず募集してくださいという形で申し込みに行く。この学生なんかは学部の学生時代に、いままででもっとも多くの、いろいろな学校の校長先生に会っています。それからもう一つは、この牟岐は海で夏にやるときは、海の中に入りますし、船に乗って沖にある大島という無人島に行くという活動があります。そうすると、その中で事前に保護者と子どもに一緒に来てもらって、そこで手続きをやると同時に説明会をやります。そのときにも、当然保護者の方たちといろいろな形で関わっていくわけです。こういう活動を通して、企画とか実際に運営していく段階において、自然にそういう活動が入ってくる。それによってまた、いろんなことを学んでいくというようなことになると思います。

渡辺：前から気になっていることがあるのですが、自分も分からなくて、僕は生涯スポーツ課程というところにいて、スポーツ活動を非常に多くやって、また横から眺めている部分もあるのですが、過去自分が育てられてきたスポーツの現状を振り返ってみると、非常にいわゆる軍隊式のもので、自分で何をやったのか反省しなさいというのはほとんど無くて、ただやりなさい、やりなさいという教育を受けてきたんですけれども、普段はそうではないと思いますが、スポーツも広いですから、なかなか解き明かせません。自然教育とか野外活動、野外教育において、なぜ自然の中で活動をすると、人間関係を始めとし、子どもが変わる。僕は神秘的なものも好きなので、自然には偉大な力があるのかなと思ってしまうのですが、それが自然ではないところで、例えば町の中でおもしろいことが、今の子どもたちにとって、いっぱいあると思うのですよね。テレビゲームをやっていてもおもしろいかと思うのですけれども。なぜ自然の中でやると、先生方がアピールされるみたいにいい効果があるのか。自然の中でやると効果がありますよとはいろいろな方がおっしゃるのですが、なぜということに僕自身は答えてもらったようなものを見たことがないんですよね。それは、問いの立て方が間違っているのかもしれないのですが、そういうことで、ヒントを与えていただけたらと思うのですが。どなたでも結構です。

近森：私の考えを聞いていただきたいと思うのですが、先程時間の関係であまりご紹介できなかったのですけれども、この事例は環境教育ですが、活動っていうのはこんなふうに一種のカリキュラム構成みたいなものを示しているのですけれども、それで実は

こういう活動っていうのはいろんな形でやられました。山と川と海というのが一つで、もっと下は空気、水、土という自然の構成要因。それで山と川と海があって、それがいろいろな形でみんなの生活中に関わっているんだよということを、まず子どもたちに意識してもらいたい。楽しい楽しくないということよりも、こういうことを意識するということが、自分との周りのことに気づいて欲しいということが一つありました。それでいろいろなことをやったのですが、その中で例えば海というのはスポーツとか観光とかといういわゆるレジャーとも関係するし、ある意味では衣食住の食にものすごく関係してくる。そして今や我々も生き物ですから食物を摂らなければいけないのですが、自分たちが食べているものがどこからくるのかということを、想像さえできなくなっているという状況があります。つまり、魚というのは頭があって胴体があって尻尾があるのですが、実際に自分の目で見るということが本当に少ない。切り身で必ず売られているし、そういう意味では血を流す生き物であるという感覚さえないのかもしれないし、少なくなっているかもしれない。そこで、地引網という活動をやったわけですね。そこで僕らが何をねらったかというと、やっぱり海の中から始まって、調理して食べるというところを一つの流れの中で子どもたちに体験してほしいと思ったのです。今の先生のご質問に私が答えを出すとすれば、なぜ子どもが変わるかというと、それは本物を見るからです。そこでビビットな経験をするからであると思います。例えば、こういうような実際に取れた鯛を子どもが触る（OHP の説明）。そして、こういうようにおばさんたちが、タナゴを料理しているのをみる。こういうように、本物に触ったり実際のプロセスを自分で見たりということ、そのことが子どもたちにとって何からかの刺激があるということではないでしょうか。先程アンケートを実施したということを言いましたが、3 月ともう一度 12 月に送りました。21 名参加していたのですけれども、返ってきたのは 6 名です。その中に、1 名だけ保護者の方が書かれていたものがあり、それが何かというと、ようするにそれまで魚が嫌いだったけれど、魚料理というものに興味を持ち出し食べるようになった。そういう変化をたどった。だから、楽しいというのはゲームで楽しいというのもあるのでしょうが、それは子どもたちを引っぱってくるえさみたいに感じます。むしろそういうものを通して入ってきたときに、本物の魚がぴちぴち跳ねているのを触ったり、料理したりしているのをみるという、生々しい経験というのが子どもに何らかの刺激を与えるのではないかというふうに私は思います。ですから、先程の中山先生のお話でも、私は非常に感銘深く拝聴したんですけれど、学生たちにこういう背景があるんだということも、だんだんと少しずつでもいいから提示していきたいと思って、今日発表したふれあいアクティビティーのメンバーには昨年の 8 月に研修で資料を提供して、この論文も別に渡して、君たちがやっていることはこういう一つの環境教育からの面からだったらこういう意義があるということを私なりに提示して、そしてそういうことも含めて、理解してもらいたいし、興味も持ってもらいたいということもやっています。お答えになったかどうか分かりませんけれども、私はそういう考えです。

吉越：私たちの施設の野外活動というか、施設の考え方としては非日常的をつくりだしているというその一点です。ですから、今の恵まれた社会の中から少し隔離している、離してあげている。そうすると、そこには必ず教育性もなければ、必ずできないとい

う状況が生まれてくるし、そこではやはり人間関係も培っていかなければならないという形です。ですから、非日常の中味を取り出している、それだけの考え方です。

濁川：上越教育大学の一年生で、体験学習というのをやっているのですが、その授業ではいろいろなことをやるのですが、僕は自然を体験して、自分が生きてきた生物というわくで、いかに自分がちっぽけな人間であるのかを、自然に接したときに今まで経験していなかった自分というものが、一つ乗り越えたという達成感というもので、そこにものすごく人間としての自信がでてくるというふうに感じます。私の授業で最後のときに、この国立妙高少年自然の家で、体験をずっとやってきた最後に野営をする。ここは学生たちが、なたとのこぎりと荒縄だけ渡して、そしてこの森でみんな自分の家をつくって寝るというのをやるわけですね。隣とは 10m 以上離して、外で 1 日中汗だくになってつくっている。それまでには、ロープワークを学習したり、植物を学習したりしていますが、4 時過ぎにできるともう疲労困憊していますが、それで一晩一人で野宿する。当然ここは熊が出没するので、恐怖心もあるのですが、それを乗り越えて本当に学生たちは、自分は強くなったと言うんですね。今までの自分の世界が、自然を対象にして生物として、乗り越えられたひとつの大きさというものが、そういう達成感というものが、一気に感じられるわけですね。それがどのような子かというと、虫も触れない、藪にも入れなかった学生が、最後のレポートの中に、私はこの学習を通して、ここまでたくましくなったというのを面々を書いてありました。ああ、自然はそういうものなのではないかな、子どもたちの経験がちっぽけであればあるほど、生物としての自然を対象にして、自分を経験を乗り越えて、経験を拡大する。そこに人間という生物としての自信ないしは、原点なのかもしれません。それを感じ取っている。それは自然体験だけではだめなんです。先程言ったように、人と関わり社会に行って、そのネットワークを広げていく、それが一つの人間としての自信になっていくと思います。私は自然体験を通して、大学生ですけれど、それを感じています。

赤羽：ありがとうございました。それでは、もう一つ今回のテーマに触れるところを触れておきたいのですが、今までは体験というものの意味合いをいろいろな重要性を触れていただいたのですが、今までフレンドシップ事業でやってきましたこの事業の内容、これは、先程の中山先生の言葉を借りますと、サークル的な活動で、その重要なところは、学生自身の主体性が育つこと、あるいは持てること、目的意識が持てることですね。これらは、非常に重要な面でありますが、一方、その対極には我々本来の本務であります大学の授業があります。それとの関わりをどうしていけばよいのかについて、少しご意見をいただけたらと思います。どう大学の授業の中に組み込んでいけばいいのか、逆に、組み込んだばっかりに今までのいいところが失われているというところがあると僕は思います。うちの大学にもそういう面がありますので。そのへんをぜひご意見をいただければと思います。今後のために。

中山：それでは、オリエンテーションという資料の二枚目をご覧ください。体験的な学習というものを教員養成課程にどう位置付けるのかという話題であります。熊本大学では、学部長が実践センターでやりなさいということで、センターの授業科目として当初から開講しています。授業科目は、今は新免許法では教科また教職の専門に関する科目に参入できる自由選択 2 科目 2 単位、開講年次は 2 年～4 年でなぜ 1 年を外して

あるかというと教養との関わりで外してあるわけです。当初は、どっちかしかいけない所がないので、どちらかにしなさいという教務からの要請で、どちらかになりました。それで、熊大では教育実習が2年次から始まる、つまり2年生の後期からずっと累積型でカリキュラムが組まれているわけですが、それとはまた分離した形での総合演習に関わる科目に位置付けられているのが一つです。今までは、選択科目として後期の授業だけで最初の3年間は、土日の教官が指定した日に集まりなさいという形で実施しておりました。なので、いわゆる普段の講義が5、6回で、残りは土日の集中講義で実施という形をとりましたが、その問題点として、一番に挙がったのが同じ子どもと継続的に関われないということでした。もっと関わりたいという学生が出てきまして、3年間、大学院を含めて5年間、リピートした学生がいたという事実です。そういった学生をどう受け止めるのか。ただ単なる後期の半年だけの授業に、オブザーバー参加でずっと5年間続けているという位置付けで本当にいいのだろうか。そういった自主的に活動するものをベースにして、その一部を授業に振り返るという読み替えの仕方はできないだろうかということで、過去2年間は、留意点のところに書きましたが、授業がいわゆる教育学部のフレンドシップから発展したサークル的な活動にジョンとする、それが演習にするという形式で、苦心、参加しました。ただし、子どもと関わる活動は活動日で最低2回、企画から反省までの一連の流れを最低1回、それから体験から学んだことをレポートに書いて、フレンドシップシンポジウムに参加して、他の人の意見を聞くことなど、最低限の条件を加えて、サークル相乗り方の演習としてやりました。演習というからには教官が関わらなければならないということで、報告会のなかでの報告書の提出とそれに対するコメントという形で、私も参加しております。それで、うちの大学での演習という形式ではないのですが、相乗り方というのはあくまで一例です。

赤羽：これは1年間に何人くらいの方が参加・受講しているのでしょうか。

中山：実質、昨年は2年生・3年生が多くて、33名が受講して単位が出ております。今年は11名の2年生が受講して単位が出ております。Make Friendsという活動のサークルのメンバーは約52～53名だと思います。

田巻：そういう臨床経験・体験をどう学問の授業に取り組んでいくかというと、脳裏を横切ったのは、“Evidence-based Medicine”、根拠に基づいた医学というものがある。要するに、一人の患者がいたときにその患者の痛みをあなたはどう解釈・理解しますか。それではどう治療しますかということで、ここにこういう子どもがいたときに、あなたはその子どもをどう理解して、どのような対応、教育を考えますかということで、やっぱりそれに習った、根拠に基づいた教育というものを大学の学問の授業の中に取り組んでこないと、今おっしゃった臨床経験が臨床の知になってこないと思う。だから、医療や法律では判例とか、工学部では建物のデザインだとか、こういう場合についてこういう問題のときに、あなたはどうするかという判断を学生に求めている。それについて、根拠に基づいてきちっとした判断をしなさいといっている。だから、教育学部でも今まで単なる伝統に受け流されてきて、経験で職人芸であることを、過去の事例などをふまえて、一つの判断に基づいて子どもの評価をし、その対応を考えるという授業を開設して盛り込んでこない限りは、いつまでたってもいけないのでは

ないかなという気はする。先生のおっしゃることはよく分かるんですけれども、そういうことに取り組まなければいけないのではないかという気がします。

赤羽：そうですね。一番の先はそうだと思うのですが、それができるようになるには、その段階の学生をどう育てるのかということだと思います。先程中山先生が、子どもの理解の学び、関わりの知恵というような言葉で言われましたが、それが分かるようになって、今田巻先生が言われましたような、本当に臨床的な一人ひとりの子どもの…。

田巻：思い切ってそういうことをやることによって、要するに気づかせるということがあると思うのですが。

赤羽：それもあるかもしれませんね。

増井：ちょっと横道に反れますけれども、田巻先生がおっしゃった問題提起が分かるようで、具体的には分からないのですが、中山先生が最後に体験活動で、いくつかのレベル、段階があるとおっしゃっていますし、それから近森さんも体験や経験のよって学生がどういう意識、あるいは子ども理解の関わり方、組織の関わり方というのを図式化していく。そういうのがあって、体験学習というのが効いてくるわけです。それは、理論ではなくて、体験そのものなのだと、経験主義なのだという意見であるというなら、それはもちろん成り立つ。そこをどう判断して、本読め、本読めというようなものになるのかは、疑問があります。

一言で言いますと、本読めということは、本を読んで何が解決するのかという話になります。どういう本を読めば、例えば、今いくつか例を出されましたけれど、かなり具体的には吉越先生も出されましたけれど、どういう本を読めば、大学として先生のおっしゃるような勉強や研究をしたことになるのか、もう少し具体的に問題提起しないと話が進まないので、お願いします。

田巻：本を読めと言ったのは単なる比喩でございまして、例えば具体的にどういう本を読めということではなくて、いま言われていて、資料を見てみたら、福島大学の学生が書いていることなのです。やっぱり大学というのは、講義がベースになっている。そこのところをきちっとふまえた上で、体験学習などとの関連を考えていかなければならないということであって、本を読めといったのは、単なる比喩的に言ったので、論理の飛躍があるかもしれません。しかし、やっぱり、ある意味でいえば、大学で教員を養成していることの意味というのは、あくまで大学でやっているわけですから、もしその経験や体験で済むようなら、非常に悪い極端な例でいえば、教習所でやってもいいのではないかという気もするものですから、よういう点で申し上げた訳です。

中山：自分なりに一生懸命考えたことをもう一度、ぶつけたいと思います。果してこれが教習所ということなのですが、子ども理解・人間行動の理解を追究する研究分野は、一つは心理学だと思います。心理学の知の体系は、人間行動の観察から帰納してきた結果だと思います。本に書かれていることは、そこで普遍的に認められた知識が書いてあると思います。つまり、結果として知の体系の理論は、やはり、このプロセスを経てでき上がったもの。そういう意味では、結果としての知を教えるだけでなくて、その知へ至るまでのプロセスを学生自身が体験するという価値は、一つここにあると思います。もう一つは、立場を変えまして、その心理学の知、学問体系としての知がここにあって、それが、学生一人ひとりの個人の経験ベースの実感をともなった主感

知と結びついたときに、初めて理論が実践と有機的につながるのではないか。そういう経験ベースの個人レベルでの意味付けが、理論を実際に近づけるのではないか。この二つの意味で、このトライアングルは、ただ単なる経験を主張しているだけではないのではないかなという気はいたしました。いかがでしょうか。

田巻：先程の回答の中にあったのですが、本当はリファレンスサービスというのが、主幹になくてはならないわけ。それをいい始めると別のこととなりますので、やめます。

赤羽：近森先生、いかがですか。先程の大学のカリキュラムとの関係で、どういうような活かしかたというか、工夫など。

近森：それについて、僕は非常に悩ましい問題だと思います。だから、先程の講評のところでも申し上げましたけれども、それはずっと問題としてあるものだと思います。それで、どうしても両方やらないとというか、だから意識のない学生で、ひょっとしたら必修に取り入れたらうまくいくかもしれない。意識が出てきて。そういう希望もあります。もう一つは、理科は前はですね、学生実験とひっかけて、フレンドシップ事業をやっていました。そこで、フレンドシップ事業で例えば小学生対象にして、こういうことを教える。それに関係する学生実験をやって、さらに学生たちが開発して、教材と指導案的なものをもっていって、子どもたちと一緒に実験をして教えるということをやっていたんですね。ところが実はご存知のように、非常に時間数が足りない。やっぱり教えたいことはたくさんある。そういうジレンマの中になってしまって、現在は自治教育 6 という専門、それぞれの教科の専門がやる自治教育があるのですが、そこで、小学校とタイアップしてやるという形になっています。それで、もう一つは、制度的なバックアップの問題がありまして、これは今のテーマとはずれるかもしれませんが、例えばこの前学生が牟岐というところに行くときに、子どもたちを列車に乗せて連れて行きたいということを言ったんですね。それで、なるべく参加者とか学生たちには、金銭的な負担はかけたくないし、これは私の総合学習開発というところにいる、一つに総合学習に関する実践経験のようなものがありますので、「私の研究費を使え」と。それで、事務に問い合わせると、「列車の運賃は公費では出せません」という言葉が返ってくるわけです。その中で、例えば子どもの社会性が薄れてきたから、そういうことをやりたい。実際学生がそういう形で言ってくる。例えば、それは学校教員になった場合には、当然列車の中で引率するという場面は出てくるわけです。そういうことで、やりたいと思ったわけですが、そこは全然できないわけですから、結局は借り上げのバスで行くということになるわけです。もう一つ付け加えるなら、博物館とか美術館とか、そういう入場料も公費で出せないわけですね。そういうような、大学のカリキュラムの中に取り入れていくときに、そういった時間性の問題、内容的な問題、もう一つは会計法上の問題。そういうものもクリアしていかなければならない。それからもちろん、講評のときにも言いましたように、そこへ入ってくる学生の意識の問題。だから、そういうものも課題として現在も残っているように思います。ちょっとずれたかもしれません。私はそのように感じています。

増井：あまり長く話せないのですが、大きくは二つあると思います。内容が何かというと、一つはいま話題になっているように、いわゆる大学の授業科目として課す。必修か選択かは別として。そのくらいは、大学の教育課程全体の中で、やはり、議論してみる

必要があるのではないか。一方で議論していく視点がもう一つあるのですが、これは、濁川先生がされていることですけれども、どういう教員を養成するのかという観点があると思います。他の学部での体験学習ではありません。二点目は、それとは別に、例えば上教大の学生が発言をしてそれに類したものもあって、さすがだなと感心しましてずいぶんメモをしましたが、例えば、集団としてではなく固有の名前の個として子どもが解できるのかということが、いわゆる教育学部学生の4年間のライフテールの発達といいますか、教師として発展していく、教師のものの見方、あるいは教育学部の学生が他者とどういう形で意識しながら、あるいは子どもをどういう形で認識を深めていくのか。そういうものを田巻さんもおっしゃいたいのだと思うのですけれども、それを一つの科学として、そういう形で我々は、それぞれの専門分野の人がやっているわけです。私は社会学の観点から、教師と生徒のこういうのを授業でやろうとしていますけれども、それは例えば社会学の中で、そういう説明をする理論がまだない。私はどちらかというと学生の側に立っていうこともあるわけですけれども、そういうことは具体的な実践の場面の中で、引用している具体的な姿を見ないと、大学における理論の真価、あるいは理論の再構築はありえないわけです。それぞれ専門の分野の先生方が、自然あるいは社会、あるいは人間関係の中で、子どもを媒介にして教師自身が、学生自身が変わっていくという、ここに子どもの変わり方もあるわけですけれども、そうしたちょっとした変化の中に直面して、それぞれの専門分野の人たちが、それをどのように自分の専門の中に専門の言葉で理論化していくのかということが大切なのではないかと。そういう課題をシンポジウムが提起しているのではないかと思います。

藤沢：学生たちの話の中に、確かに子どもとのふれあいという重要な子どもを理解するという、教師としてベースにならなくてはいけないのですけれども、もう一つフレンドシップ事業を通して学生の変化とかを聞きますと、教師はある意味では子どもが好きだということがありまして、確かにそうだと思います。逆に子どもが好きだということは、ある意味で大人が嫌いだということにはならないのか。つまり、今の我々の時代と違って、家族以外の他者と触れる方向がないまま、どっちかというと長く生きる若者が教師に就こうと。先程司会者の話の中にもあったけれど、いわゆるこれからの教師の基礎的な学問的な能力というのもベースにあると思うのですけれども、いわゆる子どもに対して教室の王様という形で君臨するような、教師になってはいけないと思います。そういう学問の面で、子どもに慕われているというのはいいですけれども、やはり地域や様々な世代を超えた人々と付き合うことが、やっぱり基礎的能力として、違った意味で重要ではないかと思います。ですからいろいろなものを持ってなくてはならないのではなくて、いろいろな交流の中で、先生方が言われたその中で、感じ、気づいて、それを自分で発見する。そして、違う教育の話で、いままで自分の傍らにいた年寄りが話を聞くことによって、違った存在としてお年寄りが見えてくる。ということは同時に、自分を新しく発見して、自分の意識を変えて、周りとの関わりの関係が変わってくるわけです。そういう営みの中にこそ、人間としての成長がある。そのことが、やはり一番求められているものである。それを学問として捉えていくと、非常に難しい。しかし、現実問題としてそれを、身につけていかないと教師として教

壇に立ったときに、まず必要なものとしてあるだとう。そういう人間的な人間力、社会力と言ってもいいかもしれないけれど、それをどう構築するのかということが、一つは大学全体、教員養成学部の総体として、学生の自主的なクラブ活動とか同好会とかを含めたものです。そういうものの意味あるものです。それを我々が、どういうふうに組織的に、教科も含めて、強さは別として、保障することができるのか。それともう一つは、先程から出ている、いわゆる我々がカリキュラムとして編成するものとの関わりがどうなのかということを、すごく私は感じています。土井先生が始められた頃は、かなり批判的なことがありました。果してこれが大学でやらなくてはいけないことなのか、いまの先生方や我々の中にも、いまさらこんなことをやらなくてははらないのか、という想いにしかならないわけですよね。ある意味では。しかし、実際の現実をみれば、これがなければ先生というか、地域に行って立てないではないかということがあるわけです。それは文部省も認めて、予算化して、フレンドシップ事業として、今日これだけの人が来ているわけです。そういうわけで、話を聞きながら、これをこれからどういうふうに、みなさんの話の中にあるように、我々の中にしめていくのかということが重要なことであると思っていまして、信州大学は今年の4月から教育学部に入学と同時に、附属学校に入学させる。附属学校に配置いたしまして、学校教育臨床基礎という形で子ども理解、学校・先生理解を誰も教えてくれないことをそこで何か気づいてほしいし、発見してその中から4年間の自分の学びに結びつくものを見つけ、気づいていって、本当にもっと勉強しなければならないとか、学ばなければならないなどにつながることを期待しています。今までは、一緒になっていた教育参加を、附属については学校での部分を学校教育臨床基礎にスライドしましたので、教育参加としましては地域のいろいろな社会教育施設の中でやるということにしました。また、そこへ行ってみると、子どもがいなくて、中高年のお年寄りがお集まりのところに学生が参加して、戸惑うんですね。けれども、帰ってきて様々な多様な方々と触れ合うことで、かえってプラスになる経験をするということになります。人間関係というものやコミュニケーション能力というものが養われていくというすごくいい帰属体験をしてくる。それで終わってはいけないと思うのですけれども、そこから何か技術とかが身につくこともあり、それを発展させていくことを期待しております。一年期では学校教育臨床基礎と教育参加、二年の学校教育臨床演習、三、四年での基礎教育実習、応用教育実習という系統になっています。今の段階では、一つひとつでありまして、これから関連性をどういうふうに系統付けて、学部として臨床の知という形で系統付けて、この段階ではこういう知というように繰り出せるような体系を学問的な裏づけを持ってつくりだすという作業をしていると私は思っています。

赤羽：はい。ありがとうございました。ただいま、増井先生と藤沢先生から、今回の問題点や今後に関わることを指摘していただきまして、まとめてきな発言をしていただきましたので、時間にもなりましたので、この辺で終わりにしたいと思うのですが、まだ十分しゃべり足りないという方もおられると思いますが、それはまた別の機会、次回以降にということでよろしいですか。今日はこの場でディスカッション、第二部を閉じさせていただきます。どうもいろいろとありがとうございました。

閉会挨拶

信州大学教育学部　田巻　義孝

増井先生と藤沢学部長がまとめてくださったので、何も申し上げることはないなと思いつつも、つい先日、教員養成大学学問とはいったい何か、何のためにあるのかということが話題になりました。やはりそれはきちっとした、親から信頼され、子どもからも信頼される教員を養成することであろうと。その成果は50年後、30年後にならないと分からないという話になりましたが、今日話題になったことはまさにそのことでありまして、本当にどういう教師、何をもってどういう教師をつくればいいのかいうようなところの話であろうかと思います。

それで、いろいろなことがありましたが、その根底にはやっぱり、大学の教師というのは、自分が授業で教えたから、あるいは演習でしごいたからいう思いで、いい教師を育てているという意識がありますが、実際のところは地域、このような国立妙高少年自然の家とか、あるいは、自然の持っている力など、そのようないろいろなものの助けを借りて、学生はいい教師に育っていく。なかんずく一番大事なのは、やっぱり俺は教師になりたいという学生の意欲、主体性なのではないか。俺は子どもから好かれる教師になりたいという想いもあるかもせいれませんが、それを一番どう引き出していけばいいのかというところのことを議論した、今日一日であったかなと思います。この問題は、きりがつかないし、一回や二回の話でけりかつく話ではないと思いますので、今後とも継続されるかと思いますが、本当に私自身、田巻個人といたしましては、この会議に無理やり参加させられたのですが、非常に楽しくておもしろくて、言いたいことも言わしてもらいました。すかっとした、心に落ちる一日でございました。

メディア教育開発センターの方にSCSのことについてお世話になりましたし、国立妙高少年自然の家にもお世話になりました。そのお礼とともに、明日から、日曜日のお昼まで約100名の子どもとともに展開されるフレンドシップ事業がうまくいくことを願って、終わりの挨拶といたします。どうもありがとうございました。

第３回全国フレンドシップ活動

MYOKO ゆきんこフェスティバル
Let's Enjoy Snow World！

2003. 3. 6～10

国立妙高少年自然の家

第1回 全国フレンドシップ活動概要

～じびきあみ in あなん 2001～

＜日程＞　2001年3月18日

＜場所＞　阿南市北の脇海水浴場（徳島県阿南市中林町）

＜参加大学学生者数＞　熊本大学（6名）、上越教育大学（8名）、信州大学（8名）、鳴門教育大学（3名）、横浜国立大学（7名）

＜プログラム＞

時間	活動内容
10：00	地引網オープニングセレモニー
10：30	地引網開始（終了後、魚協の方のお話を聞く。）
12：00	昼食
13：30	レクリェーション
15：00	清掃
15：30	閉会式

＜参加児童＞　川内北小学校、千松小学校の児童

＜実行委員長＞　大門 政憲（鳴門教育大学 3年）

第2回 全国フレンドシップ活動概要

国立阿蘇青年の家主催事業～阿蘇の四季をさがそう～

『親子DEクロスカントリー』

＜日程＞　2002年3月9～10日

＜場所＞　国立阿蘇青年の家（熊本県）

＜参加大学学生者数＞　熊本大学（5名）、上越教育大学（5名）、信州大学（7名）、鳴門教育大学（4名）、福島大学（2名）、横浜国立大学（5名）

＜プログラム＞

時間		活動内容
3/9	13：30	開会行事
	14：00	[講義]　阿蘇の春を見つけよう
	15：30	☆[体験活動]　親子DEクロスカントリー
	19：30	☆レクリェーション・プラ板つくり
3/10	9：00	[体験活動]　野焼きに挑戦 ～火消し棒つくりと野焼き体験～
	11：30	閉会行事

＊親子DEクロスカントリー・・・家族単位で青年の家周辺の草花や自然に関した課題やヒントをもとにクロスカントリーを行う。その際、6つのチェックポイントがあり、ここでのイベントは各大学のフレンドシップ活動の特色を活かしたものが行われる。

＊☆印が全国フレンドシップ活動プログラムにあたる。

＜実行委員長＞　藤田 勝一（熊本大学 4年）

第３回全国フレンドシップ活動

ＭＹＯＫＯ ゆきんこフェスティバル ～学生募集要項～

主催：全国フレンドシップ活動実行委員会

フレンドシップ事業とは･･･

学生が子ども達と触れ合い、子ども理解を深め、教員としての実践的指導力の基礎を習得することを目的として、全国の教員養成系大学・学部で行われている子ども達とのふれあい活動です。

全国フレンドシップ活動とは･･･

フレンドシップ事業に携わっている学生が集まり、子ども達とのふれあい活動や、意見交換・交流を行う活動です。この活動は、全国から意見を出し合って企画し、実践することを通して各大学の活動の特色を学び合い、学生の意識を高める場となっています。

１．目　的

◇子どもたちとの宿泊を伴う自然体験活動を通して、話し方、接し方、物事への対応の仕方など、関わり方を考え、子ども理解を深める。

◆各大学でフレンドシップ活動を行っている学生が、妙高に集い、人と人とのふれあいを通して、互いに刺激し高め合うことで経験幅や視野を広げる。

２．日　程

平成１５年３月６日（木）～１０日（月）４泊５日

３．会　場

国立妙高少年自然の家

〒949-2235　新潟県中頸城郡妙高村大字関山 6323-2

Tel 0255-82-4321（上越市・長野市から約１時間）

４．参加児童

上越市・長野市の小学校３年生～６年生　約 70 名

＊平成１５年１月下旬～２月上旬に募集予定

５．参加大学及び人数（定員）

７大学　３４名

熊本大学、鳴門教育大学、広島大学、福島大学、横浜国立大学 各４名

上越教育大学、信州大学 各７名

６．参加費

30,000円程度（食費、シーツ代、保険代等）

＊現段階での概算ですので変更の場合があります。

＊別途交通費がかかります。

７．今後の連絡方法

参加学生の方には、企画・準備段階から関わっていただき、共に活動を作っていきたいと思います。そのため、以下の方法で話し合いや連絡を行っていきたいと考えています。

◇フレンドシップ事業に携わっている学生同士の情報発信・交流を目的にホームページを開設しました。決まったことは随時こちらに載せていきたいと思います。また、掲示板やチャットなどを利用して、意見交換していきましょう。

◇Friendship☆Network◇

http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Lounge/8600/

◆携帯電話のメーリングリストを作成し、連絡事項を伝えようと思います。

◇各大学での連絡をまとめるための実行委員を一人、各大学で決めていただきたいと思います。実行委員を通じて、交通手段や費用についての事務的な連絡をしていきます。

８．活動概要

３月６日（木）午後　学生集合、学生交流

７日（金）　全国フレンドシップ学生シンポジウム（信大・上教大第２回コロキュウム）、準備

８日（土）

～９日（日）　子どもたちとの雪上体験活動、反省会

１０日（月）午前　学生解散

＊活動を含めた詳しい日程・プログラムは参加学生の話し合いで決めていきます。

９．申し込み方法

各大学で定員数の参加学生を決定し、その中から実行委員を選出し、参加者全員についての必要事項を記入の上、実行委員がまとめてメールで申し込みを行なってください。

◇記入事項　氏名、年齢、性別、大学、学年、専攻、住所、電話番号（自宅・携帯）、メールアドレス（パソコン・携帯）

◆締　切　**１１月２２日（金）**

◇お申し込み・お問い合わせ先◇

friendship03@moon.co.jp

第　回全国フレンドシップ活動実行委員会事務局

（担当：上越教育大学　年　伴峰昌、信州大学　４年 岡部桂子）

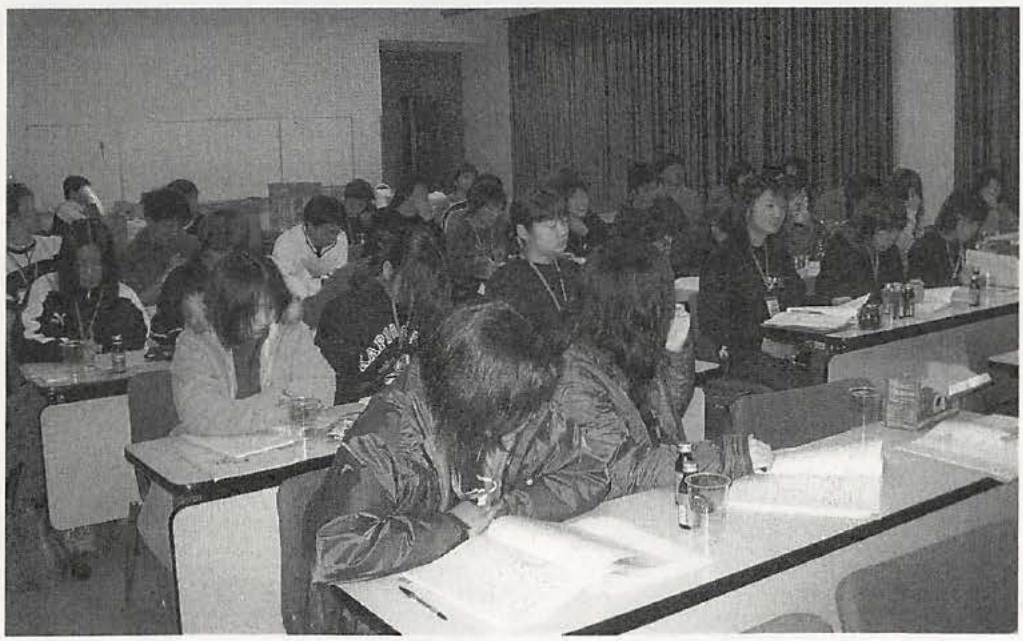
第３回全国フレンドシップ活動

☆★『MYOKO ゆきんこフェスティバル』日程★☆

＜１日目＞　３月６日（木）	
時間	活動内容
9：45	信州大学・上越教育大学集合
10：00	事前準備①
12：00	昼食
13：00	事前準備②
15：00	レセプション準備　参加２大学迎え　PD 打ち合わせ（活動Ⅰ～Ⅳ）
15：50	参加３大学迎え
16：45	**全体開会式**
17：00	**【学生交流】　さあ、みんなで全フレッツゴー！ゴー！！**
18：00	**【レセプション】** **信州産新潟コシピカリ企画**　こりゃうマイ！！感謝をコメていただくベエ♪もちつきしヨ～ネ
21：00	入浴等　発表者準備
22：30	ミーティング
23：00	就寝

＜２日目＞　３月７日（金）	
時間	活動内容
6：30	起床
7：00	朝のつどい
7：30	朝食
8：30	シンポジウム準備・リハーサル
10：00	**フレンドシップ事業全国学生シンポジウムⅠ**
12：30	昼食
13：30	**フレンドシップ事業全国学生シンポジウムⅡ**
14：30	活動準備① リハーサル（Ⅰ～Ⅳ各 30 分，朝 15 分）＊活動Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ＊朝のつどい
17：30	夕食･入浴等
19：30	活動準備②　＊宿泊体験活動全般について
21：00	ミーティング　バス係下山
22：00	就寝

＜3日目＞　3月8日（土）	
時間	活動内容
6：30	起床
7：00	朝のつどい
7：30	朝食
8：30	最終ミーティング・準備
	＜上越教育大学＞　児童受付 8：30～9：00　バス出発 9：00 ＜信 州 大 学＞　児童受付 8：00～8：30　バス出発 8：30
10：00	国立妙高少年自然の家バス到着、参加児童出迎え
10：30	**開会式**
10：45	**【活動Ⅰ】　きてみてわらって ゆきんこタイム**
11：30	**オリエンテーション**
12：15	昼食
13：30	**【活動Ⅱ】　ゆきりんぴっく　in 妙高**
17：30	夕食
19：00	**【活動Ⅲ】　ゆきんこまつりだ！どんどこどん！！**
21：00	就寝準備　健康チェック
21：30	就寝・消灯
22：00	ミーティング
23：00	学生就寝　　夜間巡回（23：00～2：00　1時間毎）



＜4日目＞　3月9日（日）	
時間	活動内容
6：00	起床
6：30	**朝のつどい**　全体写真撮影
7：00	朝食　健康チェック
8：00	退室作業（荷物整理・ベッド整理・清掃）
9：00	**【活動Ⅳ】　妙高雪上探険隊！**
11：30	昼食　健康チェック
12：30	**閉会式　バイバイゆきんこ♪**
13：00	バス乗車
13：15	国立妙高少年自然の家バス出発 ＜上越教育大学＞到着・解散 14：15　＜信州大学＞到着・解散 14：45
13：20	片付け・休憩等
16：30	**反省会**
19：00	入浴等
20：00	**【セレモニー】　フレンドシップ☆セレモニー**
22：00	**懇親会**
23：00	就寝

＜5日目＞　3月10日（月）	
時間	活動内容
6：30	起床
7：00	朝食
8：00	退室作業（荷物整理・ベッド整理・清掃）
8：30	**【想い出作り】　伝えよう！３７＋αに！！**
9：45	**全体閉会式**
10：00	国立妙高少年自然の家出発　（参加５大学）
11：00	片付け等、事務室あいさつ
12：00	国立妙高少年自然の家出発　（信州大・上越教育大）

☆★第３回全国フレンドシップ活動　準備会の流れ★☆

月日	活　動	仕　事　内　容
3/11	第２回全国フレンドシップ活動	第３回全国フレンドシップ活動開催決定
5/1 ～ 5/31	第３回に向けての事前アンケート	第２回全フレ学生アンケート実施・集計
7/28	信州・上越打ち合わせ会①	第３回全国フレンドシップ活動の目的、 参加児童･学生規模、活動プログラムの検討
9/5	情報発信・交流 WEB の完成	HP（Friendship☆Network）立ち上げ
10/21 ～ 11/31	参加学生募集期間	参加大学へ学生募集要項･ポスターの発送
9/27 9/28 10/1 11/8 11/28 12/12	チャット会議①～⑥	参加児童・学生数、 参加学生の役割分担とボランティア学生、 全体日程・活動日程・ねらいの検討
12/7 ～ 12/16	SCS 会議に向けた準備期間	上越教育大学･信州大学の係分担決定、 SCS 会議資料作成
12/17	SCS 会議	参加学生顔合わせ、概要説明、意見交換
12/23	信州・上越打ち合わせ会②	各係の企画一次案の検討等
12/24 ～ 1/16	各係･児童募集の準備期間	PD の決定、プログラム細案検討、トレーナー発注、児童パンフ作成、児童募集依頼文作成、主催校地域の児童へパンフ配布等
1/26 ～ 2/20	児童募集期間	応募児童名簿の打ち込み
2/18 ～ 2/19	信州・上越打ち合わせ会③	参加児童しおりと連絡カード完成、 下見、プログラムリハーサルと検討 各係の打ち合わせ、日程確認等
2/21 ～ 2/25	参加児童へしおり等送付	参加児童決定、参加可否通知の作成、 応募児童への参加可否通知の印刷と発送、 参加決定児童へしおり等送付、
2/26 ～ 3/5	最終準備期間	係細案･各資料完全版作成、 スタッフファイル作成・印刷、 シンポジウムの発表者の決定･原稿提出等
3/1	保護者説明会（信州）	児童しおり配付、当日の説明
3/6 ～ 3/10	第３回全国フレンドシップ活動	「第３回全国学生シンポジウム」 「MYOKO ゆきんこフェスティバル」
3/11 ～	事後活動	参加学生への修了証･写真･手紙の発送、 参加学生アンケート集計、報告書作成

統括 活動報告

統括

1．概要

活動全般の統括，学生募集，渉外，打ち合わせ会準備・進行，学生しおりの作成，反省会準備・進行 等

2．活動を振り返って

第2回全フレ参加者へのアンケートから始まった統括としての活動は、力量の乏しさを痛感するとともに、緻密な準備の必要性を切に実感し、多くの学生や先生方などに支えられて、5日間という長くも短い本番を終えることができた。今回の全フレでは信州大学および上越教育大学の2大学が連携して担当大学として中心的に事前準備を進めたことや、児童との宿泊体験活動においては担当大学以外の学生も企画段階から参加し、準備作業を進めていったことで、大学の枠を越えた学生間のコミュニケーションがキーポイントとなったと感じている。

事前の打ち合わせや本番中の進行など、活動全般にあたって、各大学の活動経験の違いから意見が異なる部分がとても多かった。自分の大学では当たり前のことが、他大学の活動では全く異なる視点から異なった方法で行なわれている。そのような場面に出会い、戸惑いを感じることが多かったものの、時間をかけてとことん話し合うことで、お互いが納得してから進めることができた。また、お互いのよい部分や得意な部分を引き出して、今回の活動を組み立てることができたと感じている。このように価値観をぶつけ合って活動を作っていくことができたことは、今回の成果であると思う。ただし、時間をかけることは大切だが、今回のように会うことが限られた短い時間の中では、効率よく話し合う内容を選別し、優先順位をつけて話し合いをしていかなければならなかった。その選別をうまくすることができず、打ち合わせ会やチャット会議、SCS会議で、一つ一つの話に過度に時間がかかってしまい、効率が悪かった。また、本番では準備不足も重なり、常に時間に追われて動かなければならなくなったことや、学生の睡眠時間が充分に確保できなかったことも、統括としての反省点である。

統括として活動全体を考えながら事前準備を進める上で、各係の準備状況を把握するためには連絡体制の確立は不可欠であり、密に連絡を取り合い、コミュニケーションを深めるよう努力してきたが、振り返ってみると必ずしもそれが当てはまらない部分も見られ、そのことが係の準備状況の把握を曖昧にし、担当学生任せとなった部分が見られたことも反省すべき点である。反省点ばかりで至らない統括であったが、ここから学ぶことは多く、このような経験をさせていただけたことをとても嬉しく思っている。

最後になるが、今回、全国7大学、学生38名、子ども90名の宿泊体験活動という大規模な活動を行うことができたのは、大学の先生方や国立妙高少年自然の家の職員の方々が学生の意思を尊重して、可能な限り協力してくださったお陰であると感じている。この場を借りて感謝申し上げる。

岡部 桂子（信州大学 4年）、伴 峰昌（上越教育大学 4年）

救護 活動報告

☆ゆきんこ救助隊☆

1．活動概要

☆もしものことが起こらないように、安全対策をしっかりする。

☆参加者全員（スタッフを含め）の体調をしっかりみる。

☆先生や統括への連絡をしっかりする。

☆事前準備と当日の動き

・緊急連絡体制を作成。近隣の病院に、当日の緊急時の確認をした。当日は大きな怪我もなく病院に行くことはなかったが、常に先生や統括への連絡をするように心掛けた。二日目、一人の女の子の熱が高く、自宅まで濁川先生に送ってもらうことになった。

・健康連絡カードを作成･郵送し、事前に参加者の健康チェックをした。しかし、班のサポーターがチェックしたのは前日で時間も少なかったため、サポーター同士が打ち合わせをしっかりできなかった。

・健康調査カードを作成。活動中は、8 日の 21：00、9 日の 7：00、11：30 の全 3 回、班のサポーターに健康調査を行ってもらい、指定の場所に提出してもらった。また、就寝時間等に見回りをした。

・応急救護マニュアルを作成。

・救護物品の用意（救急箱の他に、各班 1 つずつ救急セットを用意した）。確認不足が多く、体温計が使えない状態だったりはさみを忘れたりしてしまった。

・スタッフは必ず清潔なバンダナを持参してもらうようにした。

2．活動を振り返って

統括や救護の先生方との打ち合わせ不足で、共通理解していない部分がたくさんあった。そのため､当日になって自分たちの役割が何だったのかということを改めて考えさせられ、準備不足を痛感した。同時に、具体的に「こうなったらどうするのか？」ということを事前に考えておく必要があったことに気づいた。

当日は、ゲストルームの１室を保健室とし、具合が悪い子はその部屋で休ませた。

救護に関する知識や経験がないため、判断するのが難しい時があった。例えば、活動に参加できるかできないかを判断するとき、この子は背中を押してあげれば大丈夫という子と、この子は休ませたほうがよさそうだというような判断は簡単にはできなかった。

救護物品も確認不足のものが多く、自分たちの救護に対する意識の低さと甘えに気づいた。また、学校における救護のあり方と自分たちの救護への意識の違いや、救護に対する基礎的な知識など、たくさんのことを学ぶことができたように思う。お世話になった太田敏子先生、藤沢明美先生、本当にありがとうございました。

渡邉 悠子（上越教育大学 4 年）、山本 真望（信州大学 3 年）

シンポジウム 活動報告

信州大学・上越教育大学 共催 第2回コロキュウム
第3回　フレンドシップ事業 全国学生シンポジウム

1．ねらい

・各大学の活動についての理解を深め、良いところを吸収し、これからの活動に生かしていく。
・共通意識をもってキャンプに臨めるように、お互いを知り、意識を高め合う。
・自分自身に課題を見つけてキャンプに臨む。

2．活動概要

今回のシンポジウムは『「臨床の知」―「学習臨床」は教員養成をどこまで変えたか　～フレンドシップ事業からわたしたちは何を学んだか～』をテーマに、学生同士で意見を交換した。内容は主に、各大学の発表と分科会で、初めて会う学生同士がお互いを理解し、共通意識をもってキャンプに臨めるように展開した。

3．タイムテーブル

Ⅰ．10：00～12：30　　13：30～14：30（学生シンポジウム）
Ⅱ．14：40～16：30（教官の部）

時　間	活　動　内　容	備　考
10：00	**開会行事** ・はじめの言葉 ・あいさつ 　信州大学教育学部長　藤沢先生 　上越教育大学副学長　増井先生 ・SCSの紹介	（司会・進行：渡邉、山本真） ☆服装は、全員全フレトレーナー、下は自由（ジャージ不可）。
10：10	**各大学の発表**（各大学　8分） ①上越教育大学　飯森 玲子 ②福島大学　坂本 琢馬 ③横浜国立大学　和地 めぐみ ④広島大学　大町 真理 ⑤鳴門教育大学　野村 優衣 ⑥熊本大学　堀口 沙織 ⑦信州大学　西澤 俊輔	
11：10	**分科会**（学習室1･2･3に分かれる） ①「連携」②「協調」 ③「学び」④「成長」 ⑤「接し方（ほめる・叱る）」 ⑥「コミュニケーション」	☆教官は各グループに分かれて学生の話を聞いてもらう。 ☆各班に模造紙とマジックを用意し、討論の内容をまとめてもらう。

12：30	昼食	
13：30	**分科会の発表** （各グループ　発表５分、質疑応答２分）	☆1 班から順に模造紙を使って発表する。
14：25	**課題シートの記入**	☆課題記入用の付箋を用意し、それぞれキャンプに向けての課題を記入する。
14：35	**講評** 鳴門教育大学　近森先生	

４．活動を振り返って

今回のシンポジウムにおける反省点は、以下の四点である。

一点目は、準備段階についてであるが、当日までの計画を綿密に立てずに準備を進めたため、直前になって慌てることが多かった。各大学への発表依頼や、原稿・資料の〆切も予定より遅れてしまい、資料集の編集が本番直前になってしまった。分科会のファシリテータ・書記の依頼も本番直前で、依頼された人たちが戸惑う部分が多かった。

二点目は、シンポジウムボランティアについてである。ボランティアの依頼をメールで済ませてしまったため、ボランティアが全体の流れや仕事内容を把握できずに戸惑うことが多かった。メールだけの連絡ではなく、打ち合わせの場を設けるべきだった。また、シンポジウムの参加者でボランティアの存在を知らない人が多かったので、SCS の紹介と同時に、ボランティアの紹介を入れたほうが良かった。

三点目は、統括との連絡不足である。自分たちの仕事の多さに混乱してしまい、統括との連絡が不足し、直前になって意見がすれ違うことが多かった。具体的には、シンポジウム資料集の形式、課題シートの内容について等、自分たちの考えで編集してしまったため、直前になって統括に変更を要求され、余裕をもって準備を進めることができなかった。

四点目は、前日の長旅や緊張で学生の多くが疲れており、シンポジウム中に意見や質問が出ることが少なかったことである。お互いの活動について知り、そこから意見を交わし学びとってほしいという願いもあったので、残念な結果となった。

今後の展望としては、当たり前ではあるが、準備を早めに進めることである。そのためには、当日までの流れを明確にして準備を進める必要がある。また、担当者同士が密に連絡を取り合うことも重要である。それと同時に統括や担当教官との連絡も、こまめにしていく必要がある。

渡邉 悠子（上越教育大学 4 年）、山本 真望（信州大学 3 年）

開会式・活動Ⅰ 活動報告

きて みて わらって ゆきんこタイム

1．ねらい

・楽しくレクリエーションをすることで、緊張をほぐし、お互いを知る。
・旗作りを通して、仲間意識とこれからの活動への意識を高める。

2．活動概要

児童の到着に時間の差ができるので、その間レクリエーションを行い、全員がそろったところで、1つの全体レクリエーションを行う。いったん班ごとに整列し、開会式を行う。開会式で、参加大学ごとの紹介と上越、長野の紹介を行う。開会式終了後、班ごとに班旗作りを行う。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
9：30	レクリエーション（上越組から）	落ちた落ちた（妙高バージョン）
9：45	（長野組到着、レクに参加）	ミックスジュース
10：00	班探しゲーム ＊ミックスジュースを使用して色による自分の班探しを行う。 1班から順に班ごとに整列	班を名札を使って12色に色分けしておき、何もかかれていない班旗を利用して、色が見つかりやすいようにする。 班旗は班付きスタッフに渡す。
10：15	開会式 ＊開会の言葉（岡部 桂子） ＊先生のお話（大悟法先生） ＊自然の家職員の方のお話 ＊大学紹介 ＊上越、長野の紹介 ＊あいさつ	各大学の紹介は1大学3～5分程度。あいさつは、子どもと学生が向き合うようにし、しっかりとあいさつをする。
10：45	活動Ⅰ 班レクリエーション	顔と名前が覚えられるようなレクリエーションを班付きスタッフが中心となって進める。 マジックと新聞紙を各班に渡しておく。
10：55	班旗作り ＊班旗には、名前、チーム名、自分の目標などを入れる。	
11：20	後片付け	
11：30	オリエンテーションへ	

4．活動を振り返って

活動を振り返って思うことは、準備不足なところが多くなってしまったなということです。特に、開会式では、時間の配分から進め方、会場の雰囲気といった重要な部分が思っていたようにはならず、「しまったー」と終わった瞬間に感じました。

全体レクリエーションは、とても盛り上がりを見せていて、子どもたちもその場になじんでいっているのが良くわかって、楽しいものになっていたと思いますが、興奮しすぎて飛び出してきてしまう子どももいて、どう対処していいものか、困ってしまいました。結局、そのもりあがった雰囲気を持ったまま開会式に移動してしまい、メリハリをつけてしっかり行なうはずのものが、中途半端な空気のままでおわってしまいました。

旗作りに関していえば、これは作ってよかったと思います。私たちが予想していた以上に班旗は活躍してくれました。班旗は作られた目的を果たせたのではないかと思います。

準備不足であわただしかったものの、予定より早く子どもたちが到着してくれたことで時間にゆとりができたことや、班付きスタッフのがんばり、活動Ｉを助けてくれたPDの皆さん・・・・、いろんな人の力で、子どもたちのコミュニケーションのスタートとなる活動にすることができたのではないかと感じています。

☆★☆みなさん、ありがとうございました☆★☆

山本 佳代（横浜国立大学 4年）、吉川 千晶（上越教育大学 2年）

活動Ⅱ 活動報告

ゆきりんぴっく in 妙高

1．ねらい

班の仲間とのコミュニケーションを大切にし、協力し合って雪上活動を楽しむ。

2．活動概要

1日目のメイン活動としての雪上活動で、ウォーミングアップを目的に2人組で簡単なレクをした後、班対抗雪上綱引きを行った。綱引きが終了した段階で数名体調不良を訴えていたことや子ども達に少々疲れが見えていたこと、また天候が次第に悪化し回復が見込めないことから、雪上活動を断念し、プレイホールへ移動。移動後、子ども達の状況から班サポーターとの協議の上、活動Ⅱの終了を決定し、プレイホールにて表彰式を行い、以後自由時間とした。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
13：30	開会宣言 ゆきんこ選手宣誓	
13：40	1）アイスブレイク（ウォームアップ） ＊ウィンドウミル ＊エルボータッチ ＊2人組おにごっこ	児童数が奇数の場合は、サポーターが入って調整する。
13：50	2）運動会活動 ＊綱引き ＊大リレー	 綱引き用綱 ポール
14：45	3）グループの話し合いをする活動 ＊ヒューマンダーツ ＊妙高タワー	 ポール，チューブ
15：50	表彰式 閉会宣言	
16：00	次の動きの指示	

4．活動を振り返って

・ミーティングのときの説明不足が原因で学生に開会時の並び方や場所などを確実に把握してもらうことができず、子どもたちを並ばせるのに時間がかかってしまい、始めるのが大幅に遅れてしまった。また、予想外に子どもたちが雪で遊び始め、無理に

やめさせることができなかったのも開会時間が遅れた原因だろう。外では時計がないので時間通りに進めるのは難しいが、天候が悪くいつまで外にいられるかが分からないときに子どもたちに多くの活動を経験してもらえるためには、もう少し早く並ぶよう促しても良かったのではないだろうか。実際に活動を始めても思った以上に時間がかかり、結局綱引きしか経験してもらえなかったのが残念だ。

- アイスブレイクは子どもたちが楽しんでいるように見えた。2人組みを作るときに男女の組になってしまうところは時間がかかったようだが、全体としてはうまくいったと思う。適度に運動もできて、子どもたちに楽しんでもらえるものだったのではないだろうか。
- 綱引きが始まってから天候が悪くなり、さらに予想以上に時間がかかってしまい、待っている子どもたちには寒く退屈な時間ができてしまった。しかし、待っている時間の使い方は班によって様々で、作戦をしっかり立てているところもあれば、雪で遊んでいる班もあった。ブロック内のトーナメント戦をしているときは、他の班を見ることもないように見えた子どもたちも、決勝トーナメントでは自分のブロックの代表を一生懸命応援している姿が印象的だった。また、自分の班が負けてしまい、泣き出す子もいた。私は勝って喜ぶのはもちろん、負けて泣くほど一生懸命になってくれたことがとてもうれしかった。綱引きだけで終わってしまったのは残念だが、時間をかけたことで子どもたちに楽しんでもらえたのなら、結果としては良かったと思う。
- 悪天候と体調を崩した子どもが多かったため、綱引き以降の予定をすべて取り止め班ごとの自由な時間にした。他の種目を経験してもらえなかったのは非常に残念だが、後から聞いた話によると、班ごとに過ごしたことで子どもたち同士、また子どもと学生のコミュニケーションを図ることができたそうだ。これは活動Ⅱのねらいであり、良い結果に終わったのではないだろうか。

伴 峰昌（上越教育大学 4年）、渋谷 梓（熊本大学 1年）

活動Ⅲ 活動報告

ゆきんこ祭りだ　どんどこどん！！

1．ねらい

- 全体レクリエーションでのかかわりを通して、友達の輪を広げよう。
- 雪と火とのコントラストという新たな雪の一面を知り、感動を共感する。

2．活動概要

＜晴天時＞

野外での雪上キャンプファイヤーを行う。全体レクリエーションと、PD の進行による一日の振り返りを行い、雪灯篭の道を帰る。

＜荒天時＞

プレーホールで、キャンドルサービスを行う。全体レクリエーションと、参加者によるキャンドル文字作り、PD の進行による振り返り。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
19：00	プレールームに集合 班旗を持ち、入場行進	「Wa になって踊ろう♪」
19：25	全体レクリエーション ・「猛獣狩り」 ・「ゆぽい」 ・「ジャンプジャンプ」	
20：00	キャンドル文字作り ・くじ引き ・文字作り ・点火 振り返り	・「ゆきんこフェスティバル」の 1 文字と、「あたり」2 つのくじを作り、班ごとに作る文字をくじ引きで決める。 ・プラスチックコップとキャンドルを各班に配付する。
20：30	解散	班ごとに移動 部屋ごとの振り返り

4．活動を振り返って

活動Ⅲでは、晴天時にはキャンプファイヤーを、荒天時には室内キャンドルサービスを企画した。企画段階では、活動フィールドがどういったものなのかを想像することが困難だったため中身は漠然としたままであった。しかし、日常の活動でのレクリエーションの様子を伝え合う、下見の状況を伝えるなど、連絡を取り合い、何とか全フレ開催前までにある程度企画内容を固めることができた。

活動実施に際して、荒天だったため屋内でのキャンドルサービスを行った。荒天で活動Ⅱを早く切り上げたため、班での協力活動が減ってしまったことを考慮し、急遽キャンドルサービスのプログラムを変更した。計画ではキャンドルサービスは、燭台を使って行う予定であったが、班ごとに十数個のキャンドルを用いて決められた文字を作り、「ゆきんこフェスティバル」という火文字を作ることにした。この場面での子どもの姿は、自らの経験にないことをするためどうしたらよいのだろうと考え、班の子どもと、「こうしたらいい」、「いやこっちのほうがいい」と模索しながら作り上げていた。すべての班が出来上がったところでキャンドルに火をつけ、照明を落とすとそれまで騒がしかった子どもがキャンド

ルに注目し、今までにないほどに静まり返った。その結果、振り返りもうまくいき非常によい活動にすることができた。

特に注目したい場面は、照明が消えてキャンドルの文字が浮かび上がった後の子どもの変化である。レクリエーションをしているときは、こちらがいくら注意しても静かになることはなかったので、自然と静かになったあの瞬間はとても印象に残った。なぜ、子どもは自然と静かになったかということを考えてみると、理由は「キャンドル」にあるように思える。「キャンドル」にあって「レクリエーション」の場面にはなかったものは、子どもとのプログラムの「共有」だと思う。「キャンドル」では、文字作成に子どもの意見が濃く反映されていて、子どもとしても自分が作り、火をつけたのだという思いがあり、興味も増したためだと考えられる。活動プログラムに限らず、子どもと何かを「共有」することは、子どもを理解していくうえで非常に大切なことだと思う。

このようにキャンドルサービスの内容を変更して活動できたのは、班つきサポーターのお陰である。夜までに班内の信頼関係ができており、どこの班もみんなで相談して文字を作ることができた。また、危険な火の扱いについてもサポーターの適切な支援により、火を倒してしまう、やけどをするなどの事故をおこすことなく活動をすることができた。予告なしの変更に子どもたちと共に柔軟に対応してくれたサポーターのみんなと、一緒に考え、たくさんのアドバイスをくれ、活動を支えてくれた本部学生をとても尊敬し、感謝している。今回の PD の経験から、活動は担当者が作るのではなく、全員の力があわさって作り上げられるものだということを改めて感じた。全フレで受けたたくさんの刺激と、学びをそれぞれ自分のものにしていきたい。

岡部 桂子（信州大学 4年）、面高 有作（熊本大学 1年）

朝のつどい 活動報告

朝のつどい

1．ねらい

朝にみんなで大きな声を出したり、音楽に合わせて動き回ったりすることで、体と目を覚まし、1 日の始まりを意識させるようにする。班で気持ちを合わせることで、団結を強め、達成感を感じられるようにする。

2．活動概要

① プレイホールに集合。

② 6 班に分かれ、それぞれ一文字ずつ受け持つ（例：「みん」「な」「お」「は」「よ」「う」）。

③ 合図に合わせ（笛など）、班ごとに一文字ずつ大声で叫ぶ。スムーズに一つの言葉に聞こえるまでくりかえす。

④ 班ごとに決めポーズを考え、言葉とともに決めポーズをみんなでする。

⑤ 音楽を流し、その間は自由に動き回る。途中で合図を出し、班がバラバラになった状態で一文字ずつ叫ぶ。うまく声を合わせられるようにがんばる。

3．活動を振り返って

司会をやって、改めて難しいものだと思った。間の取り方、テンポ、声の調子や話し方が悪かったため盛り上がりに欠けたのだと思う。朝だから仕方ないが、思ったより子どもの元気がなく、さらに学生も元気がなかったので全くレクが成り立たなかった。学生が動いたグループは他のグループよりも子どもが動いていたのを見て、学生が子どもに与える影響の大きさを感じた。また、使った音楽は子どもに人気があるものにしたが、それでも子どもは元気にならなかった。子どもの心を掴むことの難しさを実感した。事前に学生だけでレクをしたので、本番ももちろん盛り上がってくれるものだと思っていた。班付きの学生の協力なしでは企画は成功できない。しかし前日のミーティングで、朝のつどいの内容や子どもたちを盛り上げてくれるように、学生に伝えなかったのも悪かったのではないだろうか。私は朝のつどいを担当して、自分の力の無さを実感すると共にたくさんの事を学んだ。また、連絡事項の徹底も改めて重要であると分かった。ここでの経験は失敗ばかりだったが学ぶことも多かった。それをこれからの活動に生かしていきたい。（渋谷）

今回の朝のつどいは、事前の学生の意識の盛り上げの不徹底が全体の盛り上がりに響いたと思う。子どもとの宿泊で、健康面や次の日の活動のことなどで学生の意識がいっぱいになっていたのだろう。朝のつどいは早朝たった 30 分の活動で、その日 1 日気持ち良く過ごせるような、いわば潤滑油のような活動である。だからこそ、子どもの周りの学生側に活動を楽しもう、気持ちの良い朝を過ごそうという余裕ある気持ちがなければ、子どもにも活動の楽しさが伝わりにくいのではないかと思う。今回はその余裕がなかったのではないか。子どもとの活動を盛り上げる、楽しくするためには学生の側にも楽しもうという姿勢が必要だと改めて感じた活動だった。（山本）

山本 恭兵（横浜国立大学 3 年）　渋谷 梓（熊本大学 1 年）

活動Ⅳ 活動報告

妙高雪上探検隊！

1．ねらい

- 班で協力し、子どもたちの班の結束を強める。
- 「雪」を楽しむ。
- 冬の自然を知る。

2．活動概要

ウォークラリー形式で、かんじきを履き、地図を見ながらチェックポイントを周る。チェックポイントはそり、ブラインドウォーク、ネイチャークイズの 3 つ。コースを周る速さを競うのではなく、班の仲間と一緒に雪の上を歩きまわることに主眼を置いたため、得点や時間制限は特に設けない。

<ゲーム内容>

① **そりダーツ**　物品：そり、スコップ、ポール

二人乗りのそりに乗り、下のクリアゾーンめざして滑る。クリアゾーンに止まれれば、ネイチャークイズのヒントがもらえる。学生は上に一人、下に二人配置し、安全に気を配る。サポーターも危険な箇所についてもらう（下とコース横）。

② **スノーブラインドウォーク（2ケ所設置）**　物品：アイマスク、ポール（スタートとゴールの印）

二人組になり、アイマスクをして歩く人と、手をつないで誘導する人に分かれる。スタートとゴールだけ設定し、そこまでは二人で手をつないで自由に歩いてもらう。手をつなぐときは手袋をはずす。途中木や自然のものを触れるようにする。歩く二人は会話をしてもよい。ゴールした後は歩く人と誘導する人を交代してもう一度歩く。学生は危険な場所に立って子どもが行かないようにする。得点、タイムなどは特になし。

③ **ネイチャークイズ**　物品：画用紙、すずらんテープ

妙高の自然に関するクイズを各ポイントに設置する。なるべく実物を観察できるように設置ポイントを選ぶ。子どもはクイズシートに答えをかき、ゴールで答え合わせをする。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
9：00	集合する（つどいの広場）。	記録、救護以外のPDは各チェックポイントに移動。 班ごとに点呼。
9：05	活動説明。	
9：10	かんじきを履く。全員履き終えた班から出発。	地図・ペットボトル・ゼッケン配布。 途中で休憩をとることを伝える。
9：30	探検開始！（全班出発完了）	いってらっしゃ～い
11：00	探検から帰還！（全員プレイホールに集合）	時間に間に合うようにサポーターがうながす。間に合わない場合は途中で中断して帰ってきてもらう。 建物の入り口で班ごとにかんじき・ゼッケン回収。
11：10	まとめ。	クイズシートへ記入した後、クイズの答え合わせ、子どもへのインタヴューなど。
11：30	活動終了。	

4．活動を振り返って

活動場所がハイクコースのため、当日にならないとコースの状態やクイズの設置ポイントがわからないという不安があった。加えて前日からの吹雪で、外で活動できるのかもわからない状態であった。どうにか天候はもったものの、雪が降っているためにウサギの足跡を見つけるネイチャークイズは断念した。また、雪の上を歩くのに両手はふさがっていない方が良いということで、クイズシートは帰ってきてから渡すことにし、自由に歩き回ってもらうことにした。

出発前の一番の不安はかんじきを履くことであった。しかし、事前に学生がかんじきを実際に履いて歩いてみたために、学生が子どもにうまく教えてあげられていたようだった。用意していたかんじきが足りなくなって出発が遅れてしまった班がいたのは気の毒だった。

スタートしてからの様子で印象的だったのは、子ども達は我々が用意したチェックポイントだけではなく、雪そのものを楽しんでいるということだった。班によって好きなところを歩き、雪に埋もれて遊ぶ班もあれば、急な坂を滑り降りる班もある。どうしても PD としてはチェックポイントをいかに面白くするかに目を奪われがちで、コースのまわりの自然には関心が及んでなかった。ところが子ども達は自分達で面白そうなところを見つけ出し、遊び場所にしてしまう。わざわざ設定されているところ以外にも遊び場所を自らで創り出してしまう子どもの視点に改めて感心させられた。そして子どもは班で雪の上を歩き回ること自体に楽しさを見出していた。かんじきで雪を歩くことの楽しさはコースを設定する上でついつい忘れがちになってしまう。子どもたちの様子はそれを思い出させてくれた。もちろんそりやブラインドウォークも楽しんでいたようだった。ただ、班が集中しすぎてしまい、順番待ちしている班もあった。ただでさえ短い時間をもっと有効に使えなかったかと反省している。

ゴールは吹雪いていたためにプレイホールに変更した。外だと体が冷えてしまうので、室内に変更して正解だったと思う。ここでは配布したシートに「今日の大発見」を書いてもらったが、どの子も一生懸命に記入してくれている様子を見て、感激した。ただ楽しく歩いたのではなく、いろいろなことを感じながら歩いていてくれたのがよくわかった。その後のまとめでも積極的に発見したことを発表してくれる子がいて、この活動が楽しかったことが感じられて、非常にうれしかった。

この活動は子どもがコースを周る速さなどが予想しづらく、全体のプランを立てるのに非常に苦労した。当日の朝まで準備に追われたが、何とか天気がもち、雪を存分に楽しめる環境にあったため、多少の準備不足は十分にカバーされたと思う。ただ、あくまでそれは結果論で、もっと事前に入念な打ち合わせ、準備が必要であると感じた。今回の活動がうまくいったのも子どもと自然、そして班の子どもをきちんと楽しく誘導してくれた班サポーター、支えてくださった先生方のおかげであると思う。感謝したい。

山本 恭兵（横浜国立大学 3年）、岩堀 耕平（信州大学 2年）

閉会式 活動報告

バイバイゆきんこ♪

1．ねらい

二日間のキャンプをふり返り、すべての出会いに感謝の気持ちを持ってお別れする。

2．活動概要

キャンプ終了後、子どもたちに修了証を配布するため、事前に各大学に修了証の作成依頼をした。また、子どもたちが帰宅後、班のサポーターが修了証にメッセージを記入した。子どもたちひとりひとりに、修了証と写真、ゆきんこ通信をキャンプ終了後に郵送した。

閉会式での子どもたちの感想発表者は、事前に班で一人決めておいてもらい、1 班から順に発表してもらった。最後は全員で手をつなぎ、「ありがとうございました」というあいさつをした。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
12：45	閉会式 ・はじめの言葉（司会） ・子どもたちの感想（各班代表） ・国少の方のお話 ・先生のお話（谷塚先生） ・実行委員長のお話（伴） ・終わりの言葉（全員であいさつ）	（司会･進行：渡邉、山本真） ☆全員で大きな円をつくり、話をする人が中心に立つようにする。 ☆マイクを 2 本用意。
13：15	諸連絡（伴）	

4．活動を振り返って

閉会式についての反省は、以下の二点である。

一点目は、全般を通しての準備不足である。閉会式の大まかな流れは事前に決めていたのだが、細かい部分は前日に決定した。そのため、当日の進行について各班のスタッフへの連絡が行き届かず、各班の子どもたちの感想発表について連絡板に掲示したが、スタッフが気付かなかったり、スタッフ・子どもたちが閉会式の形態にすぐに並べない、などの支障が出た。

二点目は、閉会式が予定時刻に始められず、時間がおしたことである。そのため、バスが定刻に出発できないというトラブルが生じた。

今後の展望としては、振り返り方について検討してみても良いのではないかと感じた。今回は、代表者に自由に思ったことを話させて終わってしまったが、班ごとに集まって子どもたち全員が感想を述べ合うという方法も考えられる。

渡邉 悠子（上越教育大学 4 年）、山本 真望（信州大学 3 年）

受付・バス 活動報告

バス・受付

1．ねらい

これからの活動に向けてちょこっと緊張をほぐす。

2．活動概要

参加児童の受付と集金。受付場所殻会場～（妙高少年自然の家）間のバスでの送迎。

3．タイムテーブル

＜展　開＞★行き（3/8）

信州時間	上越時間	活動内容	ボランティアの動き	備考
7:00	7:15	学生集合	集合 準備	＊ 受付準備
8:00	8:30	児童受付開始	交通誘導（２人） 受付（２人） ＜上越＞　＜信州＞ 太田渉　小黒あかり 水田礼子　花村尚美 生方玲奈 坂田久美	＊受付 ＜受付場所＞ 講堂前（上越）　図書館前（信州） ＊ 集金（計算） ＊ 交通誘導 ＊ 児童の誘導（バスへ） ＊ 連絡（出欠 etc） 遅刻してくる児童に関しての連絡 欠席の連絡への対応 ＊ トイレの確認 上越→子どもの募集人数は 51 人 指導教官（濁川先生） 信州→子どもの募集人数は 39 人 指導教官（藤沢学部長）
8:30	9:00	児童出発	遅れてきた児童への対応	＊ 人数確認・点呼 ＊ 出発の連絡
		バスレクレーション	解散	＊ 酔った児童への対処
10:00		児童到着		＊ 忘れ物の点検 ＊ 児童の誘導 ＊ お金を預ける（濁川先生）

★帰り（3/9）

信州時間	上越時間	活動内容	ボランティアの動き	備考
13:00		バス乗車		
13:15		児童出発		＊ 人数確認･点呼 ＊ トイレ等の確認 ＊ 忘れ物の確認
		バス移動	上越 14:00　信州 14:30 集合	＊ 酔った児童への対応 ＊ レクはやらない
14:45	14:15	児童到着	交通誘導 ＜上越＞　＜信州＞ 太田渉　花村尚美 生方玲奈　増田美和	＊ 児童の誘導 ＊ 忘れ物の確認
		解散 思い出作りの写真をとりに行く		＊ 急に迎えの時間に来られなくなった子どもへの対応 ＊ 送迎の欄に迎えが来るとかいてあったのに来ない場合、自宅に連絡をとる。
15:15	15:45	学生出発時間（最終）	子ども達が全員帰らなかった場合､迎えが来るまで見届ける。 解散	＊ 子ども達が全員帰ったのを見届ける。 ＊ この時間までに間に合わなければ、ボランティアに任せる。

4．活動を振り返って

今回において、バスの中での活動は、子どもたち同士が出会う場である。私たちは、子どもたちが参加するにあたって、持っているだろう「不安」を少しでもほぐし、できれば「期待」を増やしてやることはできないだろうか､とバスレクレーションの内容を考えた。さらに、バス酔いする児童に対しての配慮という面から、後ろを向く活動はせず、手を使った音遊びや歌遊びを中心に行った。

バスの中での子どもたちは、とてもにぎやかな雰囲気であり、席に座りたがらない子や早速お菓子を食べる子などがいた。私たちとしては、なかなか落ち着いてバスレクをすることが難しかった。そのような状態で、バスは目的地に当初の時間より早めに到着してしまい、十分なバスレクができたとはいえないが、バスを降りるときの子どもたちのわくわくした顔を見ると、私たちにとってのねらいは達成できたのではないか、と受け止めることができる。

問題点としては､「児童がバスの中で興奮気味であったこと」と､「受付がスムーズにできなかったこと」である。原因追

求としては、受付時の混乱からすぐにバスに乗せてしまったことがあげられる。バスに乗せる前に、子どもを一度落ち着かせる必要性があり、例えば一度外で集合し、朝の挨拶やバスの中での注意事項などを説明してもよかったのではないか、とも考える。しかし、当日は風が強くとても寒かったので、受付後すぐにバスに乗せたことは正解であったと感じている。

他には、上越の参加児童は 52 人と大変多く、受付時に混乱が生じ、ゴーグルなどの追加小物レンタルについての集金がしっかりしなかったことが問題であった。受付名簿を二つに分けてすばやい受付対応が必要であったと考えると同時に、受付ボランティアに対する説明を十分にすることを反省し、次回に活かしていきたいと思っている。

中村 浩之（上越教育大学 4 年）、森岡 恵（上越教育大学 3 年）
那須 良寛（信州大学 M2 年）、石関 千絵（信州大学 2 年）

学生交流 活動報告

さあ、みんなで全フレッツゴー！ゴー！！

1．ねらい

初めて会った仲間と一緒に遊ぶことを通して、大学・学生間を問わず、気さくに話せる関係を作る。

2．活動概要

レクリエーションを通して、これから始まる全国フレンドシップ活動や初めて会う仲間に対して緊張を和らげ、初めて会った全国の仲間たちの名前を覚えたり、一緒に遊んだりして、大学や学年に関係ない人間関係作りのきっかけの場である。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
17：00 ～17：05	活動開始宣言	＊全員がねらいを知り、目的を持って活動ができるようにする。
17：05 ～17：50	1　サーチ☆フレンド･･･仲間探し 2　ビビディ・バビディ・ブー･･･名前覚え 3　創作組体操　　･･･グループ活動 最後に学生全体で写真を撮る。	

4．活動を振り返って

企画段階においては、二人ともレクの経験が浅く、レクをプログラムする難しさや自分たちで新しいレクを生み出す困難という壁に突き当たった。二人の知恵を絞ってレクを完成したときの喜びはひとしおで、今でも忘れることができない。

当日は、最後に全体で一つのバルーンを作って一体感を味わいたいと考えていたが、仲

間探しが予想以上に時間がかかってしまい、時間がなくなってしまった。しかし、飛び入りで各大学の先生方も参加していただいたおかげで、教官と学生間の交流が生まれた。課題が与えられて身体で表現するゲームでは、各グループの協力と工夫が見られ、もう少し難問にしても面白かったかもしれない。周囲の助けと明るさのおかげで、楽しみながら仲間を知るきっかけ作りができた時間だったのではないだろうか。

藤岡 恵美（信州大学 3年）、飯森 玲子（上越教育大学 3年）

レセプション 活動報告

信州産新潟コシヒカリ企画
こりゃうマイ！！感謝をコメて　いただくベェ　もちつきしヨ～ネ

1．ねらい

初対面の学生の知り合うきっかけを作り、妙高にきたという実感を持ってもらう。

2．活動概要

レセプションはこれからの活動に向けて、学生間の交流に重点を置いた活動となった。信越の歓迎会要素と妙高に来たという実感をもってもらうために、信州産のもち米とりんごをベースに妙高の伝わる伝統的な料理を考え、そこで、スキー汁・餅つき・ゼリーという三つの料理を作ることになり、各班ごとに調理を進めていった。味付けなどを自由にしたことにより各班で話し合い、それぞれ違ったものになり、学生どおしの話すきっかけにもなることが出来た。後片付けも全員の協力があり、スムーズに終えることが出来た。多くの学生交流の場となった活動であった。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
15：00	下ごしらえ ・ 器、調理用具、材料を各班ごとに配る。 ・ 調味料を用意しておく。 ・ 予め水に浸しておいたもち米を蒸らしてこねておく。 ・ うるち米を炊いておく。	*学生が協力してすぐに調理できるように準備する。
18：15	班分け	

18：30	調理開始 ＜ゆきんこ好き好きスキー汁＞ ＜信州新潟産コシヒカリもち＞ ＜天然クーラーのデザート(フルーツ寒天）＞ ・2箇所でもちつきをし、1・4班から順番にもちつきをしていく。	*始めのあいさつ・料理についての説明をする。 *もちつきのときに、円滑にかつ怪我のないよう進められるようにきちんと説明する。 *作り終わった班から順番に食べていく。
19：45	夕食 ・各班ごとに学生2～3名と先生1名にインタビューをする	*ざっくばらんに *これからの意気込みやなんでもよいのではなしてもらう。 *自己紹介のような感じで。
20：30	片付け	*各班で協力して行う。
21：00	解散	

4．活動を振り返って

レセプションというのは、遠方からきてもらった学生たちを信越でもてなしながら、学生間の緊張を取り除いたり親睦を深めたりする活動だということだった。ただ食堂でご飯を食べながらおしゃべりに華を咲かせることも、ゆきんこフェスティバルに参加するような元気で明るい学生なら可能だろうが、やはりこちらからもっと働きかけたりもてなしたりしたいと思い、みんなで夕飯を調理して食べるという企画を考えた。作る料理はもちろん信越の郷土料理にし、まず信大ＹＯＵ遊広場の茂菅ふるさと農場で取れた米が新潟の特産物であるコシヒカリだったこともあり、茂菅ふるさと農場の米を使うことにした。さらに普通のうるち米の飯だけでなく、もち米を使ってもちつきをすれば他大学の学生にもっと喜んでもらえるし、学生同士の交流も盛んになると考え、全員でもちつきをしようということになった。また、上越の郷土料理であるスキー汁という豚汁の具のごぼうがたくさん入ったものと、信州の特産物であるりんごと寒天を使ったデザートも作ることになり、寒天は外の雪の中で固めることにした。りんごは茂菅ふるさと農場でお世話になっている林部さんという農家の方から無料でたくさんいただくことができたので、全て寒天にいれず切ったりんごもデザートで出すことにした。しかし、時間がないのでデザートだけは、下準備の段階でこちらで作って冷やしておくことにした。

もちつきも寒天も前もって練習していたが、当日下準備が思ったより時間がかかり、下準備の時間内に終えることができなかった。また、もち米を蒸かしてすぐつき始めなければならないため、レセプション開始時の1時間前（学生交流の最中）に火を入れなければならないことに当日気づいたり、寒天にジュースをまぜるのを忘れるなど、準備不足な点が見

られた。しかし始まってしまうと学生たちがみんな楽しんで協力してくれ、時間が押して始まり、時間内に終えることができるかという心配もふきとばして、スムーズに進めることができた。調理は班ごとに進めることにしたのだが、作り方などは班に任せたので、それぞれの班でいろいろ考えたり創意工夫してくれたようで、「うちの班が一番うまい！」という感想が飛び交うなど、学生同士の交流を深めることができたのではないかと思った。もちつきも怪我人がでることもなく、無事につくことができたし、とてもにぎやかに皆で声を出し合いながら楽しくつくことができた。そして片付けでも、用事がない人がすすんで手伝ってくれ、きていに調理室をお返しすることができた。

本番は結果的には大成功に終わったが、そのうらにはいろいろな背景がある。当日もちつきを室内でするということで、うすを落とさないように倉庫から出し床やうすなどを傷つけないようにもちつきをしなければならないなど、不安材料が多いもちつきは、企画を受け入れる側としては決して賛成できるものではなかったのだ。しかし信越の郷土料理をふるまい、もちつきを皆でしてお祭りをするという企画に魅力があったため、目をつぶって企画を通してもらえたのだ。当日臨機応変に動けたり、」レセプションを成功させたいという思いが創り上げた企画内容やそれに向けての準備取り組みという土台がしっかりあったからこそ成功したと思うのだ。企画だけでなく活動名や料理名を楽しくすることで、「楽しそうだな、早く食べたいな。」と皆に思わせることができれば、もうその時点で企画は大体成功と言ってよいだろう。大変だし危ないからやめようというのではなく、参加者側に立った企画をこれからも創っていきたいと思う。

那須 紋子（信州大学 3年）、中村 豪宏（上越教育大学 2年）

セレモニー 活動報告

フレンドシップ☆セレモニー

1．ねらい

食事をしながら打ち解けた雰囲気で、4日間の振り返りをする。そのことによって、お互いの考えや思いを伝え合う。

2．活動概要

反省会後の夕食に、食堂での立食会を計画した。事前の準備としては、

・メッセージカードの作成

《メッセージカード》事前に各大学から送ってもらっていた個人の顔写真をカードに貼り、メッセージを書いてもらう。それをセレモニー中にいろんな人と交換して読んでもらう。カードはセレモニー終了後回収し、全員分をCD-Rに保存し、後日配布する。

・スライドにかけるための写真の選考、プロジェクター準備

《スライド上映》デジカメで撮った活動中の写真をスライドで上映する。途中写真にたいするコメントや、会場にいる人にインタビューを入れる。

・食事内容の検討（費用：一人当たり2000円）と、食堂への会場設営依頼

・当日の司会進行

3．タイムテーブル

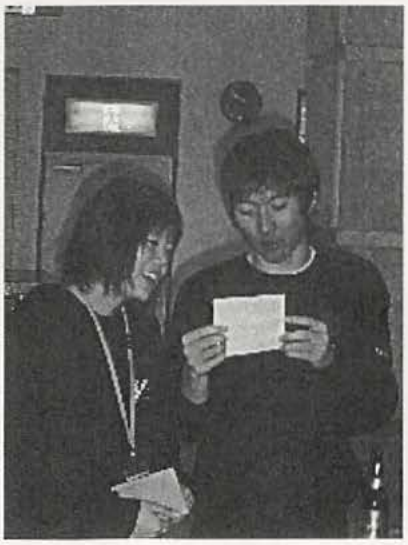
時　間	活　動　内　容	備　考
20：00	1．実行委員長のあいさつ（岡部）	
	2．乾杯	＊乾杯のあいさつ （ゆきんこ連続殺人事件犯人による）
	＊会食	『*Heartful Message*』の説明
20：20	3．スライド上映	＊写真に写っている人のインタビューも伺いながら上映
20：40	4．参加学生感想発表（各大学１名） ・上越教育大学　中野 時啓 ・福島大学　坂本 琢馬 ・信州大学　那須 紋子 ・横浜国立大　小嶋 美里 ・鳴門教育大学　笹井 玲加 ・広島大学　加登脇 大地 ・熊本大学　堀口 沙織	
	＊会食	
21：00	5．先生方のお話 （上教大・濁川先生、信州大・谷塚先生）	＊信州大・上教大から１名ずつ
	6．実行委員長のあいさつ（伴）	
21：30	片付け	

4．活動を振り返って

当日は、反省会後に時間調整を入れて、21：30からセレモニーを開始した。

計画の段階で心配だったのは、活動最終夜であることから学生の疲れが見られるかもしれないということだった。しかし、セレモニー開始からの雰囲気は予想以上によく、みんな楽しげに話したり、食事をしたりしていた。疲れている中、全員が協力的だった。

スライド上映では、活動の写真を流すと、会場から「お～」と声が上がり、時には笑う場面もあるなど、楽しみながらこの四日間を振り返ることが出来た。



活動のメインであったメッセージカードは、予想以上のものであった。「読んだら違う人のカードと交換する」と、ただ簡単なルールしか伝えていなかったのに、どんどんカードが交換されていったのに驚いた。あまりにも全員がカードに集中したため、料理が冷めてしまうよ～、という嬉しい悲鳴が上がったくらいである。

個人的にこの活動を担当しての感想を一言書きたい。今回の活動を通して、一つの企画を最初から作ることが大変だということを、改めて実感させられた。たくさんの失敗をし、パートナーにも迷惑をかけた。しかし、自分で考え、パートナーの心強い支えを受けて、本当にたくさんのことを学ぶことが出来た。今後、このような体験を是非自分の活動に生かしていこうと思う。

私たちはお互いが持ち合わせていない部分を補い合いながら企画・活動を進めていきました。例えば、司会の場面で一方がうまく話すことのできなければ、他方が持ち前の明るさで楽しく愉快なトークで手助けしたり、一方のミスを他方がサポートしたりする場面もありました。こんな風に両者の良いところ・特性を活かしながら活動を進めることができて、本当によかったと思います。互いのウィークポイントを認め合い、補い合い、そして、自分が持ち合わせていない一方の良い部分に憧れながら活動をともにすることができるって、いいなと感じました。

蓼沼 夏子（信州大学 3年）、南波 瑞穂（上越教育大学 1年）

想い出つくり 活動報告

伝えよう！３７＋αに！！

1．ねらい

・全体の活動を振り返り、自分の思いや想い出を伝える。

・みんなの思いや想い出をメッセージカードにより知り、永遠のものにする。

2．活動概要

メッセージカードに全国フレンドシップ活動で知り合った 37 人の仲間とお世話になった教官に、自分の思いを書いて他者に伝える。また、他者の思いを知ることで今後のフレンドシップ活動や生活の活力にする。

3．タイムテーブル

時　間	活　動　内　容	備　考
9：45 ～9：50	1．カードの書き方の説明	＊カードを机に配付しておく。
9：50 ～11：30	2．想い出書き込みタイム	＊90 秒毎に交代の合図をし、その合図によって次のカードに移動する。
11：30 ～11：35	3．カードの回収	

4．活動を振り返って

当初、1 時間程度しか与えられていなかったことや全員のメッセージがあったら嬉しいだろうなということで、A4 の色紙に一言メッセージを書いてもらおうと考えていた。しかし、5 日間も共に活動した仲間への思いは深く、伝えたいことが沢山あって書くスペースが足りないのではないかという懸念が起こった。そこで、ラミネートシートでの加工を諦め、急遽八つ切り画用紙に変更し、統括の配慮により予定より少し長い時間となった。早く書ける人とそうでない人の差がすぐに現れたが、みんなが臨機応変に移動してくれたので、特に大きな支障もなくメッセージが書けた。ただ、学生全体写真の関係で、全フレ後の作業にいくつか変更があったが、無事、春分の日の前に各大学の実行委員のもとへ発送することができた。

藤岡 恵美（信州大学 3 年）、飯森 玲子（上越教育大学 3 年）

反省会の様子

伴　：それでは、それなりにテーマを絞って話を進めていきたいと思うのですが、まず今日、本当は、子ども達の接し方ということで話そうと思ったのです。ところで、ちょっともう一度話を聞かせてほしいのが、僕らが今回子どもと直接関わっていなくて、みんなの前で話すわけですけれども、こちらが前の方でしゃべると、ちゃちを入れる子がいるではないですか。前で話した経験がある方は分かると思うのですが、そういう子に対して、つい１対１のトークをしてしまったりとか、でもしかとするのか、どうしたらいいのかなという時もあって、今回は最初そういうのがあったけれど、僕の中では途中からは無くなってくれたのかなと思っていたのですが、僕はとくに何もしたわけではないので、理由はよく分かりませんが、そういうことがありました。そこで、個人的経験がある人に、あなたならどうすると聞きたいわけですけど、時間もないので、子ども達との接し方について、今回班の中で起こった問題を、今話したいのですが、この後のセレモニーとか懇親会とかそういうとこで話してください。それをやってしまうと尽きないので。

今回、シンポジウムのときに分科会のほうで、連携・協調・学び・成長・接し方・コミュニケーションということで、その中の学びで、体験を子ども達の学びにどう結ぶつけるかということがありました。学びの分科会に入った人はそれなりに話したと思うのですが、今回の雪をメインにした活動が、持ってもらった子ども達の学びにどう結びついているのかな、また、ついていたのだろうという予測の部分もあるかと思うのですが、班の中での子ども達の様子を具体的に挙げていただきながらでもいいですので、意見がございましたらお願いします。

山本(佳)：先程の和地さんの話が一つの例だと思います。すごく男の子と女の子の仲が悪くって、女の子が男の子に反撃する手段が雪を投げるということだったんだけど、男の子がそれをやり返してというふうに、コミュニケーションを取り出すことが、雪って楽しいなどの体験を通して、子どもとの距離が縮まったという話にもありましたように、まったく自分が壁をつくってしまったら、コミュニケーションというものは生まれないと思う。でも、その橋渡しが雪だったのかなと思って、物と物、人と人との間に何かあるっていうことがとても大事なことだと思います。私は、和地さんの話を聞いて、すごいりっぱな子ども達の学びだったと思います。

那須(良)：今日の探険隊のときに、コースをすごい迷いながらうちの班はやっていたのですが、一つ盛りあがった瞬間があったんです。そこの駐車場のところの雨どいの鎖が全部凍っていたんですよ。それを見た瞬間に、男の子も女の子もぶんぶん振り回したりだとか、何だこれとかいって、みんなが氷の世界でできる独特の現象に、お互いが共感しあえるものがあったかなと思います。

伴　：驚きを共感ということですが、雪山が見れたときある意味共感ですね。きれいに雪が積もったやつをみると、「ああ、きれいだ」と思いますね。他に何かありますか。

中村(浩)：いつも雪のあるところで生活しているんだけど、雪の 2m 上を歩くなんていうのは、はっきりいって普段体験しないこと。かんじき履くのも初めての子が多かった

し、初めてだらけで、もう遊び道具が周りに山ほどあるという状況で、雪って自分のある程度思った形に変えられるから、遊び方も自由自在で、初めて会った人同士がいろんな形でコミュニケーションをとる手段があると思うんだけれど、それを実現しやすかったのではないかと思う。お互いのコミュニケーションの取り方を雪っていう物を使ってとなると、かなり幅広くなると思う。そういう意味では、初めて会った人同士が仲良くなる手段としては、ものすごく良い物なのかなというふうに感じました。

岡部：私も中村(浩)の班なんだけれど、私は全然関わったことがなくってただ私今日一人で、待っている間暇だったから、雪の上に寝ていたのね。そうしたら、お尻が埋まっちゃって、新雪が深すぎて立てなくなって、中村(浩)の班が来て、私の顔がわからない子達がたくさんいたのに、その子達がみんなで協力して、男の子は私に雪をかけえてくれて、女の子は引っぱり起こしてくれて、なんか雪がこんなに協力を呼ぶ機会になるとは思っていなくて、私も助けてもらえて嬉しかった。一人ひとりの媒体にもなったし、協力するきっかけにもなり、雪ってすごいなと思いました。

吉川：私も岡部さんと一緒であまり班に入ることはできなくて、お昼のときとかだけだったんですけれども、記録をしながらカメラを回しながら、いろんな子どもをみていて、またいろんな班の様子をみていて思ったことが、綱引きのときにとても吹雪いていたけれど、子ども達はそれぞれに雪で遊んでいるのをみたりとか、班で一緒になって体を動かして体を温めようとかやっているのをみていると、何となく直接雪に触れることで、寒さにどう立ち向かっていったらいいのかとかを、少しずつ学んでいっているのかなと思いました。印象が強かったのは、学生中心に一つの円になって、その場で一生懸命駆け足とかして、体を温めようとしている様子があって、それらを見ていると対応の仕方をそういうところから、ちょっとずつ学んでいっているのかなと思いました。うちの班のアンケートを最後に見せてもらったときに、歩いているとことが普段は手の届かない枝の真横だったりとかするのに、とても感動していて、上越の子どもだから雪は全然見慣れているけれど、ここまで本当に積もるものなんだなというものを感じ取って帰ってくれたのではないかと思いました。

伴　：雪がすごいなと思ったのは、2 回くらいはまったってあったでしょ。ちょうど、僕がブラインドウォークの担当のとき、はまった子どもがいて、はまったというより樹に引っかかってしまっていた。そして落ちてもがいたので前に足が出てしまって、そのまま上げようとするものだから、余計に樹に引っかかってしまう状態になっていた。だから、かなり掘ったら、下の方が空洞になっていて少し見えた。目隠していたものを取って、覗いたら下の方が見えて、「わー、すごい」みたいな感じだった。その後、樹ってどのくらいのところから生えているんだろう、自分っていまどの辺にいるのかなという話をして、樹のおかげで視界が変わっているのを目の当たりにしたのかなと思いました。雪で、驚きを共感しているという感じを受けました。

山本(恭)：あえて問いかけをしようと思うのですが、運動会のときに、子ども達がペガスス広場に集合して、何やり出したかというと、僕ビックリしたんですけれども、長野と上越の子ども達があれほど興奮して雪だるまをつくっている。雪とか見飽きているのではないのと思って、何でだろうとすごい疑問だったんですけれども、皆さんは、なぜだと思いますか。僕の中では一応考えがあるんですけれども。

本薗：やっぱりこんなに積もった雪を初めて見る子が多いという話で、そういう新しい世界を見たときって、子どもがすることはやはり、自分達の慣れているっていうことをしてから、入っていこうとするのではないかなとのが僕の考えで、そうすることによって、自分が持っている五感を使って学ぼうとするからこそ、雪だったり、雪だるまつくったり、雪合戦したりするのではないかなと思う。そういうときに驚かされるのが子ども達の発想力で、今日探険しているときに、うちの班の子で一人雪の層をみて、「ショートケーキみたいだね」って言っていて、ショートケーキも積み重なって出来る物だという考えが子どもの中にあるから、そのような発想が生まれてくるのではないかと思う。僕ら学生が見たら、地層と同じだねで終わる。大人は自分の分かるところから考えていく。その結果、子ども達はその時分からなくても次、学校なり本なりで勉強したときに分かるから、僕らより記憶力がいいのか、学ぶ力が伸びるのではないかなと思う。

濁川：彼の意見、僕も本当にそう感じます。でも、もう一つ押さえてほしいのは、子どもは自分の経験で雪だるまをやったのですが、サラサラ雪ならすぐ諦めてしまう。しかし昨日やったら、ベタベタ雪なんです。どんどん層がでかくなっていく。一瞬にして、あれが彼らの興味をぐんと引き立たせて、次々と雪だるまを作っていった。短時間でどんどん作り上げていったでしょ。あれは、子ども達はやはり学習していっているんですね。温度の低いサラサラ雪はいっくらやっても固まらない。自分の過去の経験を持ってきて、やってみたらすごくうまくいったんで、いっせいに広まっていったんだと私は思います。

吉川：私も富山で雪国出身だから思うのですが、生活をその場でしているってなると、今まで、自転車で通えていたり、歩いていても滑ったり転んだりしないなどあまり不自由しない所にいて、ところが雪が降って電車は止まる、バスは止まる、自転車は乗れない、歩けば滑る。そんな最悪な条件ばっかり生活の中に入ってくるとなると、雪は雪国に生活している人は段々慣れてくるけれど、煩わしいし、寒いし、冷たいし、嫌なものでしかない。でもここへ来て、学校へ通うわけでもなくて、買い物にも行くわけでもなくて、遊びに来ているというところで、まずスイッチが入れ替わるというのもあるだろうし、あと、自分のおかれる環境が生活をするではなくて、まずは楽しむというところになっているというのも、雪だるまや雪合戦をして遊ぼうというふうに考えが変わる一つの要因なのではないかと思います。私も上越市にして、雪が降ってきたり、天気予報を見て雪だとしかめっ面をしているけれど、ここへ来ると、雪の中に飛び込んで行こうと思うし、誰かに雪だまを投げつけてやるなどと思ったり、遊ぼうという気持ちが出てくるのと同じなのではないかなと思います。

岡部：7 月とかに話し合いをしていたときに、同じように普段雪が見慣れている子が雪の活動って魅力あるのかな、こんなの申し込んでくれるのかなというように、けっこう心配していた。しかし、信大の実際の応募状況は、140 人に配って 40 人来たの。単純計算して、4 人に 1 人の募集があった。春休みでもない普通の土日に。私はこれ事態にすごい驚いて、吉川さんが言っていた雪の遊びの魅力があるんだなと思いました。うちらは普段プレーパークをやっていて、冬でも雪の中で遊んでいるんだけれど、去年は雪が降っても全然子どもが来なかった。でも今年は雪が降っても子ども達が遊び

に来る。考えると、去年の雪は子ども達にとって煩わしいものだったけれど、今年の雪は煩わしくない、楽しいものになっていたのかなと思いました。それで、このキャンプに子ども達が来て、雪が普段でも楽しいものだなと感じてもらえるようになったのではないかと思っています。

蓼沼：私が思うに、どうして雪だるまをつくるのにあれだけ夢中になれたかという理由というのはきっと、雪は一人でも遊ぶことができるというのもあるし、一人で遊んでいると絶対誰かが側に寄って来て一緒に遊ぶことができるということで、雪があることで、友達づくりのいいきっかけとか、コミュニケーションを取ることの機会づくりになったのかなと思う。

二宮：私はあまり雪に対する学習がなかったので、私は吹雪の世界を見ても雪がきれいと思えていたけれど、子ども達が雪の怖さとか煩わしさを知っているから、最初子ども達が到着して、部屋に行くときに窓から雪が吹雪いているのを見て私は、「きれいだね」と言ったら、「えっ」って言われて、バスで疲れていたのもあって、すごい嫌な顔をされ、自分の意識ととても差があった。ふれあい棟だったのですが、部屋について、今度は部屋の窓から雪を見下ろせる立場になった。そのとき子ども達は、お茶をすすりながら、「おー、景色もいいし、落ち着くね」とか言って、このキャンプで雪は嫌じゃないんだと、煩わしいものではなくて、楽しく遊べるものなんだというふうに意識の変化を見ることができてよかったです。また夜も、「今日は雪リンピックが遊べなかったから、明日は雪で遊ぶの？」とずっと言いながら消灯時間をむかえたんですよね。

北川：単純な考えかもしれないんですが、雪自体にすごい魅力を感じていて、雪ってすごく大きなものもつくれるし、雪に触っても汚れるわけではないし、普段大きな紙とかあったら何か書きたいなと思ったりとかすると思うんだけれど、そのときに、汚してはないけないとか、いろいろな制約がある中でしか活動ができないんだけれど、雪ってあまり害も与えないし、あたっても痛いけれどそれほど痛くないし、他の人から「やってはダメだよ」と言われるほどの制約がないから、いつも雪を見て遊んでいても、制約がないから飽きることがなく、自分で遊びを創り出せるというのがあるのかなと思って、雪で苦労とかしているんだろうけれど、雪が降ること自体に魅力があるのではないかと思いました。

中村(豪)：何で喜んで雪だまをつくったのかなというのを聞いて、そういえばつくっていたな、好きだなみんなと思って、特に藤岡さんの班の子が２人で西澤さんも手伝って、「とても大きい雪だるまを作ったよ」と喜んでいて、何で雪だまなんか作ってと考えていて、今回も吹雪いていたりしたら自分の班の子は、寒いから中で遊んでいる方がいいなとか、プレーホールで遊んでいるほうがいいとか、ベッドで寝ていたいというのがほとんどで、普段から雪は煩わしいという考えしかないから、外に行こうとしない。また外に出ても、雪だるまを作る行為が、毎日絶対やるわけではないし、学校行ってもそんなにみんなで作ろうということがないから、一人で外に出て雪だるまを作ろうという考えはなかなか持たないと思うし、こういう活動に来て、外に出ないといけないという状況になって、いつもと違う世界を見て、自分がいつもやっていることをやっても、いつもより人が周りにいっぱいいて、それもみんなも一緒にやって楽しくできるからということもあって、いつもと違った遊びに思えてきて、いつもと同じ

雪だるまを作っている感じでも、自分の中ではもっと違ったすごいことをやっているんだというふうになって、子どもが楽しんで作っていたのかなと考えた。他の遊びでも雪合戦でも、人がたくさんいるっていうことで子ども達が楽しんでやれていたのかなと思いました。

伴　：雪降るところの子ども達って、雪ってわくわくしないもんね。うちらのほうでは、雪が降っただけで「おー、雪だ」というふうにわくわくするしね。“わくわく”ということがここに来て、ちょうどベトベト雪で雪だるまが出来てしまって、みんないっせいに競争のようにわーと作り出してね。ちょうど僕が活動Ⅱを担当していたけれど、そのままにしておいたというのもある。本当なら時間が過ぎていたから、並んでスタートさせようとしたけれど、ちょうどコミュニケーションをつくるのにいいということで、今回自分のねらいのほうが、コミュニケーションを取ることだったこともあって、勝手な判断で20分くらい遊ばしていた。隣で山本(恭)が「何でこんに遊ぶんだ？何だこいつらは」と言っていて、自分もそう思うところもあったのですが、わくわくするものがありやってみてよかったなと思っています。

山本(佳)：雪だるまだけではなかったんですよね。雪だるまがきっかけで、A君がマッシュルームを作って、あと雪だるまをつくるのをみんな競っていた。より大きい雪だるまを作りたくて、後ろのたくさん雪があるところに、雪だるまを投げようとするけれど途中で止まってしまう。それで、雪だるまが止まったと言って、その雪に向かって、飛び込もうとする。こちらが危ない、止めろと言っているのに。でも、それを言うと子どもは、「だったら、あの雪だるまをもっと転がしてよ」と言って、一生懸命雪を固めて、さらに雪だるまを大きくしようとして雪を投げている。周りのことも雪だるま比べのようにすごくおもしろくって、それが慣れない友達同士でやっていて、その行為が言語だったのかなと思う。雪だるまがその子の個人を表していて、俺はこんなにすごいやつなんだというように見せ付けたかったりして、言葉だったのかなといろいろと思いました。

伴　：もしあのとき子どもがいなかったら、みなさんどうしていましたか。(笑) 本当は俺あれを学生だけでやりたかったんですよ。リハーサルのときに。西澤の雪だまは固くて痛いんだわ。あれを見ていて学生が我慢しているなとすごい思った。やりたそうな顔してさ。いいな。

岡部：熊大の3人が最初にリハーサルしようと外に行ったんだよね。一番最初に何をやったかといったら、「ここに飛び込んでいい？」と言っていた。飛び込ませるのが一番楽しいんだよね。

伴　：それは信州と上越での2月の下見のときに実証済みだよな。学生で、あまり雪になれていない所から来て、活動とかをやってみてどうですか。率直にどんな感じですか。

浦川：自分は生まれが佐賀で、大学が広島だから、まったく雪を見ないんですよね。今年広島で数年ぶりに積もって、15cm。それで、パニックを起こして。たかが15cm積もっただけなのに、キャンパス内に雪だるまが転がり、高さ1m弱のかまくらが作られ、授業をさぼって作っていました。それから、平面のところでスキーをやっていた人も。そんなに雪がない世界から来て、初めて来たときに、車が入ってきたときに自分の目の高さよりも高い雪の壁があることがカルチャーショックで、またここで少し外に出

てしまえば、人工物はこの建物だけで、環境が当り一面真っ白。雪もサラサラで、すごい開放感というのを感じて、踏み荒らされていない雪の真っ白なところには、やっぱり飛び込みたくなる。人が歩いているのを見たら雪をぶつけたくなる。それで、どっちが子どもなんだっていうくらい今日も、活動Ⅳの中ではしゃいでしまって、なんか雪っていいなって思いました。

影石：私徳島なんで、徳島に積もってもやっぱりちょっとなんですよね。雪だるまを作ってもすぐに溶けてしまって、でもここの雪って、いくら使っても下にいくらでもあるから、真っ白な雪がいっくらでもあるから、真っ白な雪が思う存分使えて、すごく楽しくて、今日の活動Ⅳの中でも、坂ですごい遊んでいた。我慢せずに子どもと同じようなことをしていた。ふわふわの坂で滑ったりして、また雪を固めたりもして、雪って何でもできますよね。万能なんですよね。何て万能なおもちゃなんだろう思いました。ここに来て、徳島との雪の違いを見て、雪の魅力というものをすごく感じました。

石関：私は信大なので雪の降る環境にいるのですが、今年初めて雪が降ったときに、信大でもなぜかプラザの全体メールで、雪だるま作りませんかというメールが流れ、すっごい大きな雪だるまを作っていたのを覚えています。それで、子どもが雪を見たときに、雪の厚さが違うことなどを見て、いつも雪で遊んでいる子ども達が、雪の中で違う遊びを見つけていくのを観ていて、いつもプレパで遊んでいるのに違う遊びをしていて、それができる、プレパとは違う環境なんだと思いました。

笹井：こっちに来て昨日の夜だったかと思うんですけれど、ホールからこっちに来る道でこっそり一人で写真を撮っていたんです。そこら辺の写真を 10 枚くらいは撮って、人も建物も何も入れないで、樹に積もっている雪だとか、光が差しているところだとかを撮った。そのときはまだ人が誰も通っていないときだったから、一人でわけの分からないことをやっていた。樹をおもいっきりゆすって、雪が落ちてくるのを楽しんだり、なんかすごい変なことをやっていた。雪国の子どもは雪だるまを喜んで作っていたという話に戻るのですが、写真を撮ったときもあとから考えるととても恥ずかしいことなんですが、まったく新しい環境に来て、すごく人間が素に戻ったというか、そういうのがあって、雪国の子ども達が雪だるまを作るのも、こういう環境で、知らない人達の中に入ってきたというのもあっただろうと思う。今回来てみて、素な自分を発見してしまったという感じでした。

和地：私も雪が結構降るところで、横浜で雪が降ってもあまり感動がなく、沖縄の子とか何でこんなにはしゃぐんだろうと思ったのですが、横浜とかは雪が降っても自分の使える雪が限られている。どろどろの雪は使いたくないから、ふわふわの雪を使うには、あまり大きなものが作れないとか、雪だるまとか作りたいのなら友達と一緒に作るしかないんですけれども、ここの周りはいくらでも降ってくるし、左右に新しい雪がたくさんあって、自分の好きなだけ雪が使える。また、その雪が全部きれいで、時間の制約がなくて、次は授業とかではないから、その次のことを考えずに作ることができ、夢中になって遊べるというのが、子どものいろいろな行動を引き起こしたのではないかと思います。

伴　：完全に新しい世界っていうのか、それができるとわくわくしますよね。わくわくすると自然と開放的になる。それは雪に限ったことではない。今回雪っていうことで、

新しい世界をみて、新しい経験をして、わくわくしてやりたいと思ったと思うのです。雪ではなくてもわくわくするもの、新しい経験というものがあれば、学生のうちらでも、もちろん子どもだって飛びついてくる。それが結果として、心理的な開放から、最初の友達同士のコミュニケーションにつながっていくのかなと話を聞きながら思いました。

話を変えますが、学生自身においては、何が成長したのかな。また、何が学生自身を成長させたのかな。どんな視点でも構わないので、自分自身で振り返ってみてください。分科会にもあったように、活動を通してどのように成長したのか、につなげたいと思う。

成長って何？気づきでもいいのですが。

西澤：子どもにきつく言うことがあった。例えば、ハイキングとかで一人遅れている子に対して“自分勝手な事をするなよ”といった。それは誰にも気づかれない状態で新雪にはまったら、誰も助けることもできずに大変なことになってしまうから。雪は楽しいけれども、新雪となどの場合、安全面をこわい。以前ならば、一緒になって遊んでいたけれども、今回は子どもと仲良くなったからといって、なれ合ってはいけない。雪は楽しいけれども、安全面を考えると一線をひくとことは大切だし、いつどんなときでもつたえなければいけないことがある。

中村：線引きをきびしくした。ゆきだまを顔にあてるなどのやってはいけないこと、行ってはいけない所などは厳しく注意したけれども、その範囲において自由にさせていた。叱るときはきつく叱り、それ以上は言わないようにした。二日間の中で雪上での暗黙のルールというものが子ども達に確立させることができてその事が自分の糧となった。

本薗：線引きするとき、怒るときに関しても、自分がどう思っているのか、理由をしっかり伝えることが大切だと思う。後でのフォローというよりも、自分自身が理由をしっかり持って、子どもにもその理由もしっかりわかってもらうことが大切だと思う。自分の思っていることをちゃんと伝えれば、怒るときも楽しむときも分かり合える。

堀口：雪の怖さがまったくわからなかったので、危険にかんする注意をきちんといえるかどうか心配だった。活動していても進むことをばかりをかんがえていた。その子がやりたいなと思うことに気づいていても、雪への怖さから、やらせてあげられなかったので、自分の班の子達は本当に楽しかったのだろうか考えた。他の班の“スケジュール通りに進まなくてもいいから、やりたいことをすきなだけやらせてあげた”という考えを聞いて、自分の班の子達は自分のやりたいことをやることができたのかなと思った。もっと何をしたいということを子ども達に聞いてあげられればよかった。

坂本：子どもに厳しくすることは大切だと思う。けれども、子どもは、何が正しくて間違っているかを思っているより知っている。そして、行動の裏側に隠れた気持ち（真理）がある。例えば、雪だまをぶつけてきたことは、学生にとっては痛いからやめてほしい事だけれども、子どもはいけないことと分かっているけれども、学生にもっと遊んでほしいという気持ちを伝えたいだけなのかもしれない。つまり、どこまで子ども達行動を許せるのかの範囲が大事なのではないか。

岡部：昨日の反省にあったように、6 班では、どこかへ行ってしまう子どもを認めるか認めないかについて悩んで、結局離れて見守ることにしたのだけれども、何か思うこと

はありますか。

大町：少し時間を下さい。

面高：熊本ではは、雪が舞っているだけで、雪がふったと大喜びし、雪に対して憧れがある。今回、子どもと接してうれしいということもあるし、雪にも喜び、うれしい活動だった。(雪の壁に驚いたし、写真を撮ってみんなに送ったりもした。帰って自慢をしようと思う。) プログラム（活動Ⅲ）についてですが、雪上でキャンプファイヤーをした経験がなかったので、そのことについて学んだし、他にもいろいろなことを学ぼうとしました。形には表れなかったけれども、いろいろ学べたことが、自分にとっての今回の成長ではないかと思います。

岡部：見たこともない状態の活動を作ろうとがんばりました。すごいことだよね。

大町：いつも企画をする側だったけれど、今回 2 年ぶりに班のことに集中して取り組み、子ども達をひとりひとり集中してみました。個人のしたいこと優先させた方が良いのか、みんなでやることを優先させた方がいいのか、悩みました。一日目は、男女のやりたいことの希望が違っていたので、男子はドッジボール、女子は部屋でかくれんぼをすることにしました。けれども、2 日目はみんな遊んで仲良くなった。結果的に、班で遊ぶのはよかったと思う。個人のしたいことをする時間を作りつつ、班でも遊びつつ、その時に合わせて班のサポーターが考えて対応していくことが大切だと思いました。

本薗：山本(恭)は先ほどの問いかけに関して自分なりの答えを見つけているといっていたけれども、その答えが何なのか気になる。

山本(恭)：環境とか場所、状況、子どもを取り巻くすべての環境が「遊べ！」と呼びかけている。雪がいっぱいあって、同じ年頃の子ども達がいて、子ども好きのヘンな人達もいっぱい居る。その上、学校のない休日だし、塾とかの心配もない。テレビを気にする必要もない。いわゆる、非日常の世界において、雪での遊びだけでなく自由時間の遊びでも、子ども達があれほどまでに夢中になって遊んでいたのは、子どもの本能がそうさせているのかなと思った。これだけの環境が遊びたいという気持ち（本能）をかりたて、そうさせたのではないかと思いました。

小村：雪に触れたことに関しての反省ではないけれども、考えていたことを言いたいと思います。今回の全フレに参加して、今までの自分の意識の低さに気づき、恥ずかしくなってきました。いろんな人に話をきいて、刺激を受けてばかりでした。自分の人生での目標は人にいい意味で影響を与える人間になることなのですが、出会った皆さんが自分の目標とする人なので感謝いっぱいです。自分が経験することの大切さを知り、一歩踏み出すことの力を養えたように思います。それが自分の成長です。初めての子どもとの宿泊体験の中で、自分が良かれと思ってしたことが子どもにとっては逆効果になってしまったことがあった。(こどもの手を引いて行こうとしたら、手を振り払われてしまって、悲しかった。) 子どもとの距離について考えたりもしたし、多くのことを学びました。そして、このように自分考えられようになったことも成長です。

伴：これで終わりにしましょう。お疲れ様でした。

参加児童の感想

- とても楽しい2日間だった。いっぱい遊べてうれしかった。
- 班のみんなと楽しく元気にいろいろなことをしてうれしかったです。
- 『MYOKO ゆきんこフェスティバル』に参加して、おもしろかったから、参加してよかったなと思った。
- いろいろな友達と話せたし、仲良くなれたので良かったです。イイ思い出になりました。
- 知らない人とも仲良くなれてよかった。
- 全然知らない友達としゃべったり遊んだりできて、とっても楽しかったです。
- いいともだちができてうれしかった。
- 電話番号と住所とかも聞けたから、お手紙とかもおくれるからうれしかったです。
- 友だちも、先生も、なかよくなったのに、かえるのはやたなーと思った。
- 嬉しかったことは全部です。
- ゆきんこ祭りだどんどこどんで最初のおどりはできなかったけれど、大学生のお兄さん、お姉さんに習ったらとてもゆきんこ祭りだどんどこどんがすごくおもしろかった。みんなとなかよくなれてよかったし、いろいろあそべてよかったです。
- 雪でできなかった事もあったけど、友達と仲良く、楽しく、できてよかったなぁと、思う。
- はじめて、自分より大きい雪だるまをつくった。楽しかった。
- とちゅうからぐあいわるくなったけど楽しかった。とくにもうじゅうがりと、ハイキングが楽しかった。
- つなひきでまけてくやしかったけどたのしかった。
- 綱引きで班が2位になれたことがうれしかった。
- 初めて雪の中でつな引きをしたのがたのしかった。
- 雪上探検の時、ビックリする物を見つけたりして楽しかった。
- 初めてかんじきをはいてみたら、けっこう歩くのがたいへんでした。
- ぼくの作った雪きのこが上手だとほめられた事。雪にうまってしまった事。
- 雪にはまって大変だった。
- 大学生の人が、やさしくてとてもうれしかった。
- 大学の人とお別れをすることが悲しい。
- 大学生の人は、ちょっとピシッとしていなかったので悲しかった。
- 食事がおいしかった
- 夜の枕投げが楽しかった
- 来年もまた行きたい。
- くたくた、バタバタ

～児童アンケートより抜粋～

参加学生の「感想」および「ふりかえり」

○行くまでは不安でいっぱいでしたが、参加してみていってよかったなと思いました。さらさらふかふかの雪での思い出、子どもたちとの思い出、そして立派な考え方をもった他大学の仲間との思い出いつまでも忘れません。他大学でのいろいろなフレンドシップ活動の話をきいて、広大フレンドシップと同じ悩みをもっていたり、また、ぜんぜん違う素晴らしい活動をしていたりなどを知りました。全フレに来ているのは広大でいえば幹部のような人たちが多くてみんなしっかりしていてとてもいい刺激をうけました。これからも連絡をとりあったりして、お互いの大学の活動を高めていけたらいいなと思います。

大町 真理（広島大学 3年）

○私は少し人見知りをしてしまうのですが、4泊5日の間にここまで話ができるようになったのには、初日に行ったレクがとても役に立っていたのではないかと思います。これは子どもたち同士の関係作りにも役立ったと思います。それに、子どもたちへの注意の仕方やフォローの仕方なども改めて考え、少しは自分なりに実行できるようになりました。これは分科会の発表の中から得たものです。けれどもまだまだ序の口だと思うので、しかり方やほめ方などももっと勉強していきたいし、子どもたちの心をどうやったらつかみ取ることができるか、どうやったら教えることができるか、も勉強していきたいです。また、自分の人見知りをしがちなところも直していかなければいけないと思いました。

笹井 玲加（鳴門教育大学 1年）

○今回の全フレでの収穫は、何より、私の考えの及ばない所まで考えを巡らせている方々との出会いです。子どもに対しての洞察力、発達の知識など、私がこれから目指すべき像が見えました。学んだ事は本当に言い尽くせません、感謝感謝です☆
この全フレ中に常に考えていた事としては、『全体の運営 vs 個々の子どもの楽しみ方』という所です。反省会でも何度も聞いたし、私自身それで迷う場面が多々ありました。自由時間とはいえ、できれば班のみんなと遊んでほしいような…というこちらの思惑もあり、迷ったけれど、支障は出ないかなと思って、今回はその子が楽しんでくれる方を取りました。私は『それぞれが楽しんで帰ってくれたら』という考え方を持っているけれど、いきすぎれば活動自体が×になってしまいます。それに、『ちゃんとやりとげた上での楽しみ』みたいなのもあるだろうし…結論はまだ出ていないけれど、課題が見つかったと思っていました。

小嶋 美里（横浜国立大学 1年）

○全国の学生方、先生方、そして子どもたちから学ぼうという謙虚な気持ちで活動に臨んだ。卒業前にそういう初心に戻れたことは良かったと思う。同志たちはそれぞれに私のもっていないものをもっていて圧倒された。でも、自分は自分で良いのだとも思った。そうさ、ぼくらは世界にひとつだけの花。みなさんにあえて本当にうれしかった。どうもありがとう。

坂本 琢馬（福島大学 4年）

○正直、スケジュールが詰まっていたので辛かった。これまでの全フレにはなかったことである。まあ、立ち上げた2年前と違い内容の充実も課題の中に含まれていたからだと思う。しかし、詰まってしまったからこそ、前日での急な変更などで子どもへの対応が柔軟にできなかったり、薄くなってしまったのも事実である。子どものためを考えると同時に学生のことを考えた活動をこの先作っていく必要があるのではないだろうか。個人としては叱る、誉めるのバランスに関して改めて考えさせられた。このバランスは一人でとるのが非常に難しい。また、叱った後のフォローなども他の人にしてもらったほうが効果的である。今回、学生同士が連携し合い、支えあっていく姿が見られ、自分もその中で活動できたことは自分にとって本当によい経験だった。これからも一人で全て抱えるのではなく、組織として子ども達を育てていく（おこがましいかもしれないが…）方法を考えていきたいと思う。　中村 浩志（上越教育大学 4年）

○私は、今回たくさんの出会いがありました。全フレの中で、私はたいした存在ではありませんでしたが、皆さんの存在はとても大きいものでした。先生もおっしゃっていましたが、子ども好きの人たちは同じ匂いがして、皆眠いにもかかわらず目がきらきら輝いていて、5日間とても居心地がよかったです。はじめてあった人ばかりなのに、あたたかくて、皆一つのことに集中していて、雰囲気がとても好きでした。とても大きな物を得たと思うのですが、ここでうまく言葉にあらわせないのはまだ自分の中で消化できていない証拠だし、これから子どもと関わっていく中で、少しずつ還元していけたらと思っています。皆さん一人一人がすごく大きくて、自分の存在が小さいものに感じられたこともありましたが、そんなこと考えているひまがあったら、少しでも皆に追いつけるように、今は頑張ろうと思っています。かけがえのない出会いを大切にし、これからも子どもと関わっていく仲間として一緒に頑張っていきたいです。今回参加できて本当によかったです。ありがとうございました。　二宮 理恵（熊本大学 3年）

○自分が活動の中でしっかり役立てたかは分かりません。しかし、今回の活動でまた多くの高き志を持つ同志に会えました。それぞれが思い思いの自分をぶつけ合い、ともに成長していく姿がそこにあったのではないかと思います。つきなみだけど、シンポジウムでも素晴らしい共通理解の場が生まれたと思います。学生生活最後のすばらしい思い出になりました。課題としては、その都度活動の中での、スタッフ同士の食い違いをどのように整えていくかであると思う。今回に問題があるわけではないが、これから多くの大学の参加により大きくなっていく問題のひとつであると考える。

那須 良寛（信州大学 M2年）

○やはり私にとって企画の段階からかかわって、子どもたちに対しての「ねらい」や「願い」をもって準備してきましたが、しかし実際出会った子どもたちにそれをどうやったら一泊二日という短い時間のなかで一番良い方法で体験させてあげられるのか、というところで同じ班付のサポーターと悩みました。話していて感じたことは、この全フレに参加している人たちの経験の多さでした。いろいろな人が、違った考え方、方針を持ってやっている様子は、私にとってとても大きな学びとなりました。全国の素晴らしい人たちに出会えて本当によかったです！！　森岡 恵（上越教育大学 3年）

○今回はじめて全フレに参加して、一年だけでの参加ということもあり不安だったけど、みんな温かく迎えてくれてとてもうれしかったです。すべてがいっぱいいっぱいになってしまったけど、今までの自分を見つめなおし、たくさんの刺激をもらって、5 日間で多くのことを学びました。全国に同じ気持ちでがんばっている仲間がいるということを感じることができて、これからの活動に対する勇気、やる気がわきました。今回の活動で学んだことを生かし、これからもたくさん考え、いろんな経験を積んでいきたいです。今の鳴門教育大学ふれあいアクティビティーに、私たちらしさをプラスして、次回の全フレで自分たちの活動を自信を持って報告できるようになりたいです。

野村 優衣（鳴門教育大学 1年）

○あっという間の5日間でした。学んだことはいっぱいあって書ききれないぐらいです。一番印象的だったのは2日間のキャンプです。自分の殻の中に入って、班のみんなとうちとけなかった子に対して悩み、もう一人の班リーダーと夜に本音で話し合ったことや、その子が次の日にみんなとうちとけて仲良くなったこと、自分に話しかけてくれたことなど忘れることの出来ない思い出です。改めて自分のだめなところを見つけて、見つめることが出来ました。今回初参加ということで最後までどこかお客さん的なところを感じたので来年度はもっともっと積極的に参加していきたいと思いました。ばんさん・けいこさんを始め色々な人と出会えてよかったです。本当に刺激を受けました。これからの活動に活かしていきたいと思います。ホスト大学の皆さん本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。

浦川 玄記（広島大学 3年）

○全フレに参加して、自分は本当にまだまだ成長しなくてはならないところが多いなぁと気づかされました。子どもとのコミュニケーションのとり方や、学生との連携の仕方、そして何より意識の高さの違いや気持ちの持ち方の違いには連日衝撃を受けていました。もっと成長したい！と気づいたこと自体が自分としては成果だと思いました。しかしそこがスタート地点であり、全フレで受けた刺激・影響を生かしてどれだけ積極的に色々なことを吸収していこうとするかが課題となると思いました。

小川 葉月（横浜国立大学 1年）

○初めて他大学の人と一緒に活動して、多くのことを学びました。何の力もない私が PD というとても大きな仕事をやらせてもらえて、失敗ばかりを繰り返し多くの人に迷惑をかけながらも、自分の課題を見つけることができました。企画力の乏しさ・人（特に子ども）を引き付ける話し方・子どもに対する接し方・失敗した後の気持ちの切り替えなど、今後積極的にたくさんの活動に参加することで自分の力にしていきたいと思います。全フレに参加して多くの人に助けられ、本当にお世話になりました。言葉では言い表せないほどすごく楽しかったです。どうもありがとうございました。

渋谷 梓（熊本大学 1年）

～学生アンケートより抜粋～

想い出☆写真館

7月28日

12月23日

2月18～19日

準備会・下見

3月6日（木）

♪学生交流♪

さあ、みんなで

全フレッツゴー！ゴー！！

3月6日（木）

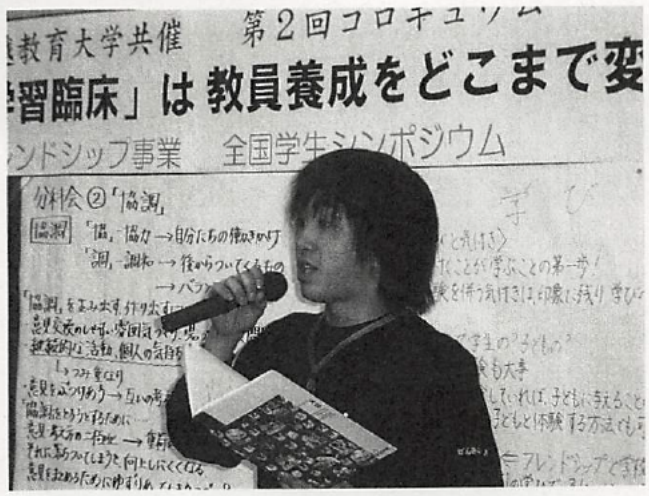
☆レセプション☆

信州産新潟コシヒカリ企画

こりゃうマイ！！感謝をコメて
いただくベエ♪

3月7日（金）

学生シンポジウム



3月8日（土）

MYOKO

ゆきんこフェスティバル

ゆきりんぴっく

in 妙高

U711

食事★風景

3月8日（土）

ゆきんこまつりだ！

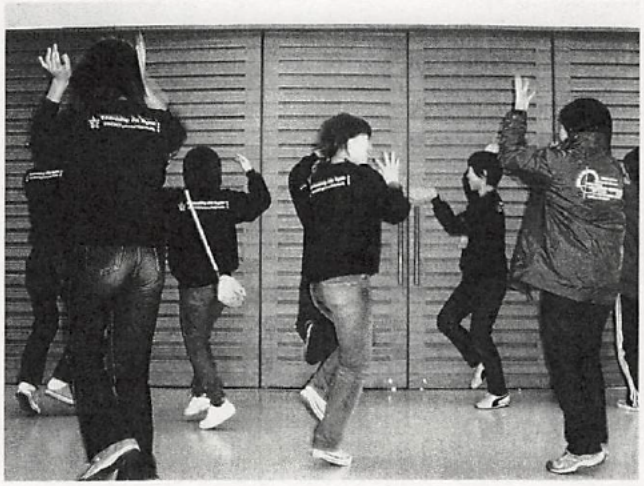
どんどこどん！！

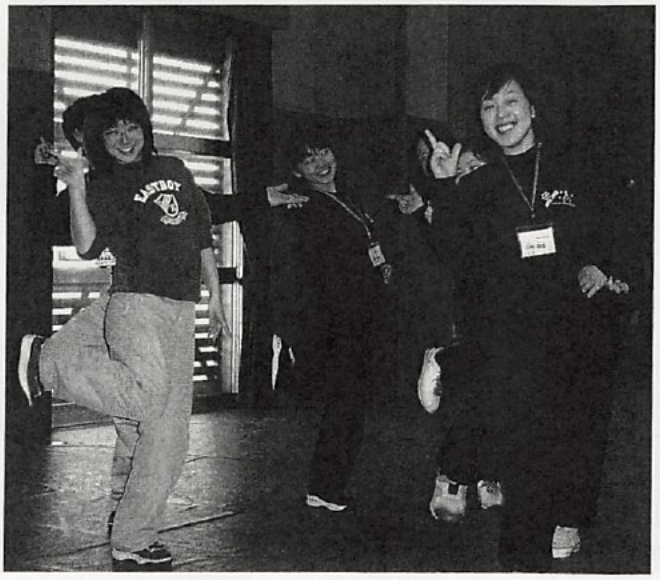
☆★キャンドル★☆

3月9日（日）

妙高雪上探検隊！

バイバイ ゆきんこ♪





Web上では非公開

Web上では非公開

☆★MYOKO ゆきんこフェスティバル 参加学生名簿★☆

氏名	ニックネーム	大学	学年	専攻	担当	事務局
中村浩志（なかむらひろゆき）	ぴろ	上越教育大学	4	算数	8班	バス
伴　峰昌（ばん　みねまさ）	バンバン	上越教育大学	4	理科	本部	統括
渡邉悠子（わたなべゆうこ）	ゆうゆう	上越教育大学	4	家庭	救護	シンポジウム 救護・会計
飯森玲子（いいもりれいこ）	モリ	上越教育大学	3	国語	12班	学生交流 児童募集
森岡　恵（もりおか　けい）	ケチャ	上越教育大学	3	国語	4班	バス
中村豪宏（なかむらたけひろ）	GO	上越教育大学	2	体育	10班	レセプション 実行委員・報告書
吉川千晶（よしかわちあき）	ちあねぇ	上越教育大学	2	国語	本部	物品・記録
中野時啓（なかのときひら）	おじじ	上越教育大学	1	*	6班	懇親会
南波瑞穂（なんばみずほ）	みっちゃん	上越教育大学	1	*	2班	セレモニー
那須良寛（なすよしひろ）	なすび	信州大学	M2	学校教育	1班	バス
岡部桂子（おかべけいこ）	くろすけ	信州大学	4	教育実践	本部	統括
西澤俊輔（にしざわしゅんすけ）	にっすぃー	信州大学	4	理数教育	3班	懇親会
蓼沼夏子（たでぬまなつこ）	なっち	信州大学	3	生活科学	5班	セレモニー
那須紋子（なすあやこ）	ビーナス	信州大学	3	生活科学	7班	レセプション 児童募集
藤岡恵美（ふじおかえみ）	えみーじょ	信州大学	3	生活科学	9班	学生交流
山本真望（やまもとまみ）	マミンコ	信州大学	3	教育実践	救護	シンポジウム 救護・会計
石関千絵（いしぜきちえ）	にゃんこ	信州大学	2	社会科学	11班	バス 実行委員
岩堀耕平（いわほりこうへい）	へーちゃん	信州大学	2	野外教育	本部	物品・記録
小村弥生（おむらやよい）	やよい	熊本大学	3	家庭	2班	実行委員
二宮理恵（にのみやりえ）	きんちゃん	熊本大学	2	英語	10班	
堀口沙織（ほりぐちさおり）	さおりん	熊本大学	2	教育学	7班	
面高有作（おもだかゆうさく）	おもやん	熊本大学	1	心理	本部	
渋谷　梓（しぶや　あずさ）	あずさ	熊本大学	1	心理	本部	
影石友佳（かげいしゆか）	かげちゃん	鳴門教育大学	1	国語	4班	
木下めぐみ（きのした）	めぐりん	鳴門教育大学	1	理科	11班	
笹井玲加（ささいれいか）	いかちん	鳴門教育大学	1	国語	1班	
野村優衣（のむらゆい）	のっちん	鳴門教育大学	1	図画工作	7班	実行委員
山本佳代（やまもとかよ）	かよ	横浜国立大学	4	美術	本部	
山本恭兵（やまもときょうへい）	きょっぴー	横浜国立大学	3	教育基礎	本部	実行委員
小川葉月（おがわはづき）	はーちゃん	横浜国立大学	1	*	2班	
小嶋美里（こじまみさと）	こじこじ	横浜国立大学	1	*	3班	
和地めぐみ（わち）	わっち	横浜国立大学	1	*	8班	
浦川玄記（うらかわげんき）	げんき	広島大学	3	*	9班	実行委員
大町真理（おおまちまり）	まちまり	広島大学	3	*	6班	
北川美奈子（きたがわみなこ）	みーな	広島大学	3	*	4班	
加登脇大地（かどわきだいち）	かときち	広島大学	2	*	12班	
本薗忠士（もとぞのただし）	ZONO	広島大学	2	*	5班	
坂本琢馬（さかもとたくま）	たっくん	福島大学	4	発達臨床	11班	実行委員

あとがき

信州大学教育学部附属教育実践総合センター講師　谷塚 光典

昨年３月の第２回全国フレンドシップ活動（熊本）において第３回全フレを信州大学と上越教育大学が中心となって妙高を会場に開催することを表明して以来、両大学を含む７大学の学生・教官と交流を重ねながら全フレを企画・運営してきた。学生を支援してきた教官として、次の４者に感謝の言葉を申し上げることで、あとがきとしたい。

まず、全フレに参加した学生を指導されている、各大学フレンドシップ事業担当の先生方そして各地域のフレンドシップ事業協力教育機関のみなさまに感謝したい。今回参加した学生は、フレンドシップ事業の第一の目的である「子どもたちとの触れ合い」を十二分に経験してきており、各大学で中心的な役割を果たしてきた３・４年生も多くいるため、ある程度は「任せっきり」にしても安心できる学生集団であった。そのような安心感を持てるのも、各大学独自ながらも情報交換や学生交流を重ねながら進化と発展を図ってきたフレンドシップ事業６年間の継続的実践の成果に負うところが大きいであろう。

次に、「MYOKO ゆきんこフェスティバル」に参加した子どもとその保護者の方々に感謝したい。１泊２日とはいえ、「信大ＹＯＵ遊広場」や「学びのひろば」でも活動している学生スタッフを信頼して、大事なお子さんを送り出したのである。冬季の宿泊体験活動であり雪上や屋外での活動が中心だったので、養護教諭２名に支援をお願いしたり学生スタッフ用救護マニュアルを作成したりするなど、子どもと学生とが安心して活動できる環境整備に努めたつもりである。お陰様で大きな事故や怪我もなく、全フレを進めることができた。これからも、各大学でのフレンドシップ事業に是非参加していただきたいと願う。

そして、第３回全フレを共につくり上げた学生諸君に、最高の賛辞を送りたい。学生スタッフはみな、各大学のフレンドシップ事業で活躍しているメンバーばかりである。しかしながら、他大学学生との交流や意見交換を通して、新たな気づきや衝撃の連続であったことだろう。教師を目指す仲間どうしで互いに刺激し高め合うことで、経験幅や視野を広める契機を得たに違いない。

このように学生交流は軌道に乗った。あとは、教官間の研究交流をより実あるものにする必要があろう。特に、経験の積み重ねをいかに再構成して学生の成長へとつなげることができるのか、その体系を構築し提供する必要がある。自由に使える時間を多くもつ学生ならではのことであるが、ミーティングや反省会の進行方法や内容、時間の長さなどに、向上の余地が感じられるところである。しかしながら、ただ実践するだけではなく、実践と理論との往復運動の場を確保するには、リフレクションの場面を設定し支援していかなければならないであろう。

最後に、第３回全フレ開催地である妙高の大自然に感謝の意を表したい。雪を見慣れている長野や上越の子どもや学生でさえ、あれだけの雪を目の前にすると、はしゃぎ放題であった。雪に限らず、各地の大自然の中でもっともっと自然体験して欲しいものである。

第３回全国フレンドシップ活動「MYOKO ゆきんこフェスティバル」。子どもたちとの、学生たちとの、そして、妙高の大自然とのふれあいは、フレンドシップ事業を支援する立場の私にとっても、かけがえのない体験であった。前述の皆様方に御礼と感謝の気持ちを表して、そして第４回全フレの成功を祈念して、本報告書のあとがきとしたい。

編集後記

おかげさまをもちまして、第3回全国フレンドシップ活動「MYOKO ゆきんこフェスティバル」を無事に終えることができ、また、先の活動の軌跡、成果や反省点、参加学生の想いを綴った報告書を作成することができました。

まずはじめに、誤字や脱字、書式の不揃い等の不備な点が多々ありますことをお詫び申し上げるとともに、ご了承いただきました上、ご指導よろしくお願いします。

ここで、担当学生から一言のべさせていただきたいと思います。

ようやく編集後記を書くことができて、ほっとしています。振り返ると、何も分からない私は多くの人たちに助けてもらってばかりでした。担当学生といえども、私以上に編集委員の仲間たちもがんばっていました。一緒に徹夜をしたり、嫌な顔ひとつせずに仕事を全面に引き受けてくれたり、私のわがままに笑って付き合ってくれた仲間たち、そして先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

私にとってこの報告書は、おもいっきり遊び、考えた五日間を思い起こすだけでなく、全国各地に広がる仲間“全フレっ子”のがんばっている姿や編集作業の中で感じた仲間たちの優しさに触れることのできる一冊です。大げさかもしれませんが、この報告書が自分自身だけでなく、みんなに☆POWER☆を与えることのできるものになれたらいいなと思っています。　　蓼沼 夏子（信州大学 3年）

同じくここまで作業を進めることができて、ほっとしています。大変な作業だったけれど周りの多くの人たちの助けをもらい、すばらしいものに出来上がりました。この一冊には、全国のみんなの準備期間から五日間の思い、それから編集に携わった人たちの思いがたくさん詰まっています。私にとっても，全国のみんなにとっても大切な一冊になったのではないかと思い、そうなるよう願っています。迷惑ばかりかけてしまいましたが、この編集に携わることが出来てよかったです。これが今年から来年，先輩から後輩へのメッセージとなって、新しい★POWER★を生み出していくと思います。最後に，報告書作りに協力してくれたみなさまありがとうございました。　　中村 豪宏（上越教育大学 2年）

最後になりましたが、本報告書を作成するにあたり、ご多忙中にもかかわらず原稿を寄せてくださりましたみなさま、至らない私たちにご指導、ご協力してくださりました先生方に厚くお礼申し上げます。また、編集委員の仲間たちにも大変感謝しております。

<編集委員>

蓼沼 夏子（信大 3年）　中村 豪宏（上教大 2年）
飯森 玲子（上教大 3年）　花村 尚美（信大 3年）
増田 美和（信大 3年）　森岡 恵（上教大 3年）　吉川 千晶（上教大 2年）
中野 時啓（上教大 1年）　南波 瑞穂（上教大 1年）　谷塚 光典（信大 教官）

平成 14 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書

第３回全国フレンドシップ活動
～MYOKO ゆきんこフェスティバル～

2003（平成 15）年 3 月 31 日　発行

編集・発行　信州大学教育学部附属教育実践総合センター
〒380-8544　長野県長野市西長野 6－ロ
Tel＆Fax：026-238-4242
E-mail：yatsuka@gipnc.shinshu-u.ac.jp（谷塚）
上越教育大学学校教育総合研究センター
〒943-0834　新潟県上越市西城町 1 丁目 7－2
Tel：025-525-9147／FAX：025-525-9860
E-mail：kamada@juen.ac.jp（釜田）

印刷　信教印刷株式会社
〒381-0022　長野市大豆島東沖 4321

Friendship☆Network

http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Lounge/8600/